

ここにいても旅はできる

目次

プロローグのようなもの

眩しく深い街での出逢い

車中にて僕は彼女と会話をする

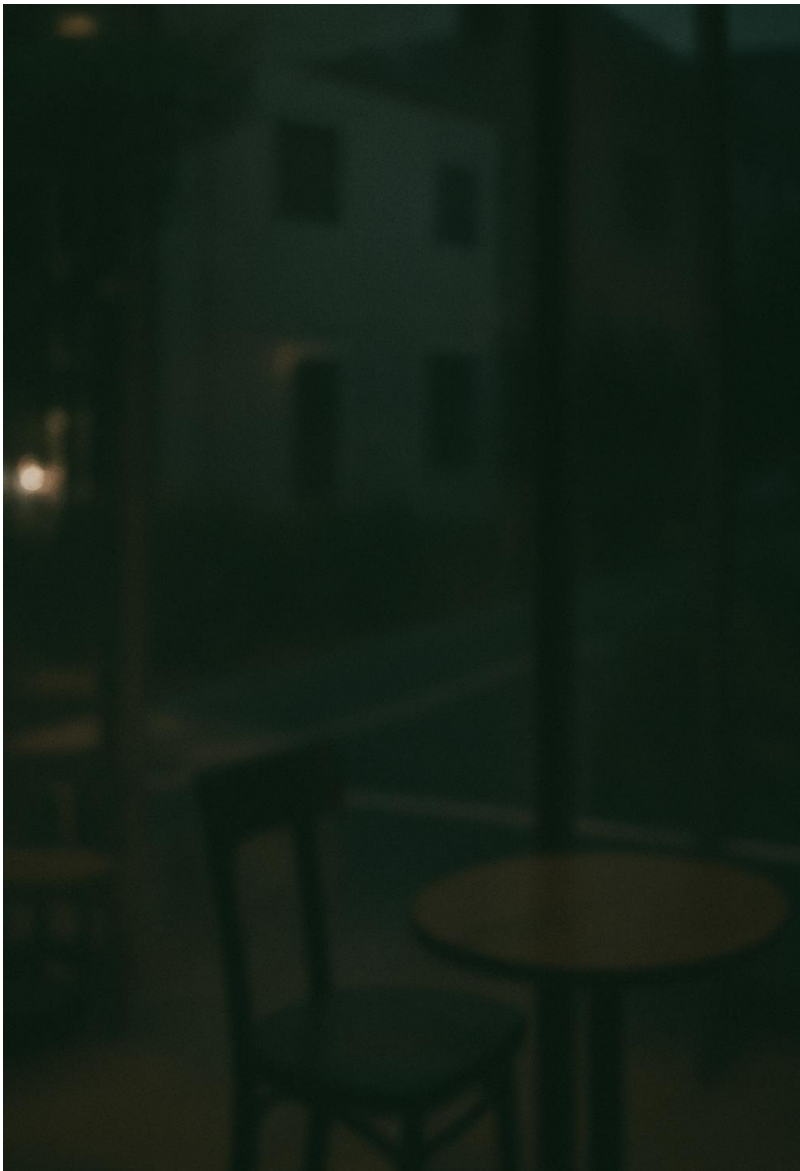
僕たちはスツールに並んでウイスキーを飲む

微睡の中の出逢い

まるで二つの葉を提示されているかのように

モダンで瀟洒な建物の中での一夜

そしてまた一日が始まる



プロローグのようなもの

「ねえ、どこに向かっているの」少女が聞いた。

「わからない。でも、ありきたりな言葉かもしれないけれど、まだ見たことがないところへ行ってみたいんだ。」僕は答える。それと共に僅かばかり右足を強く踏み込む。それに応じてメーターは微かに震え、車は速度を上げる。道はどこまでも真っすぐ続いている。周りは見渡す限りの草原が広がっていて、そのなかを、今僕達が進む道は貫いていく。

どこか遠くへ行ける。この道を進んでいけばどこかへ行けることができる。まだ見たことがない景色を求めて。何か日常を忘れることができるような景色、言うならば忘我をもたらし得る景色、そんなものを求めて僕達は進む。

扉が開くと、肌を刺すような空気が温もりを追い出そうとばかりに吹き込んできた。僕は思わず肩を上げ、コートの中に縮こまる。そんなこともお構いなしに風は通り続ける。空は晴れている。雲一つなく見事なまでに透き通って見える。空港の建物の隙間からわずかばかり見えたに過ぎないが、それでも否応なしに気持ちは高ぶる。太陽の恵みを全身に満遍なく享受しようと、たったいま縮こまらせた身体を、少し広げ腕を伸ばす。何時ぶりだろう。記憶を辿って見たがそれらしきものは、その面影すら残していなかった。同じ便で到着した人たちが続々と脇を通り抜け、隔絶された地へと流れ込んでいく。どこか空港特有の高揚感を滲ませた表情のままに。しばらくして寒さになれると僕は大きく息を吸い込み、そして吐いた。肺の中まで、その肺胞の一つ一つに新鮮な冷気を孕んだ空気を送り込む。

この感じ。遠くまで来たって気がする。

そのまま空港の到着ロビーから一歩出たところで辺りを見回す。これから行く人達を下ろし、新たに来た人を迎えるための三車線の一方通行の道路の向こうに、駐車場が広がっていた。そのさらに奥は空港の建物群がそびえているのだが、その脇に目をやると来訪者を歓迎せんと、陽の光を存分に浴びて鮮やかな緑を照らしている山がそびえている。上にはやはり雲の穢れ一

つない空がどこまでも果てしなく続いている。そこにまるで空間の識別など存在しないかのよう
うに。僕は別に山が好きなわけではない。寧ろ山に向かうよりかは海に向かうことの方が多い
のだが、それでもこのときばかりは山に慕情のようなものを抱いてしまう。

100mほど右手の柱の手前に黒のアルファロメオ159が停まっている。数世紀前からそ
こで僕を待ち続けていたかのように、そこにあるのが至極当然のような雰囲気醸し出してい
る。僕はそこへ向かって歩を進める。少し近づくと助手席に少女が座っているのが見えた。ど
うしてこの距離から、それが男性あるいは中年の女性ではなく少女だと確信を得たのかはわか
らない。ただ何となく彼女が少女であって然るべき気がしたのだ。まだ少女の顔ははっきりし
ない。やがて少女の顔つきがはっきりと判別できる距離に達すると、僕ははっと息をのんだ。
率直に言うと端正だったのだ。いや、端正とだけでは足りないかもしれない。在るべきものが
在るべき場所に在るべき程度に存在している。そこに不整合と言う概念は微塵も感じさせない。
街で彼女を見かけたならば、人は不随意的に彼女を目で追ってしまうだろう。だからといって
人に緊張感をもたらすタイプの整い方ではない。それはある種の懐かしさを抱かせるような整
い方だったのだ。ここまで美しい少女はなかなかいないだろう。車に到着すると僕は歩道から
ドアを開けてそのアルファロメオに乗り込む。(そのアルファロメオは左ハンドルだった。) シ
ートの色は茶色。正式には何かイタリア特有の名称があるのかもしれないが、生憎僕は詳しく
ない。装飾の類やドイツ車のような独特なおいもない。ただ、ホイールは黒に塗色され、お
そらく若干のインチアップも行われているのだろう。シンプルだが持主の拘りが随所に見受け
られる。

「こんにちは」少女が僕の顔を見て言った。顔から浮かぶ印象とは対照的に少女の声は僅かに
かすれていた。だが、決して不安を覚えるようなかすれかたではない。寧ろ聞き心地はこちら
の方が良いのかもしれない。高さはややソプラノよりのアルト。

「こんにちは」僕が答える。

「よく来たわね。会いたかったわ。」

「ああ、僕もだ。」

フロントガラス越しにはよくわからなかったが、いま隣の席に座って初めてその少女の全貌が目に入った。彼女は見たところ16歳か17歳あたりで、ウエストの辺りにベルトが施された、白のロングのワンピースを着ていた。靴は隠れていてよく見えない。車と同じく装飾の類はつけていない。首がスラッと伸びていること、そして、座席の足元が少々窮屈そうなことから見ても、相当背が高いと窺える。隣で見て改めてその美貌に気が付く。初めてあったはずだが、以前どこかで出会っていたような感覚を覚える。それは少女が持つ雰囲気によってもたらされる感覚なのだろうか。どこか懐かしい感じがする。その場所にずっといたい、包まれていたいと思わせてくれるような。

「どこに行くか決められた？」彼女が言う。

「いや、まだ決めていない。でも、そのうちわかってくると思う。ある種の啓示みたいに。」

「そうね、宿命的なものだから。」彼女が一呼吸おいて続ける。「別に迷ってもいいわ。そういうふうに関わられたことであって、私も個人的に嫌いではないから。」

僕は頷いてエンジンのイグニッションキーを回す。年式の古い車やキャブレター特有のキュルキュルした音も無しに。アクセルを少し踏み込み、ふかしてみる。足の動きに寸分も違わずタコメーターが軽やかに跳ね上がる。リアからは余力をもった咆哮が聞こえる。車のプレイヤーからはマッコイ・ターナーのボンボヤージュが流れ出す。悪くない。

「じゃあ、行くよ」僕はギアを一速に入れながら言う。少女が僅かに頷いたのを確認して、アクセルを踏み込む。

速やかに景色が、次の景色に取って代わられていく。そこに一切の惜しみは感じられない。早く新しい景色が見たいという気持ちが先走り、心地よくその変遷を楽しめている。景色もそうされることを望んでいるのかもしれない。何ら躊躇もなしに過ぎ去られることを。空にはや

はり雲一つ存在しない。雲という概念はどうやらここには存在しないようだ。果てしなく広がる真っ青な空に、遮るものはない。ただ純粋な空がそこに存在するだけだ。

車は速度を一定に保ったまま、ただひたすらにその歩みを進めて行く。乗り心地は悪くない。時々路面の凹凸を直に伝えることがあるが、それがいいアクセントになっている。V 6 エンジンは心地良くその音を車内に響かせ、自然吸気ならではの俊敏なレスポンスを感じさせる。日本車にはない、どっしりと構えている部分もありつつ、カーブではその面白味を遺憾なく発揮する特性を見せてくれる。

地平線まで道路が真っすぐに貫いており、道路によって大地が垂直に分断されている。前を行く車も対向車も見当たらない、道を行くのは僕たちだけだ。道路の右も左も草原がただひたすらにその領域を伸ばしており、申し訳程度にぽつりぽつりと建物が点在している。草原の彼方には、先ほどの山と新たな山々によって形成された山脈が見える。俯瞰的な目で捉えるといま僕たちがいる場所は、山脈に囲まれた形になっているのだが、何しろその前に広がる草原地帯が広大なため、圧迫感あるいは閉塞感といったものはつゆとも感じない。むしろ開放的な気分だ。ここでアレサ・フランクリンのシンクでも流したら、きっとどこまでも行ける気がするのだろう。その力強い声に押され、どんなことでもやれそうな感じ。かつてそういう類のものに、ある種の憧れのようなものを抱いていた時期もあった。そんなものはとうの昔に忘れていたと思っていたのに。

僕は車のウィンドウをほんの少しだけ下げる。その途端冷たい風が流れ込み、風音が現れる。髪が風にあおられてなびく。顔を撫で、肩を通り過ぎて、風は車内の空気を更新していく。そこに残されたものには、一切の気も留めずに。

眩しく深い街での出逢い

僕は夜の街を歩いている。狭い道の両側にひしめくビルの際間から見える狭い空には、更に背の高いビルの群れが見える。まるで際限なくそれが続いているかのよう。目をくらませるほどのヘッドライトを携えた数多の車が、こっちへむかって通り過ぎていき、反対に真っ赤な灯りを引きずった車が僕の向かう方にゆったりと進んでいる。ビルから発せられる光と、車から発せられる光とが、協働して加速度的に夜の闇をその領域から追いやっている。車道の脇にある、これまた狭い歩道には、帰宅ラッシュを大分過ぎた時間のためか、あまり多くない人が歩いているが、それでもやはりひしめいているという印象をもたらす。車道と歩道を分断している部分には、申し訳程度の植栽があるが、可哀そうに、これでは休まる暇がない。まあ、それは人間も同じか。

そんな物思いに沈みながら、一定の歩調で僕は歩いている。やがて大きなターミナル駅に近づくにつれ、人の数はそれに比例して増えてきたが、これもまたいつもの光景だ。この街には人が存在しない部分はない。どこにいても人がいて、人が集まる部分にはさらに多くの人が集まって来る。特に何かある訳でもないのに。飽くまで一般論に過ぎないが、集まり過ぎたものにろくなことは起きない。いつか限界を迎えるんじゃないだろうか。

そんな光景を尻目に駅の手前の公園に入る。ここはこの街で唯一とっていいくらいの、闇が勝っている場所だ。その一帯のみ、吸い込まれるような闇に覆われている。遊歩道に沿って等間隔に置かれた街灯が、頼りない灯りを足元に届けているが、公園にはそれで十分だ。照らし過ぎることもろくなことじゃない。見たくもないものまで見えてしまう。芝生の広場を囲んだ形になっている遊歩道を進み、森のような外観をなしている一帯に向かう。この街から一歩出ればそれはちゃちな森、森のようなものに過ぎないが、この街では数少ない立派な森なのかもしれない。

そこに整備されたベンチに座り、噴水の向こうに見える、随一のビル群を見やる。それらは競い合うように空に向かって伸びており、自らの存在を周囲に知らせるため、あるいはその

内部でひしめき合っているものの正体を現すために発光している。ビルが一つだけ建っていたら街のシンボルになったのかもしれない。しかしこうも林立していると、どれがどれだか。どれも同じ向きを向き、似たような外観を呈し、似たような高さに伸びていて、これといった特徴が見受けられない。確かに、初めて見た際には、立派なものだなと感じたが、こうも常に視界の隅に入り込まれると、ただの圧迫する存在に成り下がってしまった。

しばらく座っていると周囲から音が消えていることを実感する。厳密に言えば、あのビル群の下にあるターミナル駅から、遠い海鳴りのような音が微かに響いているのだが、公園の外に比べると圧倒的に音は少ない。何か大きな装置で音が吸い込まれたかのようにっており、ある種凜とした雰囲気が漂っている。厳かとも言えるべきか。

果たしてあそこに戻るべきなのだろうか。今更戻ることにはできるのだろうか。戻ったとしてもうまくやっていくことはできるのだろうか。そうした考えが常に頭の中を駆け巡る。回路が擦り切れてしまったかのように。茫漠とした不安がふとした瞬間に押し寄せてくる。何とかしなければと、あがけばあがくほど、状況は複雑化していく。その中で自分はますますがんじがらめになっていく。身動きが取れなくなっていく。

始めに朝起きることが億劫になった。それが悪い兆候だとわかっていたが、自分ではどうすることもできなかった。早い時間に目覚しをかけても、解除する時間はどんどん繰り越されていき、やがて限界に達した。そのうち、日常において閉塞感を覚え始める。何をやっても楽しくない。同じことの繰り返し。日々がその彩色を失っていく。知覚機能がショートしてしまったようで、外部からの感度が鈍化していく。代わりに内部からの感度は鋭敏になっていき、ほんの些細なことで他者あるいは自分に攻撃を行う。したくもないのに、本来なら調和を求めているはずなのに。そう、本当の自分はこうではないのに。やがて最低限の活動しか受け入れなくなってしまう。やろうと思ったことができない、できなくてまた自分の情けなさを責める。こんなこともできないのか、他の人はできていることなのに。

こうなるともうあとは寝るしかない。身体からはそれ以上の活動をする気力が枯れ果ててしまう。大半の時間を寝ているのかそうじゃないのか蒙昧な時間に費やし、必要最低限の排泄と

食事を行う。植物のようにぴくりとも動かない。そうして時間だけが過ぎて行く。ただ、その過程にはとてつもない罪悪感と苦痛が伴う。こうしなければならない、何とかしなければならない。でもそれができない。かつてはとても簡単なことに思えたのに、今では全身全霊を以てしても成すことができない、途方もない道のりのように感じてしまう。それを前にして、ただ絶望に打ちひしがれるしかできない。全てに対して、この世に存在するもの、あるいは自分自身に。そうしてまたベッドに戻っていく。

意識が目の前に戻って来た。しばらくの間、またいつもの回想に潜り込んでいたことに、ふと気が付く。こんなところに戻って来たところで、と心の中で唾棄する。そして僕はベンチから立ち上がり、前を向いて歩き始める、駅に向かって。目的はない、ただ何となくそちらへ向かった方がいいような気がしただけだ。セイレーンに吸い寄せられる船乗りのように。公園の遊歩道はやがて終わり、交差点に差し掛かりこちら側に戻って来る。その境界の膜を通り抜けた瞬間、街が発する凄まじい音が蘇る。車が訳もなく進んでいく音、密集した人々が思い思いに発する音。それらが四方八方から飛んできて、またそれを反射することで無秩序的に音が散乱している。それだけの音に囲まれていてよく発狂しないものだ、とほんのひと時だが隔絶された静寂にいた僕は改めて思う。

足取りは何故か軽い、かつてない程に。その理由は検討もつかないし、あえて探ろうとも思わなかった。同じ方向に進みながら、似たような色合いの服を被った人々の集団に交じり、それらを時々追い越しながら進む。やがて猛烈な光を頭上からよこしてくる地下歩道に入る。その光のおかげで、この場所には昼も夜もその概念が存在しない。脇に縮こまって寝ているホームレスの集団にチラッと目をやるが、何を思うでもなく足早に通り過ぎて行く。駅に近づくにつれ、心臓に向かう静脈のように、似たような地下道を何本か吸い込んでいき、それに比例して人の数も溢れて行く。いずれの地下道からも人の群れが湧きだしてくる。だが、不思議なことに溢れかえって氾濫することはない。ともすると、澱んでいる場所が目に見えない部分にはあるのかもしれないが、いまのところ概ね滞りなく流れている。やや不自由を感じる程度に過

ぎない。それも歩みに支障をきたす程ではなく、そこはかたない圧迫感を感じる程度だ。

徐々に人の流れは巨大に緩慢になりつつ、一つの大きなベクトルを描き、巨大な駅の入り口に辿り着く。大量の人を吸い込むと同時に、同等あるいはそれ以上の人を吐き出して、この街の均衡を保っている機関だ。ひと時の休息を与えられることもなく、自動改札機は巨大機関の末端の構成員として、人の流れを創り出している。僕はその潮流に逆らうことなく、改札を通り過ぎる。改札の中は、それまで巨大な流れに沿って歩いていた人の群れが、突如としてその流れを失い、各々の実存のままに従って移動し始めることで、カオスの様相を呈すが、ある種の秩序も同時に保っている。そのため、混迷な巨大迷路が瞬時に形成され、その次の瞬間にはまた別の巨大迷路が形成されという作業が、永遠と繰り返されるが、その迷路の中では、経路の一つ一つが絡み合うことはあるものの、交わったり消滅したりすることはない。

そうして僕は、その迷路を通り抜け、駅のホームへと続く階段へと辿り着き、歩みを進める。その足取りは軽いまだ。これほど楽な気持ちになったのは、何時ぶりだろうか。その記憶すら薄れている。今なら何でもできそうな気がする。全盛期のナポレオン軍のような気分だ。道行くものを圧倒し続け、その背後には何も残さない。そんな舞い上がるような気分を引き連れて、ホームへの階段を昇る。二つの路線が混じり合うホームへと続く階段は、この街へ帰り着く者と、かりそめの訪問を終え去る者とで、綺麗に二分され、その境界が見て取れた。僕は去る者達の方へ加わり、その流れに押し出されるようにホームへと上がる。そこは電車を待ち受ける人々が大量に居座っており、冷戦下のソ連で配給を待つ人のように、みな暗い顔をして、それぞれが待つべきものを待っていた。人の隙間を人で埋めるようにして、広いとは言えないホームから、空の領域を奪っている。僕はそのうちに見出した僅かな隙間に入り込み、次の電車を待つ。隣のホームには、快速電車が猛烈な音と共に滑り込み、その中に充満していた人の一定数を吐き出し、しばらくしてそれ以上の人をかきこんで、またけたたましい音を発して、暗闇の中に吸い込まれていく。そのさらに向こうのホームでは特急電車が悠々と鎮座しており、まだしばらくある発車時間までの気休めを楽しんでいた。車内にはちらほらと人が点在して座っており、これまた悠然として束の間の睡眠をとっている人などもいた。

やがて、僕が待つホームに電車が来ることを周知させるアナウンスが鳴り響き、俄かに人の群れに動きが加わる。こんなにひっきりなしの間隔で電車が来るのだから、待つというほど待ってもいいはずなのに。余程この街から早く抜け出して、自らを待つはずの暖かい場所に帰り着きたいのだろう。程なくして、暗闇から目を眩ますほどの光と、地の底から響くような音を携えて、ホームに電車が滑り込んでくる。徐々にスピードを緩めて行き、やがて完全に停車する。中は、ラッシュ時間を少し過ぎた頃だからか多くはないが、それでもやはり座席を埋める程の人は乗り込んでいる。

ドアが開くとともに、その席を埋めていた人の半分ほどが降り、僅かな停滞の後に、ホームに並んだ人が車両に流れ込んでいく。列の末端のほうに居た僕は、ゆったりと前進していくが、車両の手前でホームに立ち止まる。僕の後ろに居た人は、迷惑そうに僕をよけて、車両に乗り込んでいき、僕がいる部分に流れの沈殿が生じるが、やがてその沈殿を生み出す、人の流れ自体が終わり、電車の出発を知らせるアナウンスが響き渡る。駆け込み防止を呼びかけるそのアナウンスを無視して、何人かが車両に飛び込んだ後、電車は口を宿命的に閉じる。そして再び轟音と共に駅から去っていく。

ホームに取り残された。電車が去ったばかりのそこに、もうすでに人の流れが生まれ始めている。どこからこの人たちは来るのだろう。途切れる事なく人を生み出す装置がどこかこの街には存在するのかもしれない。そこではブルーのユニフォームを着て、同じくブルーの帽子をかぶった何百人もの作業員たちが、黙々と要素を入れ込み人を産出し続けている。空を見上げると真っ黒な空が、そこに浮かんでいる。星も月も、あるいは何らかのしるしも持たずに。ただの真っ暗闇に、背の高いビル群が向かっている。まったくなんて狭い空だ。

僕の後ろにはもう人の列ができ始め、今日何度もこの場所で行われたであろう電車待ちが、また行われる。列の最前線からは、ホームの下に敷かれたレールがよく見える。前の駅とこの場所と、その次の駅を結ぶレールが見える。ただそれだけのものに過ぎないが、これがなければどうなるのだろう。おそらく筆舌に尽くし難い混乱が生じるが、それは最初のことだけで、徐々にその状況は受け入れられていくのだろう。水に生まれる渦のように、やがては元の状態

に戻るのだろう。何もなかったことになって、それが当たり前のものと捉えられていく。いや、ひょっとすると最初の混乱すら生じず、全ては思い過ぎしのうちに終わるのかもしれない。何か確実に起こったはずなのに、それが認知されることはなく、世界は平然とその歩みを進めて行く。まあ、実際にレールが失われてみないとわからないんだけど。

レールをじっと見つめ、その純粋な金属に意識のほとんどが向かう。

楽になるのかな？

そんな思いが浮かぶ。初め、それは意識の一角に浮かんだものに過ぎなかったが、徐々に勢力を加速度的に広げていく。猛烈に飢えた動物の前に、肉を放り投げたような勢いで。その思いは、他のあらゆる考え（別に大したものはないが）を飲み込んで、やがて僕を支配する。僕は操舵権を奪われる。そして楽になるのかな？から楽にならないとに変換されるのに時間を要しなかった。

どうなるんだろう？

それがとても魅力的に思える、この上なく。吸い寄せられるようにレールを、その上に浮かぶ空間を見つめる。そこから目が離せない。考えが離れない。楽にしてくれるのでは？全てを断ち切ってくれるのでは？そうしなければいけないのでは？頭の中がそれで埋まり、混ぜられた塊がぐるぐる回転する。目が回りそうだ。視界が揺らぎを帯び、意識が白濁してくる。心臓が鐘を打ち、飛び出しそうな勢いで、胸のみならず全身を殴りつける。

そんな思考と身体の混乱に後押しされ、右足が一步前に進み出る。ほんの僅かな一步だったが、そのあとの運動を呼び起こす契機となるには十分だった。自然と左足が動き、ゆっくりと、しかし確実に持ち上がり、そして前に進められる。ホームに敷かれた黄色いブロックを越え、その先の領域に踏み出す。

「電車が来ますから、下がってください！」

駅員がアナウンスを通じて伝えてくる。その声は叫びにも近いものを持っていた。当然だろう。彼らの使命は何らの支障もなく電車を運行させることだ。それをいま僕が阻害しようとしていて、駅員もそれを本能的に感じ取っている。やがて左側の頬が僅かに照らされ、電車が眩い光を伴いながら駅に入って来る予感がする。いや予感ではなく、確実に迫ってきているのだろう。だが僕はそれに対して、いずれの反応も示すこともできない。対抗も逃避も、あるいは拒絶も。そこには不純な希望以外なにも介在していなかった。

「下がってください！」

アナウンスは繰り返される。それは耳には届くが、意識には到達しない。その手前で見事に霧消してしまう。吸い込まれるように。そしてまた一步進む。また一步。あと少し。僅かに左頬を照らしていた灯火が、いまでは左側全体を照らしていた。ゆっくりとそちらを向く。大きな、目が眩むような塊が目前に迫っている。けたたましい警笛が辺りの空気を激しく震わせる。心臓が打つ鐘は、急速に速度と強度を増し、感覚がそれしか感じられなくなる。ゆっくりと目を閉じ、その他あらゆる感覚の一切を遮断し、そのときを待つ。それは永遠にも感じられる程だったが、実際はその刹那さえ体験させない程だったのかもしれない。時間がその軸の正当性を失い、捻じれこんがらがっている。何かがいまだと僕に伝える。僕はそれに応え、最後の一步を踏み出す。

電車が僕に迫り、僕が僕としての存在を失う、その一步手前、何者かの力強い手によって僕は後ろに強烈に引っ張られる。電車が目の前を猛然と過ぎ去って、その長い編成の後続車両が徐々に速度を落としながら通っていき、やがて何事もなかったように停車する。何事もなかったことはないのに、何かあったとしてもそれに対する当事者感覚というものは決して持ち合わせていないのだろう。いや厳密に言えば、持ち合わせていないことはないのだろうが、極端に稀薄され、それが存在することを感じられていないのかもしれない。続々と人が降り、それが終わった後にホームに列を成していた人が続々と乗り込み、そしてまたドアが閉まる。何事も

なかったかのように。電車はまた次の駅に向かって行く。

僕は決心がくじかれたのと、僕を引っ張ったその手の有無の言わせない強さに、呆然として立ち尽くす。僕の腕はまだその手に掴まれていた。そのあまりの強さに後々痕になりそうだった。ようやく痛いという感覚を取り戻し、その手の持ち主に伝えようとする、それが伝わったかのように、フッと手が僕から離れる。

振り向くとそれはとても背が高い男だった。周りと比べ頭一つ分飛び抜けており、おそらく百九十センチメートルに届くくらいだろう。くっきりした折り目のダークグレーのスーツを着込み、糊がよく効いてそうなブラックのシャツ、曇り一つないピンを付けたネクタイ、それに、これまた光を反射させそうなほど磨かれたブラウンの革靴。どれも高価なもののようにも見えるが、そこに過度な派手さはなく、とても上品に見え、スタイルの良さも相まって、全身に調和が見て取れる。適切なものが適切なところに配置されている。そしてとても精悍な顔立ちをしていた。年は二十代後半、あるいは三十代の初めと言ったところか。若々しい印象を受けるが、早熟さは感じられない。だからといって憂いを帯びているわけでもない。

「まったく、そんな真似したって。いまから時間はありますか？」

声は品の良いテノール、僅かに掠れているが、むしろそれがある種の特別さを持っていた。そして心地良く鼓膜を震わせる性質を持っていた。

僕は答えようとしたが、上手く声が出ず、喉の奥で潰された変な音が出るだけだった。声を出す代わりに、肯定とも否定とも取られかねない曖昧な首の動きで男に答える。男はそれを肯定と受け取ったようで、「じゃあ、行きましょう」と言う。

男は右を向き、ホーム中ほどにある、改札口に続く階段の方へ進み出す。スラッと伸びた脚から繰り出される一歩はとても大きく、人の波の間を泳ぐようにして進んだ。僕はそれについていくのに苦労した。何しろ男は走るような速度で歩く上、人の波は男を前にしていったんは開けるが、男が通過した直後にはまた元の海の状態に戻ってしまう。寄せては返す波のように。

男についていく必然性、あるいは動機のようなものは見当たらなかったが、言い知れぬ予感がした。この男の後についていくべきだという予感が。

男は後ろを見て、僕がついてきていることを確認することもし、ぐいぐいと進む。やがて改札口に向かう階段に辿り着き、男とそれに続く僕は階段を下りる。階段で男は速度を緩めるかと思いきや、相変わらず人を追い越して縫うようにして進む。僕は男を見失わないかと思ったが、その背の高さからして遅れることはあっても、見失うことはないだろう。人混みの中に紛れると、男の背の高さは一際目立つ。前方を進むその灯台を目安にして、僕は一定の距離を保つように後を追う。

改札口を抜け、東西を貫く地下道に出ると、男は東の方向に進む。全ての路線からの人が合流するそこは、複数ある通路の中でも特に混む通路だ。それにもかかわらず、男は速度を緩めることなく歩き、それに導かれるように僕はあとを追う。追いかけることに意識が向かうあまり、途中何度か反対から来る人と僕の肩がぶつかる。普段なら誤るなり会釈するなりしただろうが、いまはしなかった。何故かはわからないが、男から意識を一瞬でも離すといけなような気がしたし、何かがそこで損なわれてしまうような気がした。ある種の忘我の領域に陥る感覚があった。

やがて地上に向かう階段の下に辿り着く。駅に流れこむ人と共に、雑踏と喧騒を帯びた外の空気が流れ来んでくる。地下であろうと地上であろうと、その閉塞感にあまり変わりはない。その息苦しさはどこにいても変わらないし、どこかで気休めを得られる性質のものでもない。別の場所に移らない限り。

男は一直線に階段を昇り、地上の街に出る。街の中心部であるそこは、すなわちビル群の中心部でもあり、そこから見える空は、狭く暗い。見上げてみればばいばい広告が目に入るだけで、他に何も見えない。その広告から発せられる光は、地上を隈なく照らすと共に、人々の欲望を掻き立てている。いや、人々は手元の世界に夢中で、空など見上げていないのかもしれない。多くの人がそこで、各々の目的を待っていた。あるいは目的がない人もいるのだろう。一見しただけでは、それらの違いはわからない。巧妙に隠されている。

階段を昇り切った男は、初めて後ろを振り返り、僕が昇り切るのを待つ。その合間にも多くの人々が僕達の間を縦横に行きかう。

「こっちです」と男が言う。この喧騒の中でもよく通る声だ。いまはただ純粹に意思疎通のためだけに用いられているが、きっと他の用途においてもかなりの有用性を持つのだろう。

男は交差点に向かって進む。この街では光と同じくして、道も隅々まで巡らされているが、僕たちが進む道もそのうちの一つだった。これだけ張り巡らされていれば、一つくらいどこか別の世界に繋がってそんな気もするが、実際はどうなのだろう。おそらく一つ一つ、その細部まで検討した人はいないだろうから、その真相は迷妄の中に紛れ込ませておこう。いずれにせよ、男は実存する道と、それと車道が交わる交差点に向かって行く。多くの人が、交差点の手前で止まり、信号が変わるのを待つ。その僅かな時間ですら惜しむかのように、人は自分が属する世界に熱中する。男がその中に混じる。正確に言うと、完全には混じっていないが、同化しつつあり、その境界線が徐々に曖昧になっていく。自己と他者との間の境界線が。そこでは隠微な相互的なやり取りが行われているのかもしれないが、その実体を把握することは困難だろう。もしそれが可視化することができたなら……いや、そんな妄想は止しておこう。

信号を待つ間、人々の前を何ら面白味のない乗用車やタクシーが通り過ぎて行く。おそらくそれらを操舵している人達も、同じく面白味の無い顔をしているのだろう。いや、本来は面白味というか表情というものがあつたのかもしれないが、次第にそれらが削ぎ取られ、必要最低限のものしか残っていないのだろう。それらはただ、この街を構成する要素の一つに成り下がってしまっているが、こうした要素が存在しなければその集合体も存在することはできない。その逆も然りで、ここに依存関係が成立する。ただ、少しでもその要素が面白いもの、例えばフォルクスワーゲン・ビートルだったら、この街は少しはましなものになっていたかもしれない。

信号が変わり、車の動きが阻止されたしばらく後に、人々の動きが再開される。交差点からは道が四方に延び、各々が目的地に向かって進み、その経路は錯綜する。ある者は自宅へ、またある者は夜のこの街へ、あるいは道の先にある秘匿された世界へと。男はそんな者たちを齒

牙にかけることもなく、依然として速度を保ったまま道を進む。駅の方から電車の轟が微かに聞こえる。道には街灯が等間隔に設置され、その脇にそびえるビルの広告の光と相まって、過度に足元を照らしている。行き過ぎた照明とその下の道、そこに情緒というものは感じられない。ただただ人工的な世界が広がっている。ビルの合間には僅かな隙間すら存在せず、ぎちぎちにひしめいて、余白や空白はその領域を奪われてしまったようだ。各々のビルの一階部分には、居酒屋や何かしらを売る商店が敷き詰められ、人々の営みが確認できるが、その上の部分では一体何を目的として、何が行われているのか、それを外部から図ることはできない。この時間のため、その他の店にあまり人は見受けられないが、居酒屋には多くの人が入っている。酒を飲むことで一日を忘れ、また新たな苦難に備えているのか。

男はそうしたものの一切に視線を移すことはせず、ただ真っすぐに進んでいく。僕もただその後ろをついていく。やがて先ほどのものより少し太い車道に突き当たる。その交差点の向こうは、この街随一の繁華街だ。僕も何度かここを訪れたことがあるが、あまり心地いい場所ではない。なんというか、人々の欲望があまりに直接的に見えてしまう。セックスをしたい男と、それを掌の上で見定めている女。あるいはそうした予感をどこかに孕んでいる男女の群れ。そうした土俵に立つ事すらできず、とにかく金を払ってでもセックスをしたい男。まったく…水面下で穏やかに行うことはできないのか。性的なものばかりではなく、あらゆる欲が見本市のように展示されている。端から見ている分にはいいのかもしれないが、人間であるがゆえ、完全なる外部者となることは能わず、その欲の渦にどうしても巻き込まれてしまう。終わりが無い混沌とした渦の中に。

信号が赤で止まる。男と僕は、車道の手前に並んで立つ。対岸には繁華街の煌びやかなネオンが見える。毒々しいほどの明かりを放って、人々を蛾のように吸い寄せようとしている。その手前を多くの車が行き交う。各々の目的地を目指して。何てつまらない光景だろう。

そんなことをふと思った矢先、右手からアルファロメオが走って来る。夜の闇を越えて。丸目のヘッドライトがどこか懐かしい灯りをともしている。象徴的な盾型のグリルを携えて、ゆっくりと優美に目の前を通過していく。その黒光りしたボディには街から発せられるネオンが

反射され、複雑な図形を描いている。美しい。過度な派手さはないが、流麗なボディラインと、精悍な意匠の車だ。実際には周りの車と同じ速度で航行していたはずだが、ひどくゆっくりと、その美しさを周囲に見せつけるように走っているように感じられた。僕はその姿を目で追う。やがて、また夜の街に吸い込まれていく。ひと時の幻想であったかのように。

交差点の信号が青になる。待ちわびていたかのように、人々が駆け出す。一斉に。男が再び少し先に進んで、僕がその後についていき、交差点を渡る。先程のアルファロメオが進んでいった方向を見るが、そこに車はなく、両脇に背の高いビルと、車道と電車が立体に交差する高架が見えるだけだ。どこへ向かって行ったんだろう。反対側に目をやると、赤になったばかりなのに、既に信号待ちの車が列を成しており、交差点を行き交う人々を照らしている。もう少し猶予があってもいいような気がするが。

交差点を渡り、男はそのまま繁華街の正面入り口に進むのではなく、右に折れて繁華街に沿って進む。ここまで来ると人の量もピークに達する。道の隅から隅まで人で埋め尽くされ、思った通りに進むのが困難になる。それにもかかわらず男は真っすぐに進む。そこに何かのしるしがあるかのように。実際に男にはそうしたしるしのようものが見えているのかもしれない。ここをこういったら楽に進めるといったものが。いや、というよりはむしろ人々のほうが男を避けており、このままいったらこの男にぶつかるといった類の公告が、人々の間で瞬時に共有されていたのかもしれない。そんなことを思わせる歩き方をする。

人の量に比例して、そこから発せられる音も増していく。常に耳が何らかの音を吸収し、鼓膜が震えている。不愉快な耳鳴りが断続的にしている感じだ。しかも音は一定ではなく、常に変調が加えられている。そのため一つの音域に慣れることができず、常に新たな刺激が加え続けられていく。時を刻む時計のように、ただしそんな生優しいものでもないが。

男は一つの通りを前にして、左に向きを変えその通りに入っていく。そこは先ほどの通りよりは静寂が漂っており、一段階トーンが落ち着いたような感じがした。音も光もボリュームが抑えられている。何かの膜が被せられたように。道行く人もほとんどいない。一つ通りを折れるだけでこうも世界が変わるものとは。

やがて地下に続く一つの階段の前に着く。赤茶けたレンガの外壁に、黒っぽい蔦が絡みつき、下に続くであろう階段が待ち受けている。ここは何だろう。他の店と違い看板の類は出ていない。周囲に自己の存在を喧伝することをせず、用途がある人だけがそこを通る、そんな階段だ。男が階段を下り、それに僕が続く。赤茶けたものをベースに、ところどころ濃い黒や茶のレンガが混じっている。その表面は襦のような凹凸があり、そこで音を吸収しているのかもしれない。通りよりさらにもう一段階、耳鳴りのような唸りが減った。階段はあまり長くなく、すぐに地下の踊り場に着く。静けさがそこに漂っている。やはりそこにも看板はなく、大きな黒い木の扉がそびえる。中の様子はわからない。男が扉に手をかけ、奥に押して開く。ゆっくりとそこに世界が広がっていく。

車中にて僕は彼女と会話をする

「海に向かっているのね」少女が尋ねる。

「うん、そうだ」僕が答える。やや淡泊に思えて、他に何か付け加えるべきだったのかもしれないと思うが、適切な言葉は生成されず、口を閉ざす。あるいは無理をして下手なことを口にするほうが、不適切だったのかもしれない。少女に対して気を遣うのは、どこか憚られる気がした。彼女が醸し出す雰囲気がそう思わせた。ここに余計なものは必要ないと。

車は大通りを走っていたが、やがて細く少し入り組んだ道に突き当たり、それに合わせて僕は速度を落とす。それと同じくして、今まで開けていた風景が、高い緑の壁に阻まれる。今まで横たわっていたそれが、隆起して僕達の視野を狭める。開放的だった空気が、凝縮され、通り過ぎる僕達を見送っている。果たしてこの道が海へと続いているのか、ここを通ったことは記憶の限りなかったが、不思議とここを進めばいいという確信があった。僕はいま導かれている。

横にそびえた視界の上半分を遮るその自然の壁は、道路のうねりに合わせて、左右に動く。車とその距離は常に変化することなく、一定の間隔を保ってついてくる。僕達より先に行くことも、遅れることもなく、ただ一心にその表象を見せつけてくる。一見すると目立った起伏や隆起は見受けられないが、実際は厳密な三角形のアイデアが存在しないように、その表面は僅かに波打っているのだろう。たとえそれが人工的に形成されたものであったとしても。僕は時々横を眺めてみるが、さっき見た緑と、今見ている緑に現実的な差異を発見することはできない。何しろ運転中だったし、差異を発見することに重要性を見出していなかった。

隣に座る少女に視線を流す。飽くまで何気ない仕草を装いながら、それとなく。ときどき瞬きによって動いているが、基本的にその美しい表情に変化はない。瞳には奥深い光が灯っている。それをなんと表現したらいいのだろう。森の中に長い間眠っていた秘宝のように神秘的な光であった。空想上のものに見えるかもしれないが、確かに実存している。光は揺らぎを持ちながら、しかし一定以下の明かりにならないように保たれている。薪を絶やさぬように放り続

けている番人によって。

突如として視界が開ける。そのときを予感していたかのように。果てしない海がそこに広がっている。どこまでも続いている。どこまでも。遮るものは見当たらない。先程まで僕達に並走してきていた自然の壁は、合図によって一斉に地下に潜って、今ではその面影すら残していない。視界の遥か先には水平線と地平線の両方が見え、海と大地がその両方の領分を維持しながら、互いに拮抗することはない、静かに横たわっている。所によっては海が陸地に迫り、また別の場所ではその逆も起こっている。しかし、どちらか一方が完全になることはなく、果てしなく両者の併存が続いている。その境界を僕達が進む道路が走っている。こんな光景は見たことがなかった。だがどこか懐かしさを覚える。これを求めていたんだ。

海は透き通る程青く、ただ純粋な青ではなく、複雑にその配色を保っている。角度が、あるいは時間が変化すると、それに合わせて配色も変化するが、その美しさは変わらないだろう。たとえ夜になって、何も見えなくなったとしても、美しさは観念としてそこに残り続ける。そのあまりの透明度は、ある種の無垢性を思わせる。遠くの方に微かに白波のベールが見える。どうやら風もなく波も立っていないようだ。一つ一つの小さな波の揺らぎに陽光が当たり、あるものはそのまま水面下に、またあるものは反射され、周囲を穏やかに、しかし確実に照らしている。そしてその様相は刻一刻と変化しており、そこに回帰性というものは存在しない。今この瞬間にのみ存在する風景があり、そこからもたらされるものを、肌を感じながら僕達は進む。

道路が真っすぐになり、底知れぬ高揚感を覚え、車の速度をやや上げる。左側の窓の向こうには、一面の青が広がっている。開けた窓の隙間からは、潮の匂いを含んだささやかな風が流れ込み、車内を隈なく包む。さらに窓を下ろし、障壁がなくなると、左肘を窓の車体の淵に乗せ、そこに落ち着かせる。心地良い風を感じる。太陽は真上に昇り、その恵みを遮る雲は、今ここにはない。純粋な恩恵を直に被っている。

車のレコーダーからは、ハービー・ハンコックの処女航海が流れてくる。あるいはハービーは真昼の陽光の下で聞くにふさわしいものではないかもしれないが、この曲とそれが収録され

ているアルバムは別だ。穏やかなトランペットとピアノで始まるイントロは、海上におけるさやかな揺らぎを、中盤で入るサックスは波がときどき高くなる様子を思わせる。そしてトランペットのソロで高ぶりを見せ、やがてはまた落ち着いていく。静かなうちに若干のリビドーを忍ばせている。そんな曲を耳に流しながら、僕たちは車を飛ばす。

時々前方に車が現れ、速やかな進行を妨げるが、視界が開け対向車がないときを見計らって、何事もないかのように追い越して進む。アルファロメオは僕の要求に適切に応え、必要な時に留保なく必要な速度を出してくれる。あまり無理に速度をあげることなく、前方の車を追い抜き、また元の車線に戻る。速やかに、そうされることが最善であるかのように。不安はない。

少女に目をやると、結構な速度を出しているはずだが、それに対する恐怖をおくびにも出さず、平然と整った顔を保っている。こうしたことに慣れているのだろうか。今日会った男と二人で車に乗り込み、その上遠慮もなくスピードを出されることに。いや、断っておくが、全くの遠慮がなかったわけではない。今まで女性を乗せた際には、安全に気を配り不快な思いをさせないよう、運転に気を遣っていた。それにより幾分窮屈な思いをしたこともあったが、結果としてそれを上回るものを得ることができていたと思う。だがそれにもかかわらず、運転手と同乗者の感覚には隔たりというものがある。時には小言を言われるようなこともあったが、誰か女性を乗せているときは穏やかな航行を心掛けた。今も例に漏れず、少女に不安を感じさせないような運転をしていたが、それでも徐々に開放的な道路と風景が神経を刺激し始め、不随意的にアクセルを踏み込む量が増えてくる。いつもいる場所では味わうことのできない体験と、それに伴う感覚。気持ちが知らず知らずのうちに高ぶって、それを無理に押さえる意味も必要も存在しない。あるがままの感性を解き放っている。目の前に遮るものはない。

やがて、一つの看板がこの先に岬があることを伝える。僕はそこへ行くべきだと直感的に悟る。別にそこに求めているものがあるわけではないが、踏む必要がある経過段階の一つのような気がした。そこを経ることでやがてはどこか別の場所に行けるような、そこを通らない限り辿り着けないどこかへ。そんな予感を孕みながら、道を進む。道が緩やかに右に、続いて左へ

と揺れる。先程までの、うっとりするような直線から打って変わり、徐々に風景が見せるその表象が変化する。基本的な開放感は保ったままに。そして徐々に岬が近づいてくる。

左側に小道が見え、それがどうやら岬へと通じる道らしい。それは突如として口を開いて僕達の視界に入ってきた。気を張っていないと見過ごしてしまいそうな道だ。車体の速度を落とすため、やや鋭いブレーキを踏み、その道へと入っていく。舗装がされておらず、車一台がようやく通れるような砂利道だった。二つの轍がうっすらと見える。左右に背の高い植物が茂り、ただでさえ狭い道へさらに圧をかけてくる。その中で特に伸びた草の先端が、窓ガラスをコツコツと叩く。車が上へ下へ大きく揺れ、その歪な地面を這っていく。

微かな不安を覚えたその時、それを待っていたと言わんばかりに視界が開け、大地の終端が姿を見せる。まさに終わりの地だ。これより先に陸はなく、海だけが広がっている。後方以外全ての範囲が海で覆われている。見渡す限り、どこまでも続く別の世界が広がっている。人が容易に踏み入ることができる領域ではない。特殊な装備がなければその侵入は阻まれてしまう。

僕は車を入れる僅かな空間を見つけ、そこに車を停める。イグニッションキーを捻り、鍵を抜き取って、車内に静寂が訪れたのを確認する。エンジン音が消えた車内には、少女の微かな息遣いと、海から周期的に届けられる低い轟だけが残された。僕達はそれを感じる。吸っては吐いてを繰り返す営みと、寄せては返すを繰り返す営みが発する音を。そこにはある種の自然性が現前していた。そのような営みが継続されることによって、全体が維持されているという自然性が。それが滞ることはない。月の満ち欠けが滞ることがないように。

一息ついて、僕は車のドアの取っ手を引き、ドアを開く。ささやかに空気が循環される。左足を出し、低い車体から身体を引っ張り出すようにして外に出る。少女も反対側のドアから同じような動作をする。僕はそれを見届けて、鍵をロックし、先端に向かって歩き出す。直線的なモニュメントがそこに立ち、横に現在地を示す板看板が控えめに立つ。視覚的に捉えると、改めて僕たちは陸の先端に立っていることを知る。ここまでが立ち入りが許される領域だ。

「いい景色ね」と少女が口を開く。

「ああ、まったくだ」僕はそれに同意する。

一呼吸して少女が続ける。

「ここに来たことはあるの？」

「いや、おそらく初めてだと思う。」

「おそらく？」少女が僕の目を覗き、僅かに首を傾げながら尋ねる。

「確信がどうにも持てないけれど、おそらく初めて来る場所だ。でもどこか懐かしい感じがする。」

少女が頷く。髪がそれに合わせてなびく。「そうね、たしかにそんな感じがする」

僕達は並んで立ち、そこに吹いている風を、立ち込める空気を感ずる。それらはどこかで生成され、僕たちを通り過ぎ、やがてまたどこか別の場所へ向かって行く。それが途切れることはない。

「どうしてここだと思ったの？」少女が聞いてくる。

「さあ、どうしてだろう。ただこのような気がしたんだ。ここに来るべきだって」

「ふうん」あまり興味がなさそうに答える。いや表情のせいでそう僕が思っただけかもしれない。その横顔は、綺麗に鼻筋が通っており、調和を持った端正さが漂っている。

「君は？ どうして君は今僕とここにいるの？」僕は少女の顔を見ながら尋ねる。

ちらりと僕の顔を見て、また正面に視線を戻して言う。「あなたがそう望んだから」

「僕が？」意図して望んだ気もするし、そうでない気もする。

「ええ、あなたが望んだ。あるいは覚えていないかもしれないけれど。でもあなたが望まなければ、わたし達は巡り合わなかったし、わたしは今この景色を見ていなかった。それは揺るぎない事実よ」

少女はじっと正面を見ている。そこにたおやかな陽光が注がれ、周囲がきらめいて見える。象徴的な光景だ。

周囲を見回し、海の方を向いた長いあいだそこに置かれている雰囲気を持つ木のベンチを見つけ、そちらへ向かう。座面が濡れたり汚れたりしていないことを確認して座り、少女が隣に

座る。親近も拒絶も感じられない程の間隔を空けて。海を眺めるのに絶好な位置に面したベンチからは、視界の大半が真っ青な海で占められ、他のものが介在する余地はなかった。心地良い風が吹いてくる。ここでしか味わえないある種独特な匂いを含めて。

「あなたのことを教えて」少女が言う。

「僕のこと？」

「そう、あなたのこと」僕の方をじっと向いて聞いてくる。

「一体何を話せばいいのかな」

「何でも構わないわ。別にそれが面白くなかろうが」

「ううん、そうだな」僕は少し思案する。十六くらいの、女性とはまだ言い難い年齢の少女と、話すのに適切な内容というものが思い浮かばなかった。まして自分のことを語るなど。だが少女はそんなこと気にしない様子でじっと待つ。

「今ここでじゃないとダメかな？」僕は迷った末にそう尋ねる。

「今じゃない、そう思うの？」質問に対して質問で少女が返す。

「うん、適切な言葉が浮かんでこない、どこからも」

「そう、ならいいわ、残念だけど」言葉とは裏腹に、興味の水準は少しも変化することがなかったように見える。元々興味を向けられていたのだろうか。それは少女にしかわからない。

少女が何らの予兆も見せずに、突然ベンチから立ち上がる。すらりとした脚がワンピースの裾から覗いてそこに見える。少女はそのままかけるように、海の方へ近づいていき、身を僅かに柵から乗り出す。柵に身体を預け、手を少し上下にぶらつかせる。そこで何かを図るように。

「なんだか遠くまできたのね」彼女は海に向かって言う。「すごく遠くに」僕はただその様子を眺めている。

少女が振り返って、こちらを見つめる。その黒い瞳の奥には、柔らかな光を持つ透明な何かが見える。それは少女の鼓動と共に動き、呼吸と共に息をする何かだ。「ねえ、これからどうしたい？」

僕はその質問の意図を図りかねて尋ねる。「それはどういう意図を持った質問かな？」

少女は首を振りながら答える。「あなたに任せるわ。どのように捉えようと」

しばらく思索して答える。「そうだな、まだ車を運転していたいな」

「わかったわ」少女は頷く。また髪がそれに合わせて動く。とても複合的に。

しばしの空白が訪れる。僕も少女もそこから動こうとはしなかった。二人の上を風が流れる。雲はない。一面の青が上にも目の前にも広がっている。どこまでも、どこまでも。僕は胸の中の空気を口から全て吐き出し、微かな中庸の後に、新鮮な空気を胸に満たす。隅々まで行き渡らせ、そのとめどなく続けられる循環を感じる。そしてまた吐き出す。僕はベンチから立ち上がり、少女の隣に向かう。

「なんだか叫びたい気分だ」ふと思ったことを口に出す。

「叫んでもいいのよ」僅かに微笑みながら少女が僕に向かって言う。

「うーん、やっぱやめとこう、何か損なわれる気がする」

「あはは、面白い人」少女が笑う。鈴を転がすように心地良い笑い方だ。

二人で並んで海を眺める。僕達の足元のすぐ手前まで海が広がっているが、しぶきは飛んでこない。とても穏やかな波がささやかに打ち付けているだけだ。いや打ち付ける程の勢いもない、撫でるように寄せてくる。そしてささやかな音を立てる。

「そろそろ行こうか」

「ええ」

柵から離れ、アルファロメオの方へ向かう。

僕たちはスツールに並んでウイスキーを飲む

けたたましい音で覚醒する。その情緒も、留保も、容赦もない音は、僕の鼓膜を嫌と言うほど殴りつける。あまりにも暴力的に。意識をまどろみの中に残したまま、緩慢に腕を伸ばし、そこにあるだろうと思しき位置に振り下ろす。一度目が空を切り、しばらく後の二度目の振りで、その音がようやく止む。部屋の中に静寂がもたらされる。やがて羽虫がそこら中に飛び回るような、何とも形容しがたい、僅かな音を感じ取る。どうやら世界はいつも通り廻っているようだ。

ベッドの中で布団を被ったまま、なかなか動くことが出来ない。いつまでもこちらの世界に残っていたい。この弛緩と温和で満たされた世界に。だがそういうわけにはいかない。そう頭の中で何度も唱えた後、ベッドから脚を出し、起き上がる。ゆっくり立ち上がり、窓際に近づき、カーテンをひと思いに開ける。そこから差し込む光は鈍く、空は蓋をされたように重い雲で覆われていた。一面の濁りきった灰色だ。まったく、今日も曇りか。

台所に行き、戸棚の中からコップを取り出し、水を注いで飲む。乾いた身体に染み渡っていく。その潤いはほんの一時的なものに過ぎないが、それでもないよりは幾分ましだ。洗面所に辿り着き、蛇口のノズルを捻る。気怠そうな音とやや遅れて水が流れ出る。鏡に写る顔を覗くと、思わず本当に自分の顔かと疑いたくもなってしまう。壮年も前期から後期に差し掛かり、それ相応の弛みが滲み出てきた。瞼は重く垂れさがり、頬もかつてに比べると肉を帯び始めた。かろうじて、しわはまだないが、それもおそらく時間の問題だろう。目尻の辺りがだいぶ怪しくなっている。水を流しつづけ、しばらくそんなことを思う。こんなものか。

なかなか温まらない水に耐え兼ね、不快な冷たさのまま顔を洗う。いつ洗濯したのか、定かではないタオルで顔を拭き、クローゼットに向かう。アイロンがしばらくあてられていないシャツと、抽斗の一番上にそのまま畳まれたズボンと、危なげにハンガーに引っ掛かっているジャケットを取り出す。今日も食事をしている時間はない。それらを着込み、バッグを掴んだところで、ネクタイを締め忘れていることに気付き、クローゼットに戻る。さすがに昨日と同じ

だとまずいか。奥の方から引っぱり出したものを巻き付ける。くたびれた靴に足を突っ込み、扉を開く。その隙間から冷ややかな空気が流れ込んできて、目に付くあらゆるものを損なわせようとするように。襲来に備えて、身を内側に縮こまらせる。外に出ても相変わらず薄暗い。どこか埃っぽいような、閉所を思わせる臭いが立ち込めている。何もかもがまだ眠っているようだ。

駅に向かう道を進む。あの街へ続く電車、それが来る駅へと。多くの人が同じ方向に向かう。似たような服を着て、似たような表情をした人々が。空だけではなく、地上までも薄暗い。その地上でうごめくもの的一切も含めて。自分もそのうちの一部でしかない。群棲動物のほんの僅かな一部でしか。僕達を含むその群れは、一体何に群れているのだろう。僕たちの根底にある原理は、誰によってもたらされ、誰のために動いているのだろう。そうした疑問を、そこはかとなく抱きつつ道を進む。街へいくために。

駅に向かう途中、コンビニに立ち寄る。電車を降りた後のほうが大きいコンビニがあるが、それに比例して客の数も多い。時間がひっ迫する中レジ待ちをすることほど、うんざりすることはない。そうした理由から、電車に乗る前に買って、駅に着くころには食べ終わる、それがここ最近の朝食のスタイルだ。まあいずれにせよ、うんざりすることには変わらないか。棚にいくつも並べられた、サンドイッチを一個掴み取って、レジに行って会計をする。そんなことをしているうち、さっき抱いていた考えなどは跡形もなく霧散し、漫然とただ目の前のことに取り掛かる。これが終われば、すぐに似たようなものがやってくるのだろう。そしてそれも、いずれは過ぎ去っていく。すべては繰り返した。そこに意味などない。あるいは遠いどこかで、意味を成しているのかもしれないが、少なくともいまここで、僕にとっての意味は見いだせない。そんな観念上の産物に、一体どんな価値があるのだろう。

コンビニを出て、ビニールの包装を破る。細かいかけらが、冷たく無機質な風に吹かれて飛んでいく。サンドイッチを取り出し、ビニールをジャケットのポケットに突っ込む。冷えたサンドイッチにかじりつき、味わうことなく流し込む。そしてその次も。駅に向かうにつれて、人の数は多くなる。この時間だから、みんなあの街に向かうのだろう。陰気なジャケットとズ

ボンでめかしこんで。人の流れはとても早い。少しでも気を抜くと、次々と追い越され、すぐに取り残されてしまう。そして陰険な眼差しを向けられるか、あるいは阻害する者として無視される。そうならないように、流れに逆らわないように、気を配りながら群れの中を進む。

改札を通り過ぎて、ホームに上がる。街から遠ざかる方には人が見えないが、これから街へ行く方には人の海ができています。電車が来るたびに引き、そしてすぐに寄せる海。その波打ち際に加わり、電車を待つ。向こうに見える看板の上に、一羽のカラスが留まり、こちらをじいっと見つめてくる。そして一度鳴いたかと思うと、その大きな黒い翼を広げ、薄暗い雲に向かって飛び立っていった。余韻がしばらく周囲に漂う。

やがて電車がやって来る。その中身は、ぎりぎりまで水位を上げられたプールのようになっている。これ以上、水位を上げたら溢れてしまいそうだが、不思議なことに氾濫することはない、常に臨界点を越えないようになっている。どうやって調整が行われているんだろう。今もまた、どうやっても入らないと思われる所に、どんどん人が飲み込まれていっている。底なしの沼が、大きく口を開いている。その渦の中に僕も飛び込んでいく。電車の中は空気までもがひしめいて、鬱屈としていた。外はあれほど気温が低いのに、むせ返るほどで、一刻も早く抜け出したい思いに駆られる。狭隘な空間に身体が押し付けられ、その循環活動が一時的に低下し、意識に薄い膜がかかる。そんな中身に一片の憐れみさえも与えることなく、アナウンスが鳴り響きドアが閉まる。そして気怠そうに電車は動き出す。徐々に速度を上げ、人の頭の隙間から垣間見える僅かな風景も、それに伴い過ぎ去っていく。やがてホームが終わり、線路の向こうが詳らかになる。そこにはどこまでも背の低い建物が続いていた。時折、周囲より一段と高い建物が生えて、単調な景色の中にある種のアクセントをもたらしている。だがそれでも、全体としてそれが与える印象は単調の領域を抜けきっていない。どれも同じような大きさの、同じような色の屋根を持ち、その下ではやはり同じような淡泊な営みが行われているのだろう。それがどこまでも広がっていた。その上を数羽のカラスが飛んでいる。真下に広がる光景など歯牙にもかけずに、ただ悠然と。

会社に着く。下のロビーには、エレベーターを待つ長い列ができています。何回も何回も上がっては下りてを繰り返しているが、それでもやって来る人の量に追いつくことはできない。新たにロビーから来た人は和を乱すことなく、ただ自分の番が来るのを待っている。別の入り口から入って来た同期の一人が、僕に声を掛けてきた。

「おはよう、元気か」

朝から澆刺さを滲ませた声がよく響く。ややうんざりとした気持ちが顔を覗かせるのを覚えながら僕は答える。「ああ、なんとか」

「なんとかね」彼が一瞬思案する。純粋な沈黙が訪れる。僕の発現の意図を掬おうとしているのだろうか。「何かあったのか？」彼が尋ねる。

「いや、何もないさ」僕は会話を打ち切るためにそう答え、実際に会話はそこで失われた。

エレベーターがまた開き、僕と彼を含む人の列がそこに乗り込む。遍く階のボタンが灯され、人が限界まで乗り込んだのを見計らって、ドアが閉められる。音もなくエレベーターは上昇し、また音もなく精密に停止する。その動作に寸分の狂いもない。階を通過するごとに人は下りていき、空間がある程度緩和されたころ、同期が口を開く。

「本当に何もないのか？」

「ああ、大丈夫だ」僕はそこに、もしあったとしてもお前には話さない、と心の中で付け加える。

「そうか、ならいいんだ」彼が答える。僕の真意に気付いたのかどうかは、その声からは判別できない。基本的に鋭敏な男だが、都合の悪いことにはその感覚の蓋が閉じられることがある男でもある。いや、できると言ったほうがいいだろうか。いずれにせよ、この男に対してはなるべく多くを語らず、少ない要素を乗せることにしている。シンプルなシフォンケーキのように。

エレベーターは滑らかに上昇し、それに伴い地表が遠ざかっていく。景色が縮小されていき、視野が拡大されていく。地上を蠢く雑多なものがどんどん、視覚において些末なものになっていく。もう慣れたものだが、改めて考えると不思議な感覚だ。林立するビルの隙間からは薄暗

い空が覗いている。途切れることのない雲の底がそこに波打っている。

「そろそろだな」彼はどうやら会話を続ける気のようにだ。

「何が？」僕はそれにひとまず応じる。無視したい気分だったが、そういうわけにもいかない。

「ほら、もうすぐ期末だろ」

「ああ、そうか。待ち遠しく思っているのは、お前くらいだよ」沈む気持ちを隠して言う。

「そんなことないだろう、お前だってあるかもしれないだろ」

僕はゆっくりと首を振る。「さあ、どうだろうね」

「いいと思うんだけどな」そこにおそらく悪意はないのだろう。

エレベーターが急速に速度を落とし、オフィスが入った階に止まる。僕はボタンを押し、同期に先を譲る。そこに一步踏み入った途端、騒がしい音が充満し、気持ちの切り替えを無理やりに要求する。奮い立たせなければいけない。今日もやらないと。挨拶をし、通路を通り抜け、同期と別れて自分の部署に向かう。始業時間が近づいていることもあって、もうすでに多くのデスクは稼働している。そこに挨拶をしつつ、僕の席に辿り着く。コートを脱いでラックに吊るされたハンガーの一つにかけ、椅子に座る。沈むような気分をなんとか奮い立たせ、PCの電源ボタンを押す。ファンが稼働する音が微かに響き、モニターが起動するのを待つ。この一連の動作まで無意識の下で行われたが、すでに多くのものが損なわれた気がする。これから待ち受けている、無味と退屈と諦念が支配する時間に備えるために。耐え忍ぶために意図して無意識の領域に押しやったのか、あるいは無意識の領域にあることで、耐えがたい苦痛となっているのか。そのどちらとも判別がつかないが、いずれにせよ、結果として僕の人間らしさとも言うべきものが損なわれているのは確かだ。そこからの解脱を志したこともあったが、いまではそんな気力は霧消して痕跡すら残していない。そんな残滓のような状態がいまの僕の現状だ。

モニターによりやく光が灯る。ロックを解除して必要なソフトウェアを起動し、タグを開く。一通り並べ終わったところで始業開始時刻を迎える。今日もまた始まった、この時間が。昨日からの続きに取りかかる。ただひたすらに画面を見つめ、その中の数字をいじる作業。渡され

たものの中から、修正が必要な部分を見つけて、それを適切に修正し、また次に流す。一つ終わればまた次のものが流れてくる。一つが完全に終了する前に、すでに次のものが顔を覗かせて待機している。それが絶えることはない。たとえあるとしたら、それはこの場所が崩壊したときだろう。そんなことあるのだろうか。

どうでもいいような考えが、次々と頭の中に浮かび、そして沈んでいく。僕はそれに一片の意識を払うこともなく、ただ通り過ぎて行くのを見ている。いや、無意識のうちに意識の一部は持っていかれているのだろう、気付かないうちに。ほんの僅かだが、確実に損耗は生じているのだろう。それがあまりにも細かく、そして頻繁に行われているため気付かない。そうして徐々に蝕まれている。気付いた時にはもう遅い、取り返しのつかないことになっている。

「ねえ、ちょっと」僕に声かけられる。意識を戻し顔を上げ、その声が上司のものだと確認する。席を立ちあがり、上司のデスクの元へ向かう。背は曲げられ足取りは深い。こういうとき、こういう口調の場合は、たいていがろくなことじゃない。業務の遂行においては重要なことなのかもしれないが、僕のなかにおいては違う。

「ここなんだけど」上司がモニターを僕のほうに向け、指をさす。僕が関わった部分だ。

「これで本当に大丈夫？」モニターから僕のほうへ視線を移し、そう尋ねる。

「ちょっと確認してみます」

「うん、頼むよ」

会話がそこで打ち切られる。僕が席に戻ろうとすると、「あ、ちょっと待って」と呼び止められる。振り返ると、一枚の紙を抽斗から取り出し、それを僕に手渡してくる。

「この前の話だけど、結局なかったことにしてくれないか」

「え、どうしてですか？」その言葉が僕の中から飛び出してくる。

上司は微かな当惑と躊躇を顔に滲ませ、「他のやつが入ることになった」と言う。

すぐにはその言葉の意味と、上司の意図をくみ取ることができなかった。この人はなにを言っているんだ、なぜこの人はこんなことを言うのだろう。どうして僕はそんなことを言われなければならないんだろう。いや、結局は上司のその上が言っているのだ。僕がそこに達しなか

っただけに過ぎない。どうすることもできない。そう僕が結論づけるのに時間はかからなかった。いままでにも似たようなことを経験してきたから。一度これと言われたことを覆すことは、相当な労力が求められるうえ、成果が保証されているわけでもない。

「それは決定ですか…？」半ば諦め、半ばすぎるような気持ちで聞く。上司は何を口にするともなく、ただ頷く。沈黙が漂う。とても重く、簡単には追い払うことのできない沈黙が。

「そうですか…」ようやく沈黙を裂いて呟く。

「すまん」

謝意など微塵も湛えていない言葉を背中に受けて、僕は席に戻る。そして深く深く沈み込む。沈んでいく先に底は見えない。どこまでも深く、そして暗い。光が届くことなど想定されていないであろう世界が覗いている。どうしてこうなんだろう、どうすればよかったんだろう。答えを求めて辺りを見回すが、それらしきものは存在の予感すら漂わせていない。そこにあるのは純粋な闇と、濁りきった僕の心だ。

気を緩めると、目の奥から熱い感覚が湧き出てきそうになる。一度堰きが切られると、自分ではどうしようもできないことはわかっていた。止めどなく溢れ続け、枯れ果てるまで終わらない。いや、枯れるときなど訪れるのだろうか。なんとかそれを抑えようと、水筒に入った水を飲む。カラカラに乾いた喉を冷たい水が流れて行く。このまま僕の深部まで浄化してくれ。そんなことを願うが、叶うことはない、永遠に宙に浮いたままになる願いだろう。意識をいまに戻そうと集中する。ふとすると霧消しかける集中をかき集める。しかし乾いた砂で構造物を作ろうとするときのように、なかなか形を持って現れない。手に取る傍から崩れていく。そして跡形もなく消え去ってしまう。仮初の集中でさえ取り戻すことに失敗した僕は、ただ光る画面を見つめている。そこには数字が踊っている。

周りでは各々のデスクで、各々が作業に取り組んでいる。キーボードをタイプする音で空間が充満している。そこら中から発せられるその音は、重奏を奏でている。決して心地良いものではない、ただの機械から発せられる、ある種の圧をもった音だ。一つ一つの音は僅かなものだが、束になると威勢を有して、その他の音を徹底的に吸収してしまう。そんな音だけが、た

ただひたすらに響き、鼓膜を震わせる。誰もが画面に向き合っている。その中に何かとても大事な
なものがあるかのように、それを探し求めているかのように。果たしてそんなものは存在する
のだろうか。あったとして、それは何をもたらすのだろうか。画面は光り続ける、とても宿命
的に。

そばにあるブラインドからは、鈍い光が差し込んでいる。外は曇天だ、そのことはここへ来
る前にうんざりするほど突き付けられた。分厚い雲が空を覆い、光を隔絶している。地上に届
けられる僅かな光はあまりにも弱々しく、心の渦を吹き飛ばすことはできない。暗く重苦しい
空気が佇んでいる。いつから晴れていないんだっけ。確か今月に入ってからずっとこんな天気
が続いている。一時でも晴れれば、太陽が顔を覗かせれば、気分はましになるはずなのに。ま
ったく……

作業は遅々として進まない。画面の中の数字を、その表面をただ意味もなく見つめる。それ
が表しているはずの意味を読み取ろうとするが、淡い集中が阻止してくる。上から下に数字が
ただひたすらに流れて行く。ターンテーブルの上でひらすらに回るレコードのように。針を使
って繊細に読み取る必要があるのだが、どうもそれができない。音が鳴る事はなく、無心に回
り続ける。乾いた機械音だけが虚しく響く。終わりが来ることはあるのだろうか。

天井には蛍光灯が均等に配置され、無機質な灯りを発している。その脇にあるエアコンから
は、無遠慮な温風が吹き付ける。一応は空気が循環されてはいるのだろうが、どうにも澁んだ
感じが拭えない。そこら中の空間に不快な溜まりが漂っている。そんな空気を一日吸い続け、
身体組成が構成されている。機械に囲まれ、機械が作る空気を吸い、機械のために貢献する。

画面の中の数字は僕の目の前で踊り続ける。

ときどき通路を人が通り過ぎる。会議室に向かうためか、あるいは何か確認を求めているの
か。各々の目的を遂行するために慌ただしく通り過ぎる。その中には僕の同期も何人か含まれ
ていた。会社によく貢献したと評価された彼らの元には、すでに何人かの部下が付いていたり
した。その部下たちを束ね、さらなる会社への貢献を要求されている。そんな彼らは常に会社
にいた。日が昇ると会社に来て、日が落ちて居続け、日付が変わってようやく一部が帰る。

中には帰らない連中もいた。そうしてよく貢献した者が評価された。評価された者が上へ行った。

間断なくどこかで電話が鳴り続ける。何かの要求を突き付けてくる電話だ。それは会社内で完結することもあれば、外部から思いもよらぬ要求が舞い込んでくることもある。あるいはこちらの要求に返答を返すものかもしれない。電話が繋がっている先の線は複雑にこんがらがり、四方へ伸びて行く。その中を声が通り過ぎて行く。何度も何度も。

修正が必要と思われる、それらしき箇所が見つかった。何度も確認したはずだったが、どうやら数字が一つ違うものが入っていたようだ。正常のものの中に一つ異物が混じる、たったそれだけのことで、完全に動かなくなる。いや、動くには動くのだが、意図した動きではなくなる。意図した動きをしなければ、数字は存在の意義を損なう。だから一つ残らず、完璧に仕上げなければならない。そこに外部性が介在してはならない。

数字を一つ修正したところで昼休みの時間になる。ようやくこの時間。唯一の安らぎがもたらされる。すぐに行くとエレベーターが混雑するため、少し時間を置いてから席を立つ。エレベーターに乗りビルの外に出るまで、誰にも声を掛けられないことを望んだが、それは儚く消えた。オフィスを出た瞬間に、朝会った同期とぶつかった。

「お、一人か？これからどうだ？」相変わらず、澆刺さをほのかに含んだ声を掛けてくる。部署は違えど上長とのコミュニケーションを断ることは、評価に関わってくる。今更僕の評価などあってないようなものだし、僕もどうしてもよく思っていたが、上手く断る理由なんて存在しない。一人で過ごしたかったが仕方ない。やすらぎの時間のはずなのに、鬱屈とした気分が漂う。エレベーターホールで待つ。周りには誰もいない。二人の間に会話は生じない。オフィスのほうから微かなざわめきが届く。それ以外に一切の音はない。あるいは何らかの象徴も。

「そのただひたすら繰り返しだったんだ」僕は男に向かって話す。初めて会った男に、躊躇

いもなくついていったバーのスツールの上で。

男が開けたドアの先は、ほのかな灯りを放ち、黒を基調とした内装に、数脚のスツールとカウンターがあるバーだった。カウンター以外には、一人掛けのソファとテーブルのセットが何組か置かれている。どれも落ち着いた色合いをして、過度の想像の介入を許していない。数々のワイングラスが掛けられ、灯りをじんわりと反射し、空間を心地よく整えている。地下に位置するその場所は、あまり広いとは言えないが、天井が高く、また余計な家具や調度品が置かれていないので、閉塞感は感じさせない。必要なものだけが必要な場所に置かれている。それも適度に。全体の色彩系統が統一されているからだろうか、調和がもたらされている。客は他に数名入っており、物静かに各々の時間を満喫しているようだ。カウンターでは男女が並んで座り、隠微な会話を交わしている。その横の一人掛けのソファでは男が一人、黙々と本読んでいる。本の題名は隠されてよくわからないが、男が本から視線を移すことはない。時折、気付いたようにテーブルに置かれたグラスを傾ける。カウンターの奥では三十歳前後の、バーテンにしてはおそらく若い部類の男が一人、佇んでいる。天井に設置されたサウンドシステムからはビル・エヴァンスが流れている。とても有名な曲だ。曲名はたしか「ワルツ・フォー・デビイ」

僕をここまで連れてきた男は、バーテンと顔見知りのようで、軽く挨拶を交わし、滑らかな動作でスツールに腰かけ、ジョニーウォーカーのロックを注文する。僕もその横に座り、何にするか尋ねられ男と同じものを注文する。そのスツールはとても座り心地がよかった。

「いいところでしょう」男は軽く横目で、僕のほうを見ながら言う。

それには確かな同意を覚えたため、頷いてそのことを示す。

男は微笑みながら続ける。「こんな煩い街にありながら、静かな空間を提供してくれる、なかなか貴重な場所です」

僕は僅かに周囲を見回す。二つ離れて座る男女は、囁くように話し合い、笑いをささやかにたたえ、ソファに座る男は相変わらず音もたてず頁を繰っている。時々響くグラスを置く音や、バーテンが移動する靴音以外、耳に触れるものはない。そのなかにビル・エヴァンスの演奏が

流れている。

ジョニーウォーカーのロックが二つカウンターに並べられる。男はそれを手に取り、穏やかに乾杯と告げ、グラスが重なる音が鳴る。黄金色の液体が煌めきながら揺れる。熱いものが喉を通り抜けて行く。

「さて、何から聞きましょうか」男はグラスをカウンターに置いて言う。男は僕をじっと見つめる。その目の奥に柔らかな光が灯っている。「いや、その前に僕の簡単な自己紹介でもしましょうか。見知らぬ男にあれこれ言ったりするのは気が引けるでしょうから」男の声は澄やかに通る。「名前は加瀬です。今年で二十五歳になります」

一回り近く年が離れていること、そして男が持つある種の超然として落ち着いた雰囲気により、もっと上かと思っていたことで、驚きがよぎる。「ずいぶんと若いんですね」僕はそれをありのままに伝える。

「もっと上かと思いました？よく言われるんです。そんなに老け顔かな」

「いや、そうじゃないです。なんというか落ち着きを纏っているから」

「纏っている、素敵な言い回しをされますね」加瀬がにこやかに言う。均整を持った顔に人為的な綻びが走る。相手を好意的な気持ちにさせる笑みをする。

加瀬がグラスを持ち上げ、一口含む。「小さな会社で総務とか経理とか、そういったこと全般をやっています。従業員はあまり多くないが、面白いところです」加瀬は正面の壁を見つめていたが、ゆっくりと視線を僕に移し、言葉を続ける。

「そんなところでいいですか？あまり僕の話をして面白くないから、それに語るべき内容もあまり持っているわけではないので」

僕もグラスを傾ける。再び熱いものが喉を巡る。ここ最近飲む機会が少なかったのも、アルコールを体内に入れるのはずいぶんと久しい。だからといって別に喜ばしいものでもなかったが、心地よい刺激を感じる。

「どうしてあんな場所で突っ立っていたんですか？」加瀬が顔を微かに傾けながら尋ねる。

僕は返答に窮す。どうしてだろう？僕自身でもわからない。

それを加瀬は読み取ったのか、あるいはあらかじめ、そうだと予想していたのか、ささやかな微笑みを浮かべ、

「無理に答えなくても大丈夫です。急かすつもりもないし、僕も時間はある。ゆっくり行きましょう」と言う。

加瀬がグラスを手にとって眺めながら言う。「自分で言うのもおかしい話ですけど、僕は人の話を聞くことが得意なんです。苦手でないといったほうがいいのか。自分のことを語るよりも、人のことを聞くほうが、何というか性に合っている。その人の内実に迫れるというか、言葉の内容以外にも読み取れることが多くて、結構楽しいんですよ。でも残念なことに人の話を聞くことが億劫で、自分ばかり話してしまう人というのも、一定数存在しますよね。しかも厄介なことに自分でそのことを認識できていない。まさか自分がとは微塵も感じていない。実に残念なことです。でも安心してください。僕は大丈夫」そう言って加瀬は笑う。

初めて会った人間にそんなことを言われても、通常そういった部類のことは、ある程度の判断のための時間を要するはずだが、どうにもこの男のことが読めない。第一にこの男の目的は何なのだ。この男が、有無を言わせないある種の超然とした雰囲気醸していたから、理由も問わずただ着いてきたが、果たして正解なのだろうか。何か良からぬこと、この世に卑しくも存在している醜悪な欺瞞行為にでも、巻き込まれるのではないか。そんなことが頭をよぎる。

あるいはこの男はルイス・キャロルの小説で言うところの白ウサギのようなものかもしれない。白ウサギが導く世界、そこで発生する出来事が意味をもたらずなのであって、白ウサギ自体は船頭に過ぎない。道の辿り方を知っているだけで、いやそもそも導くつもりすらなかったが、結果として導き、そして世界に没入することになった。偶然と誤謬に満ちた因果関係によって。そこに必然性は存在しない。

でも白ウサギについていかなければ、物語はそこで終わってしまう。二つの選択肢が提示され、選択次第では速やかに物語が終結する。そこで起こったことは起こっていないこととされ、元の世界で元の生活に戻る。いわば時間と因果関係の修正が、それらを超越した存在によって行われ、何もなかったことになる。一方でもう一つの選択、白ウサギについていく選択を取る

と、時間の不可逆性と原因と結果の必然性が失われた世界に没入することになる。(失われたのはこの世界における法則であって、別の世界の法則に移り変わっただけかもしれない。線路が切り替わるように。)

「自分のことを断言する人間を、僕は信用しないようにしています」と僕はぼそりと言う。

それを受けて、一瞬驚きのようなものが加瀬の顔に浮かんだが、すぐにそれは姿を消し、軽やかに返す。「あはは、なるほど聡いですね。うん、確かにその通りだ。でも世の中には奇特な人間というものも存在しますよ」

加瀬がグラスをカウンターに置く。僅かにその音が室内に響く。スピーカーからは次の曲が流れる。曲名は知らないが、どこかでフレーズを聞いたことがある印象的なモダンジャズだ。ピアノがゆったりと踊り、物静かなドラムがリズムを刻む。

「あなたはどうなんですか？あなたのことをどう思っています？」加瀬が尋ねる。

「どう思う……どうなんでしょう。難しい質問ですね」グラスの中身を見つめながら僕は言う。

「ええ、とても難しい質問です。もし何ら留保もなく答える人がいるとするならば、それは無知か、よほど自意識が高い人間です。簡潔に答えられないあなたは、おそらくはそのどちらにも当てはまらない」

それならそんな質問、端からするなと思うが、口には出さない。「それはよかった」僕は簡潔に返す。

「あなたのことを知りたいけれど、僕も適切な疑問詞を持っているわけではないし、直接的に聞いてもそれは難しいでしょう。そういうときに尋ねると、簡潔に表現できて、かつ相手の傾向を知ることができるもの、それが趣味の話です。便利なものだ。あなたの趣味は何ですか？ってなんだか口説いているみたいになってますね」加瀬が微笑みを込めて言う。笑みを絶やさない男だ。

「このところ会社に行って帰るだけの生活だったから、特には」僕は返す。本当にこれと言ったものが浮かばない。自分で言って惨めな気持ちが顔を覗かせる。

「うーん、そっか。それ実際に女性に言ってはダメですからね。僕だからともかく、興ざめに

なりますよ」そう言って加瀬は少し思案する。「昔、はまっていたこととか、なにかあるでしょう」

「そうだな、学生時代にはジャズに少し触れていました。本当に少しだけ」思いついて僕は言う。

「へえ、ジャズですか。いいですね。聞くのが好きですか？それとも実際に楽器を演奏していました？」

「アルトサックスを」

「サックス、最もセクシーな楽器ですね。あくまで僕の個人的な意見ですけど」

僕は頷いてグラスを手を持つ。グラスを傾け、ジョニーウォーカーのロックを緩やかに流し込む。喉を心地よい刺激が通り過ぎる。カウンターに座る男女がフォアローゼスの水割りを注文する。バーテンが棚からフォアローゼスのボトルを取り出し、作り始める。そこらの飲み屋にはない銘柄まで揃えているらしい。久しぶりのアルコールが全身をゆったりと巡る。

「今は吹かないんですか？」加瀬が尋ねる。

「もう随分触れてないな」大学を卒業し、会社に入ってからサックスを吹いていなかった。吹く環境がなくなったし、そもそも吹く時間と気力を搾り取られ続けてきた。大学時代は自分のものを所有していたが、いつだったか手放してしまった。とても安い値段で。サックスの煌びやかなボディと、それを取り巻く豊富なキイが頭に浮かぶ。そしてベルから飛び出してくる表現色に溢れる音。

「ジャズサックスか、ジョン・コルトレーンくらいしかわからないな」加瀬がつぶやく。

「サックスと聞いて、ジョン・コルトレーンの名前に結びつけることができるなら、充分じゃないか」

「そうですか？もっといろいろな名前が出てくるとカッコいいなって思うんですけど。ほら、小説みたいに。ちょっと発想が陳腐かな」

加瀬がそう答えたのが、少し僕には面白かった。確かに陳腐かもしれない。だがどうやら加瀬は少々ジャズに通じているようだ。それもそうか。この雑多な街の中で、静かにピアノを流

すバーを知っているのだから。高度資本主義の中における、数少ない安寧の地。複雑に行き交う欲望を尻目に、穏やかに流れる川のせせらぎのような。

「どこでこの場所を知ったんですか？」僕は気になって、加瀬に尋ねる。「静かでいいところだ」

「でしょう、気に入ってくださったなら嬉しいです。昔から、彼と知り合いだったんです」そう言って加瀬は、カウンターの奥に立つバーテンを見る。バーテンもこちらを見て、ささやかな笑みを浮かべ、ほんの少し頷く。そしてこちらに近寄る。

「なかなかいいところですね」僕は彼に向かって言う。

「ありがとうございます、よかったらまたお越しください」純度の高い声で彼が答える。

僕は頷く。簡素なやり取りだったが、内奥は充実していた。それでいい。余計なもの一切が捨象されている。そうしたバーテンと店の雰囲気魅せられた、少数の人のみが訪れる場所、ものや情報が充溢した世間から逃れられる場所。訪れる客も場所の雰囲気に一体化し、全体が形成されていく。どこか知らない世界のような。ソファに座る男は頁を静かに繰る。

「なにか注文しますか？」加瀬が僕に尋ねる。

「そうだな、同じものを」僕が言うと、バーテンが頷く。

留保なくアルコールが吸い込まれていく。それに伴い口も軽やかになり、様々な話が飛び交った。と言っても、ほとんど僕の話だったが。それでも加瀬は、嫌な顔を微塵も浮かばせない。まるでア・プリオリに聞くことを求めているかのように。要所でとても適切な相槌や返答をし、適切な疑問文を放つ。それも心地良い長さの疑問文を。最初、加瀬は疑問文を放つことが苦手と言っていたが、僕にはあえて初めはそうしているかのように感じられた。飛行機が徐々に速度を上げて離陸するように、会話のテンポも滑らかに淀みないものになっていく。僕も一度に言いたいことを全部言わずに、加瀬が疑問文によってそれを尋ねることを待っていた。加瀬は見事に打ち抜いていく。寸分も違わず正確に。たまに若干僕が意図するところと逸れる部分もあったが、僕がそれとなく示す、あるいは加瀬がそれを感知することによって、適切な方向へ修正されていった。気持ちがいいラリーが行われる。これは訓練されて、その結果習得された

技術なのだろう。多大なる努力が費やされたのかもしれないし、あるいは生得的な素地があり、その上に適切な補正が加えられたに過ぎないのかもしれない。いずれにせよ、その訓練は如実な成果を出していると僕には思われた。

会話の大半は僕の身の上話だった。大学を卒業し、会社に就職し、そこを辞めた話。端的に言えばそれだけの話だが、その話をするために十年以上費やしてきた。十年かけて紡いだ物語が一行で完結してしまう。なんということだ。話しながら改めて思う。もちろんそこには多少の起伏が織り込まれていた。例えば十年の間には結婚をして、そして離婚も経験した。だがそれも、空間的、時間的に俯瞰すると、服のシワのように些末なものに感じられてしまう。引っぱり張ったり、熱を当てたりしたら認識できなくなってしまうもの。振り子のように永遠にその場を行き来しているようなもの。僕は何を生み出してきたのだろう。あるいはこの先何かを生み出すことはあるのだろうか。

「最近、そんな思いにばかり駆られるようになって」僕はそのままだ吐露する。

加瀬が頷く。改めて見ると、端正な顔立ちをしている。高い鼻梁と大きな目。左右の均衡も保たれている。だが決して相手に緊張感を与えない整い方だ。笑顔と、それに伴い顕現する親和性の高いシワの効果だろうか。いや、それもあるのだろうが、どちらかという、内面から滲み出てくる部分が大きいように感じられる。それが笑顔という形をもって現れている。本質はもっと隠された部分にあり、容易に認識することはできない。それは森の奥深くに眠っている。一人の人間という森の中に。そして静かに脈動し、血液を全身に送っている。

グラスの中の氷が揺れる音が響く。とても静かに。その音は表面を震わせて、速やかに空間の中へ吸い込まれて、そして痕跡を残さずに消えた。いや、確かに痕跡は残っていないが、それは現実に限った話で、認識の中では別だ。未来と過去とを帯びた認識の中。

ソファに座った男が、手にした本をテーブルに置き、代わりにグラスを手にする。何かの象徴であるかのようにグラスを見つめる。しかしそれは一瞬の動作に過ぎない。すぐに男は視線を別の場所に移し、グラスを口元に運ぶ。僅かにその内容物を流し入れ、またグラスをテーブルに戻す。そして再び本を手にする。僕は男の一連の動作をそれとなく視界に入れていた。こ

の男は、どこでこの場所を知ったのだろう。街を歩いていて偶然出くわしたのか。あるいは僕のように人に誘われたのだろうか。偶然出くわしたとしても、路地を入り込んだところにある、看板も何も出していない店に入る状況があるのだろうか。それはかなり気まぐれの領域に含まれる状況だろう。蓋然性が限りなく低い領域とも言える。よほど知らない場所への冒険を望んでいた、そしてそれに自分が耐えうるか試してみたかった。大いなる賭けに臨んでみたかった。そんなところだろう。いずれにせよ、女性との初めてのデートで選ぶことはない。

アルコールが回った頭でそんなことを考える。止めどなく考えが巡る。些末なことから、とても重大に思えることまで。頭を巡るうちに、重大だと思わせていたその根拠の皮は、一枚一枚剥がれていき、やがて等しく些末なものになっていく。その逆はない。これぞアルコールの恩恵。

「ずいぶんと飲んだ気がするな」僕はそう言い、呂律が怪しくなっていることに気が付く。

「そうですね、正確に数えていたわけではないですが、かなり飲みましたね」加瀬が答える。その顔に特に変化は見られない。相変わらず好意的な笑みが浮かんでいる。

「強いですね、僕と変わらない量を飲んでいるのに」

「そういう体質なんです。どれだけ飲んでもあまり酔わないんです」

「意外だな」僕はそう言う。

「あはは、見かけに反してですか？よく言われます。僕の見かけはあまりあてにならないようです。僕の本質を上手く表現できていないというか。でもどっちが正しいんでしょう。本質と見かけが乖離しているのか、そう感じるだけで実は一致しているのか」

「自分が好きな方でいいんじゃないか。君自身の本質と見かけなんだから。他の誰のものでもない」

「なるほど。素晴らしい考え方ですね」

「あまり真剣に捉えないでくれ」気恥ずかしさを僅かに覚えて、僕は濁すように言う。

「どうしてですか？いいじゃありませんか」

「ただの酔っ払いの戯言だ」そう言って僕はグラスを手に持ち、傾ける。「酒を飲んだ上で口か

ら発せられるものを信用してはいけない」

「そうですね。それこそ認識から乖離された言葉が、己の意志を持って飛び交っているだけです。でもたまには言葉に自由を与えてみてもいいんじゃないでしょうか？いつもそれだと困るけれど、たまになら。認識にずっと縛られていると窮屈なものになってしまいますよ。まあ、僕の場合アルコールの力を借りられないので、他の方法で行う必要があるんですけど」

「他の方法って？」僕は尋ねる。

「例えばですけど」そう言って加瀬は両手を前に緩やかに掲げる。「運転とか」

「運転？」

「そうです。ドライブです。好きなんですよ、ドライブするのが。海岸線とか信号のない道をただひたすらに運転していると、ふと意識が開放されているというか、現存する自分の意識とは異なるものに包まれる感覚に陥るんです。都会の道じゃ味わえないような」

「なんとなくわかるよ」

「嬉しいです」加瀬はそう言って微笑む。「休みの日なんかはよく出掛けるんですよ。ドライブするためのドライブに」

「純粋なドライブ」僕は呟く。

「いい表現ですね」

サウンドシステムは次々と曲を変えていく。若干の曲調の変化はあるが、大元を成す雰囲気は変わらない。それが店の雰囲気の一部となっている。洗練された都会の夜。あるいは秘匿された、表象の裏にある世界で過ごす夜。どちらの表現が適切なのだろうか考えるが、答えもまた秘匿されている。それは明確な一つの答えを求めている問いだ。どちらに転がろうと誰も気に留めないし、影響の僅かな波すら生み出さない。ただ空間に投げかけられて、存在は認識されるが、やがてすぐに意識の無限なる海に消えていく。後に残すものは何もない。一切の残滓も消えていく。もしかするとそういうものを求めていたのかもしれない。明確な答えを常に求められ、答えたととしてもすぐに新たな問いが投げかけられる世界から、その世界の元で蠢く無数のものから、一時でもいいから隠れたいのかもしれない。ときどき耳に触れたことがあ

るフレーズが流れる。

二つ席を離れてカウンターに座る男女の、男の方が立ち上がりスツールから離れる。残された女のほうを、それとなく僕は見つめる。あくまでそれとなく。大きな目をしている。その印象的な目でもって虚を見つめている。何が見えているんだろう。女が見つめているほうに視線を移すが、そこにはウイスキーのボトルが並んでいるだけだ。女はただ無心にそちらに視線を投げかけている。まるでなにかのやり取りが行われているように。連れの男との会話のように隠微なやり取りが。ただそこには言語的なものは存在しない。言語化される以前の、もっと根源的なものが相互に交わされている。いや女からの一方的なものかもしれないし、あるいはボトルからの一方的なものかもしれない。根源的な会話は、別に対人に限らずに行われる余地はある。むしろ人でない、言語を用いないものだからこそ、積極的に主体性を持って行われるかもしれない。そうした態度をもってしてやり取りが可能となる。

女が視線を移し、僕の方を見る。大きな目で見つめてくる。そこには言語化されていない何か象徴的なものが宿っている。それは彼女の瞳の奥で揺らぎ、僅かな断片をその表面に表している。果たして何を象徴しているのか読み取ろうとするが、それは能わない。僕に何か求めているのか。それとも彼女から僕に何か訴えかけようとしているのか。原始的なやり取りにあまり慣れていない僕は彼女と疎通することができない。努力すればできるものだとしても、その努力の手段がわからない。適切な方向に努力の照準を合わせる必要がある。もしもそれが努力すれば体得できる類のものとしたら。

やがて彼女は興味を失ったかのように視線を元の場所に戻す。どうやら僕は彼女の期待に沿うことはできなかったようだ。そしてウイスキーのボトルの方が、彼女が求めるものを提供できていたようだ。彼女が僕を見つめていた時間は、普段当たり前に使われている客観的な指標に則れば、僅かなものだったが、時間というものは可変的なものだ。時間は不可逆性を有しているが、不変性は唾棄している。

男が戻ってきて、元のスツールに座る。二人は僅かな会話を交わし、バーテンを呼んで会計を済ませる。そして立ち上がり、ドアの外へ抜けていく。その一連の動作に澁みはなく、ある

種の儀式のように流麗に行われた。ささやかな会話を行う場所を提供した対価を渡す儀式。一時的に喧騒を逃れ、二人で羽を休め、そしてまた去っていく。その先は二人しかあずかり知らない。

「随分遅くなってしまいましたね」加瀬が言う。時計の短針は頂点を回ろうとしている。いつの間にか、かなりの時間が経過していた。

「…もうこんな時間か」

「まったくです。詰めれば詰めるほど、そして追えば追うほど時間は早く過ぎていきます。そこが魅力なのかもしれないですけど」

「魅力ね。ある意味ではそうなのかもしれない」

「別の意味では？」

僕は少し考えて言う。「人々を脅かす存在」

「なるほど。確かに死に行く人なんかにはそう思えるかもしれないですね。でもこの世で唯一、我々に公正に与えられるものです。生得的特性や貴賤は考慮されずに」

「そうだな。平等に与えられ、平等に流れゆく。不可逆的なものだ」

「不可逆的。そこには絶対的なものが存在しています。もしかするとそれが魅力の要かもしれないですね」加瀬は自分が行った言葉の響きを、丹念に確かめるようにして言った。その言葉が持つ意味をじっくりと味わっているようだ。「とにかく、この店もそろそろ閉店です。行きましょうか」

「ああ」

僕はそう言って立ち上がった。その瞬間、視界が大きくぐらついた。頭が揺さぶられた。巨大なゆりかごが僕を乗せ、揺蕩っているような感覚に襲われた。それほど飲んだわけでもないのに、自分が思っていた以上にアルコールが体内を駆け巡り、感覚と神経を侵食していたようだ。幕が強制的に下ろされ、視界が光を失った。

微睡の中の出逢い

ゆっくりと目を開く。僕は地面に仰臥していた。冷たくて硬い地面の感触を背中に感じる。どれほどの時間、僕はここに寝ていたのだろうか。時間はその軸を歪ませてしまって、正しく経過をたどることができない。地面に触れた部分から、身体が冷え始めている。ゆっくりと上半身を起き上がらせる。身体に違和感はない。まだ微かにアルコールの余韻を感じるが、身体の機能に支障をもたらすほどのものではなく、むしろ心地良さがある。陽光で温められたプールに全身で漂っているような心地よさ。意識は明瞭としていた。僕が置かれているいまの状況を認識しようと、感覚の触手を伸ばしている。

ここはどこだろう。周囲を見回すが何らかのアイコンは見当たらない。それどころか何も視界に捉えることができない。吹雪の中でホワイトアウトしたように、右も左も純粋な白色が広がっている。何かがあって、それが覆われてしまっているというわけではなさそうだ。ただの純粋な白色。そこに隠されているものはない。目を凝らしたり、視点を変えてみたところで、何か浮かび上がってくるということはなさそうだ。その真ん中で僕は地面に座っている。

地面に手をついて、ゆっくりと立ち上がる。ゆっくりとしたつもりだったが、それでも頭に頂点に達したとき、僅かな立ち眩みを覚える。突然僕を襲い、そして何もなかったかのように通り過ぎていく。僕の意識の砂浜には、一筋の線が入れられる。とても曖昧な線だが、確実に存在している。やがてそれは意識の海から打ち寄せる波によって、消されるときが来るのだろう。それはすぐに訪れるかもしれないし、あるいはずっと後になって忘れたころ、古い友人が訪ねてくるように突然来るのかもしれない。

辺りを見回すが、やはりそこには何も存在していない。厳密に言うと、存在していないように認識できる。おそらくこれは夢なのだろう。現実こんな場所は存在しない。ある種の夢は、夢を見ている最中でも、いま夢を見ていることがわかるものがある。どうしてそうなるのかはわからないが、とにかく何らかの理由で、いま夢を見ていて、やがてそれは醒めて現実の世界に戻るということが、はっきりとわかる。とても楽しい気分させるものもあれば、悪夢のよ

うな、目が覚めたとき背中が汗でぐっしょりしているようなものもある。いま僕が見ている夢は果たしてどちらに該当するのだろうか。願わくば前者であってほしい。

夢の中だからだろうか。思考が次々と変遷していく。ジャンルの異なるレコードが次々とターンテーブルに乗っけられている。年代もスタイルもバラバラ、出鱈目で因果律のようなものは確認できない。ジャミロクワイが流れたと思ったら、次はチャーリー・パーカーが流れている。その次はビーチボーイズあたりだろうか。嫌悪感を示す僕がいる一方で、その無秩序ぶりを楽しんでいる僕もいる。同じような曲ばかり聞き続けていたら、思考が凝り固まってしまう。その凝りを嬉々として蹴り破って歩んでいく僕。そこには何ら留保も後悔もない。壊してしまったものは仕方がない。また別のものを生み出せばいいだけだ。

足を一步踏み出して歩いてみる。地面だけは白ではなく、濃い灰色の細かい砂利が混じったコンクリートのような素材できているため、そこが地面であることが識別できる。上も下も全部白で覆われていたら、おそらく方向感覚や平衡感覚を失って、立ち尽くしていただろう。だが幸いなことに、地面だけは別の素材でできていたため、いまどこを向いているのかがわかった。もっとも向いている先には何もないのだけれども。

しばらく進んだところで柵が見えた。何かの金属でできている柵だ。地面を構成している素材と似た色をしているが、まったく同じではない。その腰の高さ程の柵に近づいて、先を除くと、地面は丸く切断されてなくなり、白の世界が広がっていた。飲み込まれるような、底が見えない世界が広がっていた。地面は崖のように下までずっと続いている。どこまで続いているのかはわからない。何かをふとした拍子で落としたとしても、再びそれを目にする機会は二度と訪れないだろう。永遠に落下し続けることになるだろう。果たして永遠というものが存在するのならば。柵は左右に伸びている。これもどこまで伸びているのか、その終わりは見えない。

方向を変え、柵に沿って進んでみる。足裏には地面の確かな感触を感じる。一步一步踏み出していく。先は淡い霧のようなものに覆われ、全くと言っていい程見えない。この先に何が待ち受けているのか。想像の範疇を超える、あるいは観念の規範外の存在、もし例をあげるとするならば、変わった口調をした小人が出てくるかもしれない。夢の中だから何が起こったとし

でも、それに異議を唱えることはできない。現実を規定する公理はここでは適用されない。だが何か予期しないものが出てきても、それは僕に害をなすものではないという確証があった。何故だかはわからないが、確証とはっきり言えるほどに。僕の頭の中で起こることが、僕を損なうようなことはないだろう。そこまでストイックではない。確かに日々口にする食べ物に、ある程度の気を配ってはいるが、深夜に目が覚めたとき、そしてそこから眠れなくなったときなどに、気の向くままに冷蔵庫の中身を食べたりすることがある。この例がストイックでないことの適切な証拠かどうかは疑問が残るが、とにかく自分で自分を追い詰めるようなことはしないだろう。それが求められない限りは。

淡い霧の中を進むが、想像していた通り何も変化がない。三步前の光景と、いまの光景を、ある部分でずらしてもぴったり重なる対称となるはずだ。比較するものが何もない。木もなければカラスも飛んでいない、まして標識なんてものがあるわけがない。たとえ標識があったとしても、そこに書く適切な言葉が見当たらないだろう。何もない空間を何て呼べばいいのか。砂漠のほうが、まだ傾斜や砂の模様などの変化があるだろう。風が吹いたり、気温が変わったりするだろう。所々に僅かだが植物があるかもしれない。ここにあるのは地面とその淵に沿って続く柵だけだ。無機的な地面と柵がどこまでも続いている。その柵の隣を僕はいま歩いている。

喉が渇いてきた。アルコールを昨晚摂り入れ過ぎたせいだろうか。みるみるうちに口の中の水分が失われていく。どこかで水を飲める場所がないだろうかと思うが、そんなものはこの先ずっとないだろう。都合よく蛇口が設置されているとは思えない。僕はこの渇きと共に歩き続けるしかない。渇きを癒そうと考えない方がいいだろう。むしろこの渇きを楽しむ、例えば絶えまない生命循環活動の一種として、味わった方がいい。そこに何かしら義務あるいは役務のようなものを感じた瞬間に、それはひどく味気ないものになってしまう。楽しもう。いまの状況を。

そう考え始めると、この不可思議な世界が温かみを帯びたような気がした。現実が存在する煩雑なもの一切を捨象した、ある種の涅槃に近い世界なのではないだろうか。蚕の繭のように

世界全体が柔らかく僕を包んでいる。ここには音もない。響くのは僕の足音だけ。交通渋滞も曇天の朝もない。もっとも涅槃を体験したことはないから、僕の想像に過ぎないのだが。もしかしたら涅槃の境地に至っても交通渋滞があるかもしれない。

ずいぶんと歩いた気がするが景色は変わらない。喉の渇きは現実味を一層増してきて、膜を破りそうにもなっているが、特に気にならない。疲れも感じない。この先をずっと進んだところで、地面と柵が永遠に続くだけなのかもしれないが、もしそうだとすると僕は歩き続けるだろう。文字通り永遠だとしても。シーシュポスの神話のようににはならない。一步一步味わい深く進んでいく。

身体が汗ばんできたのを感じる。テンポ良く歩いてきたことで心地良い高揚感を覚える。周りの空気の温度が、一段階上がった。あるいは僕の中身の温度が上がったのかもしれない。身体各機関は潤滑に機能し、全体を支えている。その一方で全体は各機関を包摂している。そこには超越的な調和が存在する。ある部分が機能不全に陥ったとしても、ただちに全体が機能しなくなることはなく、他の部分が補完的に役割を受け継いで、調和を保つのだろう。致命的な損傷を受けない限り、活動は続く。その活動が熱を生む。微かな熱かもしれないが、確かに存在する。主観的な意味においてはもちろん、客観的な意味においても。

ずっと続く柵の遠くのところに、誰かが佇んでいるのが見える。地面と柵以外に、初めてこの世界でみる物体だ。ないしは初めて目にする有機体と言ってもいいかもしれない。像がぼんやりと浮かんでいるにすぎないが、確実に人の形をしている。これに導かれていたのか。僕はそこに向かって行く。

近づくにつれて曖昧な表皮は剥がれ、実体の確実性が増していく。少女だ。少女が柵にもたれかかって佇み、顔だけこちらを向けている。美しい少女だ。柵にもたれつつも芯がある姿勢を保ち、悠然と佇んでいる。身体の半分以上を占めていると思われる脚は、地面から上体を支えており、小ぶりの頭が上体の頂点に座している。その頭は印象的なショートカットの髪に覆われ、鋭利な断面を思わせる髪によって、周囲の空間と彼女を明確に分断している。ここから

は彼女の領域で、それ以外は含まれないというように。ある種の冷徹さを思わせる。その髪とは対照的に、彼女の全身を包んでいる白いワンピースは、周囲と穏やかに融合しており、境界が曖昧なものとなっている。彼女を包みつつも、外的要素を彼女の中に取り込んでいる。彼女の内部で行われた融合が、表象として彼女の印象を示している。その融合過程はおそらく彼女自身も詳細にはわからない、一種の無意識下で行われ、結果のみがいまこうして顕現している。あるいはおおまかな指令だけ彼女が出して、あとはとても機械的に行われているのかもしれない。明確な因果関係が存在する化学反応式のように。いずれにせよその融合は彼女独自のもので、彼女の空気感とでも呼ぶべきものを形成している。

僕は彼女に近づいていく。まっすぐにここまで彼女に導かれてきた。道中は味気ない無機質なものだったが、そんなものはどうでもいい。彼女がここで僕を待っていて、こうしていま僕は彼女の元に来た。長い間彼女がここにいたような気もするし、少し前に電車が滑り込んできて、あたかもずっと待っていたかのような雰囲気を出しているような印象もする。僕の主観に過ぎないが、彼女はそういう部類の行為を得意としてそうだ。事実とは少し異なる解釈を行う。改変するとでも言うだろうか。(僕達のもの見方は全て解釈によって行われていることはそうなのだが。言いたいことが適切に伝わるように願う。) 見方によっては悪意があるように見えるかもしれないが、むしろ害のないように物事を上手く取り繕うことに長けているとも言える。その行為によって誰かが気分を損なうことはなく、功利主義的に考えればプラスに働く。あくまで功利主義に則れば。それが果たしていいのかどうかはここでは問題にしない。

彼女が口を開く。

「こんにちは」

心地良い声だ。澄んでいるがほんの微かな濁りもある。それがいいアクセントとなっている。

「こんにちは」とりあえず僕はそう答える。

しばらくの沈黙が漂う。僕の頭の中には尋ねたいことが割と多くあったが、彼女を前にする

とそれらは打ち消えた。なんだかとても些末なことの気がした。そんなことを気に掛けていることが恥ずかしいとすら思えるような。だから僕は何も口を開かなかった。

彼女も口を開かなかった。ただじっと僕を見つめている。とてもありきたりな表現だけど、吸い込まれるようなその瞳で。それ以外の表現が上手く浮かばない。彼女が身に纏う純白のワンピースと同じように、何かしらの方法で周囲の要素を取り込んでいるような瞳。掴んでは離さない特殊な引力が発生している。一度それに魅せられたら逃れようと思っても叶わない。離れられた気がしても、ずっと後にまで引き摺られるものがある。そんなものを表現しようとしても適切な言葉が浮かばない。ましてそれを目の前にして何かしらのアクションができたのだろうか。たとえできたとしても、それはとても陳腐なものだったに違いない。そんなものを彼女に見せるよりかは、ただこうして黙っているほうが適切な気がした。何も口にせず、ただ視線を交わし合う。言語化できないやり取り、表象として現れることのないやり取りを試みる。

案外僕はそうしたやり取りが得意なのかもしれない。といっても誰かとその能力を比較した機会も、自分自身に問いかけてみた経験もない。

「僕はこうした能力があると思うんだけど君はどう思う？」

「そうだね、案外君はイケてると思うよ」

何かしら客観的な指標、あるいは基準はないけれど、何となく、ただ何となく僕は得意な気がした。あくまで人よりは。そこに確固たる自信があるわけではない。

どれくらいの時が経過したのだろうか。相変わらず時間はその背骨を歪めてしまっている。まったくしっかりしてくれよ。そんな愚痴を口にする余裕もなく、僕は少女との対面に熱中していた。時折の瞬きと、呼吸に伴う胸の動きを除いて動くものはない。全てのものが静止している。もっともここには僕と彼女のほか何もないのだけれども。

彼女の胸はどちらかという点小ぶりのほうだった。過度に自己の存在を主張するわけではなく、だけれども彼女の胸として存在していることに誇りを持っている。胸としてはそれだけで充分、いやむしろ誇りを持っていなければ、いくら大きな胸だとしても虚しいものだろう。図体だけ大きくて醜悪なデザインの車のように。(具体的な車種が頭に浮かんではいるが、ここで

名前を出すのは差し控えたい。熱烈な自動車ファンによるバッシングは避けるべきだ。もっともその車種にファンが果たしているのかは疑問だが。) 彼女もおおむね自身の胸に満足しているはずだ。そんな自信がうかがえる。

静寂が漂う。純粹な静寂だ。そこに先立つものは存在しない。楡の梢が揺れる葉音も、夜啼き鳥の啼き声も存在しない。耳を厳密に澄ませば、僕と彼女の呼吸の音や身体活動の音までも聞こえてきそう。心臓の鼓動よりもっと微弱な活動音までも。たとえば僕の身体を組成している細胞の一つ一つが軋む音。この世で生がある存在である限り、何かしらの音は出しているはずだ。そうした音を遮るものはなにもない。いまにも普段は聞き取ることのできない音たちで溢れかえりそうな予感に襲われる。だがそれは所詮予感に過ぎない。それとなくこの静寂を覆う何かやってくるような気がするというだけで、いささか現実性に欠ける。といってもこの世界で現実性という言葉はあまりにも不釣り合いだが。

彼女が一筋に結ばれていた口を開き、それと共に声が出される。

「また会ったね」

また？いまそう彼女は言った？可能な限り素早く、過去の記憶を巡るが、僕と彼女は初対面なはずだ。「失礼だけど、どこかで会ったことがある？」

彼女の端正な顔が少し曇る。だがすぐに晴れて、少なくとも僕には晴れたように見え、こう続ける。「そう…仕方ないわ。あなたが覚えていないだけで、わたしとあなたは仲が良かったの」

「仲が良かった？君と僕が？」

「ええ、なかなかね」

なかなかという表現がひっかかる。なかなかという言葉が交遊関係において、どの程度のものを指すのかもひとつ理解できなかった。

「どうして僕はそのことを覚えていないのだろう」

「いろいろあったから」

「いろいろ？」

「そう。簡潔に事情を説明することは難しい程度に」

どうやら彼女にいまここでその事情を説明する気はないようだ。しばらくは曖昧な霧の中に置いておく気らしい。果たしてその霧を晴らす言葉は見つかるのだろうか。

「ここは一体どこなんだ？」

彼女は微かに頷く。それに伴い綺麗にカットされたショートの前髪が揺れる。穏やかな波のよう

に。

「当然の疑問ね。でもごめんなさい。わたしには答えることはできない」

「君は答えを知っている？」

彼女が首を横に振る。その後に沈黙が横切り、僕たちの前に佇む。だけどすぐに彼女の言葉がそれを打ち消す。

「わたしが思うに、そのことはあまり重要なことではないような気がする」

「…重要でない」

「ええ、いまわたしたちがどこにいるのかということは」そこで言葉を一旦区切って、さらに続ける。「それよりもむしろ、わたしたちがこうして再開したことのほうが、何か大切な意味を含んでいる」

彼女の言葉を受け入れて、その内奥をじっくり咀嚼する。隅々まで養分を吸収するかのよう

に。何か大切な意味を含んでいる。

その意味について思い当たるものがないか、自分の内側を探るが、該当するものはヒットしない。もう少し具体的なキーワードが必要なかもしれない。

「過度な詮索や、質問攻めはあまり好きではないけれど、もう少し解像度を上げることはできないだろうか」

彼女は口の端を適切な角度へ上げ、適切な微笑みを浮かべる。笑顔の図鑑のようなものがあ

ったら掲載されていたに違いない。そして多くの人がそれを眺めながら、練習する。自分が浮かべる笑顔が適切なものになるように。

「できればわたしもそうしたいのだけれど、それは適わない。制約が多すぎるの」

「制約？どんなものがあるのだろう」

「現実的なものやそれに準ずるものは、ここでも当てはまるわ。たとえば重力のような。でも聞きたいことはそうした類のことじゃないのよね。ただそれを説明するのにも別の種類の制約があるの」

「制約の制約のようなもの」

「そう、制約の制約。ただ現実世界におけるそれよりは可変的だけれど」

「ある程度の自由が利く」

「あなた次第でね。いまのままで現実世界とあまり変わらない制約がある。もっとも見て分かる通り、空間的な制約は初めから最低限なものだけれど、それ以外の制約も、最低限に近い水準に持つて行くことはできる。あなた次第で」

「ということは、ここは現実の世界ではない？」

「ええ、一般的な意味においてはね」

何だか頭が混乱してきた。思考回路が正常の纏まりを失い、混じり合っている感覚がする。一般的な意味において現実の世界でない。それはいったいどういう世界、あるいは状態のことを指すのだろう。言葉の意味が、その形態から乖離していく。ラベルがペリペリと剥がされるように。剥がされたラベルが乱雑に重ねられ、元あった場所とは違う場所に貼られていく。ないしは空白の位置に放置されている。

僕は深呼吸をする。新鮮な空気を肺の中一杯に取り込む。脳の必要としている箇所に酸素を供給していく。何度か深呼吸を行うが、需給のバランスはなかなか均衡に至らない。時間をじっくりと掛ける必要があった。

然るべき時間を掛け、思考が一段落し、その稼働音が鳴りやんだ。P Cの電源を落としたときのように。だが形を成した結論のようなものは出てきていない。未だ熟していないどろどろとした、言語化される以前のものが、僕の頭の中に浮かんでいる。その存在はとても仄かなものだ。神経を鋭く集中することでようやく確認することができる。だが存在は確認できても、

それが意味するところまでは読み取ることはできない。何しろ液体のように流動的なものだから。たとえ一つの意味を読み取れたとしても、またすぐ次の瞬間にはまったく違う意味を成している可能性を含んでいる。

何を口にするべきか、適切な言葉が見つからない。

「それで構わない」

彼女は僕の考えを読んだように、短くそう言った。「言葉も決して重要ではないし、すべての意味を明らかにすることはできない。どんな言葉を尽くしても」

僕は曖昧に頷く。「それじゃあ、一体なにが重要になってくるのだろう」

「さっきも言ったじゃない。わたしたちが再開したこと、それ自体が大事な気がするって」

「うん、それはわかった。あいにく僕には再開は当てはまらないのだけれど。つまりどうしても君と会ったことを思い出せないんだ。でもそこには何か訳があって、その訳はいま説明することはできない」

彼女はきっぱりと頷く。「言葉は並べられても、説明にはならない」

「では再開したことに意味があるという、君の仮説に則った上で、次に僕たちは何をすればいいんだ」

彼女は驚愕と少しの困惑の表情を浮かべる。どうしてそんなことを聞くのかと。まるで1 + 1が2になる理由を問われたときのように。少しの沈黙の後、こう言った。「そんなつまらないことを聞かないで」

静寂が訪れる。彼女の言う通りかもしれない。一般的な男女の関係において、(僕と少女がそうした関係だったのかは定かではないが、おそらく違いただろう。何しろ彼女は十代後半の風貌で、僕は壮年の域に立ち入ろうとしているのだから、) 二人が会ったときに男が女に対して、僕たちが会う意味はあるのかと尋ねているようなものだ。そんなことを聞いたら幻滅するばかり

か、関係に致命的な影響を及ぼしかねない。修復不能なほどのダメージを。

「ごめん」

滑るようにその言葉が僕の口から流れ出てきた。それで彼女の損なわれた気分を償うことができるのかはわからないが、とにかく何らかの言葉で彼女に謝るべき気がした。結果としてとてもシンプルな、何も装飾のないワードが出てきたが、他に適切なものが見つからなかった。でも過度な飾り付けは省くべきだ。オッカムの剃刀のように。

「いいわ、気にしないで。ただ野暮な会話はやめましょう。何のためにもならない」彼女がトーンを若干抑えて言う。

「そうだね、そうしよう。気を付ける」

「変に意識する必要はないわ。意識して会話することで損なわれる部分もあるかもしれない。あくまで自然体で」

「自然体…」

「そう、あなたの心が導く方向にただ純粋に従えばいい」

その彼女の言葉を頭の中で繰り返す。心が導く方向に純粋に従う。随分懐かしい響きを帯びている。ずっと昔に行われていたがいまは廃れてしまった儀式を、再び取り戻すときのような。かつては僕もそのような儀式を信条として持っていた時期があったのだろう。いまとなつては思い出すこともできないほど昔のこと。存在していたことすら、朧気になってしまったもの。年を経るにつれていつの間にか色褪せてしまった。気付かないうちに。

「なんだか懐かしい気がする」

「懐かしい？」

「うん、ずっと昔に失われてしまったもののような」

「ずっと昔…まだあなたはそれほど年をとってないじゃない」

「でも少なくとも君よりは長い年月を過ごしているよ。この身体と共に」

それを聞いて彼女は自身の身体と僕を見比べる。それとなく。どうやら僕は得られたものよりも、失ってしまったもののほうが多そうだ。それらを一つ一つ描写してもいいのだが、気が

滅入りそうだからよそう。

彼女がふっと視線を逸らす。大きな鳥が空を横切って、それを追いかけるように。

「少し歩かない？」

「いいよ、歩こう」

彼女はくると反対を向き、そちらへ歩き出す。僕は追って隣を歩く。ゆったりと心地良いペースで二人並んで歩く。僕の肩ぐらいの位置で、彼女の整えられたショートヘアが、彼女の歩みに合わせて微かに踊る。ストレートではなく、若干の抑揚を持った髪は、少女と一体になって動く。別にそこには何ら意味はないはずだが、何かを象徴しているような気がしないでもない。たとえば少女のダイナミズムとか。

僕たちは柵に沿って歩く。さっきまで僕が一人で歩いてきた柵の続きを。一人で歩くのと二人並んで歩くのとでは、同じ光景の中でもやはりどこかが違う。まして美しい少女と歩くのは。決してルッキズムに陥るつもりはないが、忘れていた昂揚感がふと蘇る。

もし僕が少女と同じ年であつたら、あるいは僕が若かったころに少女と出逢っていたら、おそらく、いやほぼ確実にアプローチしていただろう。成功するかは定かではないが、むしろ失敗する確率のほうが高いだろう。僕には取り立てて魅力と言える部分があるとは言い難い。平凡という判断軸があるとしたら、その軸の中心に近い位置にいるだろう。少なくともマイナスではないが、標準偏差を小さくさせているはずだ。それに比べて彼女は平凡という枠は優に超えている。何かお洒落なファッション雑誌（僕はこの方面にとことん疎いので具体的な誌名を出すことができない）を捲っていて、その一ページに彼女が載っていても全く違和感はないだろう。それどころか雑誌の格を数段階上げる働きをしているかもしれない。それでいて緊張感を相手に抱かせない、柔和な雰囲気も併せ持っている。どこか超然とした部分はあるが、それと共に親和な部分もある。その二つが併存するのか、するとしたらどのような方法なのか、よくわからないが、彼女の中では見事に調和されている。その調和はおそらく言語化できる領域を飛び出している。

とにかく何が言いたいのかというと、僕と彼女は不釣り合いだろう。男女という性において

は。まして年齢もかけ離れている。僕は人生における頂点をおそらくは通過し、今後は緩やかに低下していく段階に入った一方で、彼女の生はこれからだ。いままでは準備運動に過ぎない。これから待ち受けている生を存分に享受するために、心身を成熟させる段階を経ている。それを以てして臨んでいく。これも僕が失ったものの一つだろう。

「どこに向かっているんだろう？」僕は彼女に問いつつも、その問いには正解がないことはわかっていて。

「どこだっていいじゃない」少女は軽く飛び跳ねるような調子で答える。

「そう言うと思った」

「どこにも辿り着かないし、別の言い方をするとどこへでも行ける」

「どこへでも？」

「そう、どこへでも。その場に居ながらにして」

「それはどういうことを意味しているのだろう」

「意味とかじゃないわ。そんなしがらみは置いておいて」少女は微笑む。

「しがらみからの脱出…」

「そう、何も知覚しているものが全てではないわ。その奥に存在しているものがある。それは知覚できるものと表裏一体になっているかもしれないし、かけ離れたものかもしれない。いずれにせよ感じるかどうか」

「なんだかそんな内容の本を読んだことがある。昔のことで詳しくは覚えていないけれど」

「わたしもその本を読んだかもしれない」

「そうだね。もしかすると同じ本なのかもしれない。細かいことは忘れたけれど、とても面白いことが書いてあった」

「聞かせて」

少女と二人並んで歩く。随分な距離を歩いた気がするが、空間の概念は捻じれている。どこまで行っても柵は続くし、歩いていたい気持ちが絶えることはない。これは僕が望んでいるか

らなのだろうか。僕が少女に会いたいと深層で望んだことで、何か超越的な力が働いて、彼女は僕の目の前に現れ、柵はどこまでも続き、尽きることはない。もしかするとその超越的な力とは僕自身なのではないだろうか。僕がこの状況を創り出しているのではないか。そんなことが頭をよぎる。

だからと言って何かが変わるわけではない。おそらく状況を操作する権限は、僕の無意識の領域に委ねられているため、意識したところで干渉できるわけではない。深い闇の中に隠されており、光で照らし出されない限り、表出してくることはない。そして僕はその光の当て方を知らない。何かサーチライトのようなものがあれば便利なのだが、そんな都合のいいものは存在しない。ただ都合がいいとは言っても、もしそんなものが存在してしまったら、世界はおそろしく淡泊なものになるだろう。あらゆるものが言語、あるいは僕の知らない何らかの手段によってあらわすことができる世界。そんな世界よりかは、いま現在の姿のほうがいいのかもされない。程よく闇に覆われている現在の姿が。

「なんだか、君とこうして歩いたことがある気がする」

少女が僕の瞳を見つめこう言う。「ええ、実際にわたしたちはよくこうして歩いていたわ」彼女の瞳は淡い光を反射している。その光は彼女の中で増幅され、自身の色に染まっているようだ。

「そのときの気持ちが蘇った感じだ」

「それは嬉しいわ」

「そのときも宛てもなく歩いていた？」

「目的は定めず」彼女の瞳の光が揺れる。それは僕に何か、穏やかで温かいものを思い起こさせる。

「それは実に楽しそうだ」

「とても心地良かった。なんてことのない会話を交わし、過ぎゆく景色を眺める。途中で喉が渴いたらカフェに立ち寄ったりもした」

「残念だけど、ここにカフェは無さそうだ」

彼女が笑う。その笑いは僕の全身を柔らかく包んでくれる。「わからないわ。角を曲がったら小さなカフェがあるかもしれない。美味しいコーヒーを出して、セロニアス・モンクを流しているようなカフェが」

「君はセロニアス・モンクを知っているの？」

彼女が頷く。「あなたが教えてくれた」

どうして僕は少女のことを覚えていないのだろう。記憶の片隅に、僅かな残滓が引っ掛かっているが、それはとても小さな断片に過ぎず、物語全体を語ることはできない。所々大事な部分が抜け落ちてしまっている。いや正確に言うと、核の部分が消失し、後に残されたのは、それがかつて存在していた予感のようなものでしかない。口承で伝えられてきた英雄の昔ばなしのように。

こんなことは僕において、あまり起こることではない。いやむしろ今までに経験がないことで、大いに僕を乱している。ある人に関する記憶をほとんど忘れてしまうことなど。どちらかと言うと僕は記憶力が良い方だと自負している。基本的に一度会った人の名前は、次に会った機会でも覚えているし、一度行った場所は、よほど複雑な道程でない限り、地図を見ることなく辿り着くことができる。これは現実において、なかなか有用なものだと思う。人間関係ではプラスに働き、駐車場に停めた車の位置で迷うこともない。そして女性を好みの店に連れて行くことができる。あるいは苦手な食べ物の注文を避けることも。

だが少女に関しては、そのほとんどの部分が欠落してしまっている。これはどういうことだろう。何か外的な作用が働いているのだろうか。記憶をしていては実際的な面で不都合なことがあり、蓋をしてしまっている。外に漏れ出ることがないように。ある種の防御反応なのかもしれない。僕自身が意図して蓋をしたのだが、そのこと自体にすら蓋をしている。ないしは強力な外部からの力が働いて、有無を言わさぬうちに閉ざしてしまったのか。だが上手いこと彼女に関することだけに蓋をすることができるのだろうか。またその蓋は、彼女と接しているうちに僅かだが開いているような気がする。その隙間から朧気な匂いが漂っている。

あるいは全て僕の意識の中で働いていること、として片づけられるのかもしれない。それならば雑の言い方をすると、何でもありだ。全ては僕の範疇だ。都合の良いように解釈できる。

ある人は強く願うこと、そして訓練することで夢の中で自由に動くことができるようになると言っていた。仔細な方法は忘れた、というか互いに酒をかなり飲んでいたし、僕はまったく信じていなかったの、彼が熱く語る内容を聞き流していた。だがとにかく彼は夢の中で自在に活動することができ、望む人物を登場させることができるらしい。そして当然のことながら、自身の欲望に忠実に従っていたそう。あとは想像にお任せする。いずれにせよ、いま起きていることはそうした部類のことなのかもしれない。ここは夢の中で、彼女はその中に登場する架空の人物に過ぎない。現実には一切干渉することなく、全ては僕の頭の中で完結する。そこでは何が起こっても不思議ではない。たとえそこにどんなに深い闇が眠っていたとしても。

「それにしてもリアル過ぎる…」僕は思わず口にする。

「というと？」

「これは夢なのかと思ったけれど、それにしてもリアル過ぎる」

「あなたの仮説は棄却された？」

「完全にではないけれど、おそらくはそちらの方向に傾いている」

「夢でないとしたら、ここはどういう成り立ちをしていると思うの？」

「それがわからないんだ…」

彼女は微笑む。無言のうちに彼女の答えが含まれている。

「でもそれは重要ではないだろうか？」

「ええ、その通り」そう言って美しい笑みを浮かべる。「でもそうやって答えをはぐらかしてばかりいては不親切だから、ある程度の示唆は提供してあげる」

「ある程度の示唆」

「そう、わたしなりの解釈」

「聞かせほしい」

「ここは狭間のような部分だと思うの。こう考えて。認識でき得るあらゆるものは、複数の要

素で構成されていると。その構成要素の素材なり配分なりが、異なることによって、ものの差異が生まれる。一つ一つの要素は色の違う粘土のようなもので、様々な粘土が混じり合うことによって、わたしたちが認識しているものができる。言い換えると粘土玉になることで、認識できるようになる。その粘土玉において、一つ一つの粘土はぐちゃぐちゃにこねられて、明確な境界というものはない。グラデーションになっていて、あやふやな部分がある。そうした部分が、いまわたしたちがいる場所なのだと思う」

「つまり現実と夢の間の部分ということ？」

「そういうこと。どちらの要素も含んでいて、どちらかであると完全に言い切ることはできない部分」

「なるほど」

彼女の言葉を浸透させる。それは確かにある程度の示唆、いやかなり重要な示唆に思えた。だが少女の口ぶりからして、あくまで示唆であって、客観性あるいは普遍性を備えた答えではないのだろう。しかしそんな答えが存在するとは思えないし、いまの僕にはある程度の示唆で十分だった。それだけでも僕の思考は、収まるべきものが収まるべき場所に入った感覚があった。それに繰り返すがここがどこであろうと、あまり重要ではない。そう彼女は言った。

「だとすると君はいったい、どういう存在なんだろう？」

「あなたはもう思っているの？」

「そうだな。もしかすると観念的存在とかアイデアとか」

「ふふ、残念ながら違うわ。わたしはどこかの団長ではないわ」

「言ってみただけだ。もし実際にそうだとしたら、君の示唆あるいは解釈は矛盾を孕んでいることになってしまう」僕は一呼吸置いて続ける。「君の示唆に則ると、君は現実的な存在と、観念的な存在の両方の要素を含んでいることになる。そのどちらかであるとは完全に言い切れない。そうだね？」

彼女は頷く。

「こんなことはいままで経験したことがないから、あくまでこれは僕の憶測に過ぎないけれど、

現実の君は別に存在するんじゃないのかな？」

「さあ、どうかしら。わたしはすべてを知っているわけではないの。どちらか言うと、あなたの立場に近いと思う。ただ来るのが少し早かったというだけ」

僕はそれについて少し考える。確かに少女はすべてを知っているというわけではなさそうだ。彼女の言う通り、この世界における異邦人ということは僕と変わらない。ただ彼女は何かを知っているはずだ。少なくとも僕の過去を知っていると言った。そしてその過去において僕となかなか親しかったと。

もしかすると少女は僕との関係、僕の記憶にない過去との関係、これを知っているに過ぎないんじゃないだろうか。（それでも僕には結構な影響を及ぼすのだけれど。僕自身の知らない僕を少女が知っているというのは、あまり心地良いとは言えない。靴の中に小石が入って、ひっくり返すのだけれど、どうしても取れない感覚のようだ。） そうだとすると、ここがどこであろうと重要ではない、という彼女の主張は納得できる。彼女もこの場所の成り立ちについて詳しくは知らないし、あまり気にしてもいいように見える。

「だから君は、僕たちが再開したことのほうが重要だと言ったのか」

「…ええ、その通り。もう会えないかと思っていた」

「どうしたら君のことを思い出せるのだろう」

「それもわからない」少女の顔に光が翳る。「いまはこうして並んで歩くことしか思い浮かばない。話すことしかできない」

「…わかった」

僕は足元を見る。一切の変化がない地面が続いている。

「もっとうまい言葉があるのかもしれないけれど、君とこうして話しているのはすごくいいことだと感じる。それがどのようにいいことなのか、適切に表現できないのが、もどかしい」

「別にそんなものは必要ない、わたしたちの間には。感じられるだけで十分」

「そう言ってくれて嬉しいよ」

俄かに彼女の手を握りたい感覚に駆られる。もし握ることができたら、それは素晴らしい気

分を味わうことになるだろう。互いの感情を、手を通じることによって交わらせることができる。もっと直接的に繋がることできる。その内面に深く潜っていける。おそらく僕が手を取ったとしても、少女は拒否しないだろう。二人の間にはある種の親和性が漂っており、それをひしひしと僕は感じている。彼女から発せられたものなのか、あるいは僕自身から発しているのかわからない。いやおそらくは相互発生的なのだろう。互いに触発し合って、一つの親和性の像を形成している。

もちろん内面における交流だけに留まらないだろう。あるいは手を握ることによる内なる疎通は、最終的な産物であって、身体的な繋がりがまず感じられるのかもしれない。見る限り彼女の白い手はきめ細かく、艶やかなものだった。それに触れることができたら。

しかし僕に彼女の手を握る決断は下されなかった。寸前のところまで迫ったが、最後に何か強力なものが、僕を留ませた。彼女の手を握ってはならないと。彼女の手を取った瞬間に、この場所が消滅してしまうような気がしたのだ。それは何の根拠もない、一種の直観のようなものだった。ただ何となく、少女と触れることで、何かしらの変化が生じ、そしてその変化はこの場所の消滅に至るという直観。僕たちの身体的な接触が契機となって歯車が動き出す。それは大きな力を生み出すだろう。そうした可能性が直観によってもたらされ、否定できない以上、僕は少女の手を取ることができなかった。もっとこのままでいたい。どこまでも歩いていたい。

「ありがとう、そう思ってくれて」彼女が美しい笑顔を表して言う。

「どうしてわかったんだ？」

「あなたの顔にそのまま書いてあるんだもの。わかりやすいわ」

少し顔が熱くなった。考えていることが、フィルターも無しに表に出ていること、そしてそのことを彼女に指摘されたことによって。

「別にいいじゃない。何を考えているのかわからないよりは、そうして素直に表現してくれたほうが嬉しい」

「それがあまりに率直ということはない？」

「わたしは気にしない。だからあなたも気にしないで。誰か見ているという訳でもないし。ここにはあなたと私しかいない」

「そういう問題ではないような気もするけれど、君がそう言うならそれでいい。確かにここには君と僕しかいない」

「何か不都合なことがあった？」

「いやそんなことはない。ただ何というか落ち着かないといか。もちろん君と一緒に居ることにある種の心地良さを感じている。だけど…」

「だけど？」

「僕以外の何かがそれを許さないんじゃないかな？君のような少女と僕が一緒にいることを」

「まったくもどかしいわね。わたしがあなたと居たいから、いまここに居る。それで十分じゃない？何かしら保証のようなものが必要なの？」

「いやそんなこともない…」

「あなたは他の人と居るときも、根拠を求めたりするの？」

返す言葉が見つからない。現実の、つまりここではない通常の世界での僕の振る舞はどのようなものだっただろう。居心地の悪い空間、たとえば大して関係も深くないのに、義理のようなもので参加している空間においては、確かに居場所の根拠を探すようなこともあったかもしれない。窮屈な状態になって、無理に思考した結果の振る舞いは、ひどくごちないものに映る。自分にとっても、あるいは相手にとっても。そんな自分を認識した僕自身は、何か手を打てただろうか。おそらくやり過ぎていたに違いない。そうして自身を無視し続けた結果生じる、摩擦のカスは一つ一つは細かいものだが、着実に僕の中に蓄積されていった。いずれは臨界点を迎えることになるだろう。そうなる前に、初春にさらうような滑らかな風で吹き払う必要がある。どこまでも流れていく風によって。

「君は年下のようには見えないな」

「よく言われる。それはいい意味においてよね？」

「それはどうだろう」

少女が笑う。綺麗な白い歯が隙間から覗く。それは僕に何故か非自然的なものを想起させた。

「君は僕以外のことに、多くのことを知っているんじゃないかな？」

「それはどうかしら。他の人がどの程度ものごとを把握しているか、それを知る手段があまりないから」

「うん、それはそうだ。でも君と話していて感じるよ。君の背後あるいは内部にあるものを」

「どんなものを感じる？」

「感じてそれは果たして言語化できるものなのかな？」

「そうね、少なくともわたしにはできないわ。自分の意識を認識するようなことは」

「僕にもできない。訓練でできるようになるとも思わない。でもそれで構わない。感じることはできるから」

「感じることはできる…」少女は囁みしめるように言葉を呟く。そこに何かしらの隠喩が含まれていることを確認するように。そしてこう言った。「その感覚を忘れないようにしないとね」

「そろそろあなたが戻るときが来たわ」

「戻る？それは夢から醒めて現実に戻るということ？」

「ええ、あなたは元の現実に戻り、あたしはあなたの前から一時的に見えなくなる」

「一時的にということは、また僕たちは会えるということだろうか」

「あなたが望めば会える」

「僕はそう望む気がする。たとえいまここでの出来事をすっかり忘れたとしても」

「ここで起こったことをあなたが忘れることはないわ。そう意図しない限り」

「つまり僕は望めば、ここでの出来事を現実においても覚えていて、また君と会うことができるということ？」

「そういうこと。選択はあなたに委ねられている」

「ならば僕たちはまた会うことになる」

「そう言ってくれて嬉しいわ」

「ずいぶん長いこと話をしていた気がする」

「そうね、そして長い距離を歩いた」

「どれくらいって聞くのは、きっと意味のないことなんだろうね」

「ええ、ここでは時空間の軸は意味を持たないから」

「どうすれば君と会えるかな？つまり望むことの具体的な方法についてだけど」

「詳しくはわたしにもわからない。漠然と思うことで何かしらの法則が働くとしか言えないわ」

「また曖昧な言葉が出てきたね。ある程度の示唆と言ったほうがいいかな」

「できることなら、わたしも具体的な方法を教えてあげたいのよ」

「でも君はそれを知らない」

「そもそもそんな方法が存在するのかどうかすら知らない」

「わかった。じゃあ僕は望み続けることにしよう」

「それが一番の近道だと思う。下手な方法を模索するよりも」

「ありがとう、君と話せて楽しかった。とても」

「こちらこそありがとう。また会いましょう」

その彼女の言葉を最後に、彼女の顔が歪む。いやこの場所全体が大きく揺れていた。そこに含まれるもの全てを混ぜる勢いで揺れる。自分が立っているのか座っているのか、わからなくなる。少女のワンピースの白い色が、渦を巻いて回転する。それは強風に煽られる旗のようだった。最後に少女の言葉が響く。

「また会いましょう」

その言葉が実際に発せられたのか、あるいは攪拌された僕の意識の中で再生されたものなのかわからなかった。どちらだとしても、それもあまり重要なことではないように思えた。彼女の声が頭の中で響いている。そちらのほうが、何かしらの意味を内包している気がした。ゆっ

くりと視界が黒い幕で覆われる。波が砂浜を侵食していくように。そして僕は完全なる無の中に陥った。

まるで二つの薬を提示されているかのように

目が覚めると、そこはいつもの天井だった。ほぼ毎日見ている光景、無意識のうちにへばりついた光景。何の特徴、あるいは染みもない白い天井。どうやら僕は自宅のベッドで眠っていたようだ。久しぶりに深い眠りの中に入り込んでいた感覚がある。まだ眠りの予兆が若干、帯を引いて残っているが、目を開いているうちに正常に覚醒の段階を進んでいった。

昨夜、加瀬と名乗る男と二人で飲み、そこからの記憶がすっぽりと抜けている。僕は一体どうやって家に帰り着いたのだろう。記憶にあるのは、心地よいアルコールの感覚に浸っていたことと、秘匿されたようなバーの雰囲気だけだ。いつ店を出て、加瀬と別れたあとどうやって帰って来たのか。

ひとまずベッドから出て立ち会あがる。かなりの量の酒を飲んだはずだが、その名残りはない。いつになく頭はすっきりとしている。口の中は乾いていたが、酒を飲んだあと特有の嫌な感覚もない。記憶と共にアルコールもどこかへ消えてしまったのだろうか。

カーテンまで歩いていき、勢いを持って開く。家に戻って来た覚えすらないのに、律儀にカーテンは閉められていた。遮るものがなくなった窓から、留保なく陽光が差し込んでくる。その眩しさに一瞬目を細めるが、次第に慣れ、恵みを全身で享受する。意識がもう一段階覚醒し、全身を血液が巡り、その感覚をはっきりと覚える。隅々にまで意識を行き渡らせる。窓の向こうに見える青空と同じく、そこに不純物はなかった。怠りなくすべてが循環していた。

キッチンに行き、蛇口を捻り、コップに水を注いで飲む。水が渴いた喉を潤していく。そのままコップを飲み干すと、もう一度注いで二杯目を飲む。渴きはある程度癒されたが、完全ではなかった。ただそれ以上飲む気にもならなかったので、キッチンを出て洗面所に向かう。

鏡の中に映る僕を見た瞬間、美しい少女との一連のやり取りが、頭の中に蘇って来た。特に何が契機となったかは定かではないが、僕が鏡の中に映る人物を僕と認識した瞬間、それは猛烈と言っていい程の勢いで、どこからか僕の頭に降って来た。よく訓練された特殊部隊のように。あれは果たして夢だったのだろうか。あるいはそれに類するものか。それにしても細部ま

ではっきりと思い出すことができるし、彼女もここは狭間のような場所だと言っていた。だが現実ではないことは確かだ。逆に言えば、それくらいしか確信を持って言えることはない。すべては僕の妄想として片づけることも可能だ。

でもあまりにもリアリティがあったし、彼女は「また会いましょう」と言った。その言葉をそのまま受け取る程、僕も若くはなかったけれど、彼女の言葉を信じてもいいような気がした。あくまで気がするというだけであって、確信のない希望のようなものだった。彼女には、相手にそう思わせる何かがあったのだろう。少なくとも僕はそういうものを実際に抱いている。それが彼女の言っていた望むということなのだろうか。僕には具体的な示唆が与えられていない。自分で何かしらの手掛かりを掴むことが求められている。それに会うとしても、あの場所でののだろうか。あるいはこの現実においてなのだろうか。言うまでもないことだが、いま鏡の前に立ってその中身を見つめている僕は、確かに現実には居ると認識している。

考えれば考えるほど、訳がわからなくなってきた。全貌の見えない迷路に入り込んでしまっていた。その迷路に出口があるのかわからないし、そもそもどうやって入ったのか覚えていない。気が付いたら四方を壁に囲まれていた感覚だ。導くのは「望む」という行為。それはある種の成功哲学のようなものなのだろうか。強く望めば現実化するといった類の。

ひとまず入り組んだ思考を洗い流すために、蛇口を捻って水を出し、その冷たい水で顔を洗う。何度か水を手で掬って、顔に柔らかく当てる。棚に並べられたタオルのうち一つを手に取り、顔に残った水滴を拭き取る。また一段階意識が明瞭になった。

洗面所を出て、またキッチンに戻る。食欲はあまり感じなかったが、何も食べないとそれはそれで厄介な空腹感にあとで襲われるので、とりあえず口に入れられるものがないか、冷蔵庫を開けて探す。先週買ったハムと、野菜室には若干しおれたレタスがあったので、それを取り出してパンで挟んでサンドウィッチを作る。出来の良いサンドウィッチとは言い難いが、それで十分だった。少なくとも数時間は空腹感から免れることができる。それに料理に凝り出せば、際限がなくなる。上等なサンドウィッチにしようと思ったら、いくらでも手間と時間あるいはお金を掛けることもできる。あまりそうしたことには、僕は興味が湧かなかった。

サンドウィッチを食べ終わり、それを乗せていた皿を洗って、ポットに水を入れて沸かす。沸くまでの間、音楽を流して、それに耳を傾ける。ソニー・ロリンズのザ・ブリッジを聞き終わったところで、少女が僕にセロニアス・モンクを教えてもらったと言っていたのを思い出し、彼が演奏するラウンド・ミッドナイトを流す。ピアノソロだけのシンプルなバージョンだ。最低限のリズムをとるドラムやベースすら介在しない。彼のピアノだけが曲を奏でている。どういった経緯で僕は彼女に、セロニアス・モンクを教えたのだろう。CDを彼女に貸したのか、あるいは曲と一緒に聞いたのか。あの年代の女性にモンクは響いたのだろうか。少女はそれについても何も言ってくれなかった。ただ少なくとも、僕が教えたというジャズピアニストの名前を憶えていて、そのことを僕に伝えてくれた。

その曲の途中でポットが沸騰したので火を止めて、コーヒーフィルターに入れた粉末コーヒーにお湯を注ぐ。じっくりと時間を掛けて抽出させる。フィルターからマグカップに向かって、滴り落ちていく。その様子を仔細に観察する。そこに何かしらのヒントが含まれていないかと。「望む」という行為の具体的な方法が、記載されたマニュアルがないかと。

当然のことながら、コーヒーにそのような示唆が含まれているはずもなく、マグカップは満たされ、純粋なコーヒーが出来上がった。フィルターを取り外し、少しマグカップを揺らしてから口に入れる。なかなかのコーヒーだった。(ここで、芳醇な香りが鼻腔一杯に広がり云々といった、コーヒーに関する描写を入れてもいいのだが、使い古された表現しか浮かばないし、使い古されるほど使用された表現は、とても味わい深いものであるが故に使い古されているわけであって…とにかくそのコーヒーは美味しかった。)

時間を掛けて、じっくりと味を吟味しながらコーヒーを飲んでいく。ゆったりとあらゆる物事が停滞しているかのように感じる。せわしない潮流から隔絶された、人目に付かない溜まりに入ったかのように。何者にも脅かされず、また損なわれることもない。聞いたことのない声の鳥が窓の外で啼いている。初めて聞く音色だ。いままでその鳥はどこに居たのだろうか。あるいは僕がその鳥が居るところへやって来たのだろうか。

マグカップを持って、ソファに移動する。あまり座り心地が良いとは言えなかったが、僕は

そのソファが気に入っていた。過度に反発することなく、座った人を総体として受け入れてくれる。大きさも部屋のサイズに適していた。そのソファに座ってコーヒーを飲んでいると、自然と感覚が研ぎ澄まされていった。ピントが適切な位置に調整され、余計なものが捨象されていく。そうすることでコーヒーはより味わい深いものになるし、流れる音楽はより感慨深いものになる。対象からより本来的な触発を受け取ることができる。あくまでそう感じるだけであって、客観的な証左はないけれど。

マグカップをソファの脇のテーブルに置き、座ったまま上体を伸ばしてみる。腕と背中を限界まで上に掲げる。背骨の一つ一つの間隔が広げられていく。普段押し付けてくる力へ反発を試みる。身体機能が怠りなく活動していることを確認する。

コーヒーの香りに浸っていると、昨日のことが頭によぎってくる。見知らぬ長身の男に連れられて入ったバー、そこで交わした会話、アルコールの心地良い酩酊感、そしてその後の長い夢、そこに出てきた美しい少女。彼女はあの場所を、夢と現実の狭間のような場所と推測していたが、ここでは便宜上夢と表現しておく。一連の出来事が昨日の晩のうち、あるいはさっき僕が目覚めるまでの短い間に起こった。にわかには受け入れがたい事実だ。そもそも事実かどうかすら確証はない。何を以てして事実とするのかは、厳密な定義づけを要するのかもしれないが、とにかく僕はそれらの出来事を、実際に僕の身に起こったこととして捉えてみようと思う。そうすることで何か不都合なことが持ち上がるわけでもないし、むしろ彼らとの会話、そこから得られた相互の疎通の感覚を、現実に基づかないものとして棄却することは惜しい気がした。お気に入りの服にハンバーガーの中身のトマトをこぼしたときのように。（まったく適切な例えとは言えないが、これは実際に僕がデート中に経験した感覚である。お気に入りの服にこぼしてしまったということと、ハンバーガーを損なってしまったという二つの事実。）とにかく昨日のことは、意識の上下ないしは内外を問わず、僕の身に起こったこととして受け入れてみようと思う。

ふとあることに気が付く。

会社はどうした？

その瞬間、全身に冷たい水をかけられた感覚に陥った。そしてすぐに身体中の汗腺が開き、冷や汗が滲み出てくるような気がした。とても嫌な汗だ。ゆっくりと下へ伝っていくのを感じる。今日は何曜日だった？少し非現実的な出来事が立て続けにあったことで忘れていたが、世の中は平常に運行している。僕の意志に関わらず、すべてのものを乗せて。昨日が水曜日なら、今日は木曜日だ。わりと結構な時間を要してそのことを思い出す。時計を仰ぎ見ると、普段家を出る時刻をとうに過ぎていた。慌てて立ち上がり、マグカップをソファ脇のテーブルに置きっぱなしにしたまま、クローゼットへ向かう。すっかり頭から抜け落ちていた。僕はあくまで日常に居るということを。というか僕が居るから日常と呼べる。それはちょっとしたことでは動じることなく、何食わぬ顔をして過ぎていく。そしてその日常はとても退屈だということを。まるで壊れたレコードプレーヤーが、同じ位置で針がずっと回っているように。何度も何度も同じ溝を通り過ぎる。昨日も今日も、おそらくは明日も。その溝からは歪な音が奏でられる。とてもじゃないが聞いていられない。救いを求めるある種の叫びのように聞こえる。その叫びは誰の耳にも届かない。虚空の中に消滅してしまう。誰か聞いてくれる人はいないのか？

目についたシャツを取り出し、そのまま頭からかぶる。もちろんアイロンなんて掛けられていない。だがこの程度ならなんとか許容されるだろう。丸めて置いてあったネクタイを手に取り、結わこうとしたそのとき、玄関のチャイムが鳴る。それは不自然なほど軽やかな響きを持っていた。

誰だこんなタイミングに。とてもじゃないけれど構っておられず、チャイムを無視して準備を遂行する。本格的に時間が迫って来ていた。まさに押し寄せて僕を飲み込もうとしている。しばらくしてもう一度鳴らされる。先程と同様の響きを持っていた。いまの僕の状況に似つかわしくないその音に、イラつきを覚える。

「おはようございます」

薄いドアの向こうから男の声が届く。その声は吹き抜ける風のような心地よさを帯びていた。ある種、浮世離れした感じもする。そして僕には聞き覚えがあった。

支度を一度中断し、玄関に向かう。ドアの覗き口から外を見ると、あの男が立っていた。昨日の男だ。僕はゆっくりとドアを開ける。この季節特有の匂いを含んだ風が、部屋に流れてきた。

「おはようございます」加瀬は僕に向かって、改めて言う。「起こしてしまいましたか？」

「何の用かな。いまはすぐにでも会社に行かなければならないから、また日を改めてくれなかな」自然と僕は早口になっていた。

加瀬は少し驚きの色を顔に浮かべる。「あれ、覚えていないんですか？」

「何を？」

「昨日、あなたが言っていたじゃないですか」

そう言われて、思い当たるものがないか探してみる。しかしそんなものは、どれほど時間をかけて入念に探してみても、見つかりそうもなかった。奥深くに秘匿され、その存在すら忘れているようだった。おそらくアルコールのせいだろう。

「悪いんだけど、昨日は飲み過ぎて記憶が曖昧なんだ。とにかく今度にしてくれないか」

「うーん、そう言われても…何も覚えていないんですね」

僕は目線で首肯する。そして今すぐにでも家を出なければいけないこと訴える。

「ここで立ち話を続けるのは何ですから、中に入ってもいいですか？」話をするつもりなどないのに、僕の無言の訴えを無視して、加瀬は言った。そして僕の返事を待たず、超自然的とも思えるある種の力で、家の中に入って来た。昨日のことを仄かに思い出す。この男のこうした力に、僕はついていったのだと。一見すると不条理に思える事でも、有無を言わず人を信じさせる力。この男に従うべきだと思わせる力。これは方向、あるいは意図を誤れば、とても危険なものになり得るのかもしれない。柔らかな雰囲気を纏っているこの男の、どこからそのような力が発せられているのだろうか。

加瀬は僕の家のリビングの中へ進み、真ん中に立つ。家の中で見ると、改めて背が高く感じる。一九〇センチ近いその体軀に、天井が迫って見える。

「男の一人暮らしにしては整然としていますね」部屋の中を見回して言う。

この男を帰していますすぐに会社に行くべきと唱える自分と、この男の言動にしばらく付き合ってみるべきだと唱える自分が、拮抗している。当然のこと、ここでの当然とは、社会通念的なものを意図するが、社会通念に従うなら会社に行くことを選択する。しかしそうした社会通念に従い続けた結果がいまの僕、というのも紛れもない事実だ。進むべき道というものが提示され、その道から逸れないよう生きてきた。一見するとその道は安泰なもののように思える。道を最後まで何事もなく進むことが幸せだと。誰が言い始めたのかわからないが、そうした認識が巨大なマスの中で共通の認識とされている。

その認識の甘美な幻想を醒ますのが、この男なのかもしれない。

「そんなところに突っ立ってないで、まあ座ってください」

自分の家なのに、という思いが浮かびかけるが、そんな思いは些末なものとしてすぐに消えていく。やはり加瀬にはどこか、人を盲目的にさせる要素が含まれている。

僕はソファに腰かける。ソファはいつものように、僕を総体として受け入れてくれた。そしてそれと共に、時間に追われているという感覚も、半ば諦めのヴェールに包まれて、薄らいでいった。そこはかとなない背徳感で織られたヴェールに。

加瀬は僕の様子を確認してから、ダイニングチェアに掛ける。テーブルとチェア一式は友人が引っ越しをする際に不要になったものを譲ってもらったのだが、自分で選んだわけでもないのに僕の感性を無性に揺さぶった。一言で言えば僕のセンスとマッチしていた。無駄な装飾を一切省いたデザインで、機能性も申し分ない。そのテーブルの向こうに座った加瀬は言った。

「いい匂いがしますね。コーヒーを飲んでいたんですか？」

僕は頷く。なかなか本題、僕の家を平日の朝に訪ねてきた理由を話さないことに、腹立たし

さのようなものを覚えるが、加瀬はそれも見抜いた上で、枝葉のような会話をしているような気もした。この会話も、ある時点で必要となるものなのかもしれない。

「もしよろしければ、一杯もらえますか？」

僕は座ったばかりのソファから立ち上がり、キッチンへ向かう。おそらく加瀬は拒否されることを微塵も考慮していなかっただろう。口ぶりからそう伺えた。だが特に不快な気はしなかった。そんなことを思いながらポットに火をつける。

先程と同様の手順でコーヒーを一杯入れる。フィルターからマグカップにコーヒーが滴り、やがてマグカップを満たす。芳醇な香りが部屋を塗り替える。天井の隅に至るまで。僕がコーヒーを淹れる一連の動作を、加瀬はそれとなく見ていた。ダイニングチェアに腰掛けたまま。人に見られているという意識は、どこことなく僕を落ち着かなくさせたが、身に染みついたコーヒーを淹れる動作は乱されることはなかった。いつもの手順に完璧に則ってコーヒーは淹れられた。

マグカップを加瀬の前に差し出す。彼はそれをしばらくの間じっと見つめていた。そこに何か興味深いものが持ち上がるのを待っているかのように。もちろんそんなものは、発生するわけがないのだが、彼は毎度確認する癖があるようだ。発生しないことを確認した上で初めて口にする。ウイスキーもそのように飲んでいたので、僕はふと思い出した。一口だけ口に含んで、じっくりと口の中で味わい、長い時間を掛けて喉の奥へ通していった。何段階もの厳格な手続きを踏んで飲み込まれていった。そして満足したように、マグカップをテーブルに戻した。

「とても美味しいコーヒーです」

「それはよかった」

「あなたは飲まないんですか？」

「僕はさっき飲んだばかりだから、いらない」

加瀬は無言の相槌を打ち、カップを手に取り傾ける。

「それよりも、一体何の用だろう。平日の朝から」彼が長い時間を掛けてコーヒーを飲み込むのを待ってから、僕は尋ねる。

「すみません。でもなるべく早いほうがいいかと思って」

「何が？」

「昨日、あなたがおっしゃったことを実行するのが」

「申し訳ないんだけど、さっきも言った通り、昨日のことをほとんど覚えていないんだ」

加瀬が微かに純粋な笑みを浮かべる。そこに揶揄や嘲虐は含まれていなかった。少なくとも僕はそう受け取った。「昨日はずいぶん飲みましたものね」

「あれほど飲んだのは、久しぶりだ。でも不思議なことに、まったく尾を引いていない」

「記憶と引き換えに？」

「そう、記憶と共にアルコールもどこかへ消えてしまった」

「でも大丈夫です。記憶なら僕も関与していましたから。そして僕は細部に至るまで記憶しています」どこか誇らしげに彼が言う。笑みを添えて。

「それで昨日、僕は何を言ったんだろう」

「簡潔にまとめると、昨日あなたは助けてくれと、おっしゃいました」

「助けてくれ？」

「ええ、そうです。直接的な言葉をおっしゃったわけではありませんが、要旨をまとめるとそういう意図の言葉をおっしゃいました」

僕はそれについて思案する。助けてくれ。その言葉にあまり現実性を感じられない。言葉の意味は理解できるが、そこに実体というか、重みが伴っていない。吹けばどこかへ飛んで行ってしまうような、埃のような軽さしか認められない。あくまで僕が発したという事実を加味した上での場合に。

「本当に僕がそう言った？」

「にわかには信じられませんか？ボイスレコーダーがあれば、客観的な証拠をお示しできますが、そんな野暮ったいものは持ち合わせていませんので」

「…僕がそういうことを口にするとは、あまり思えない」

「ですが、一つの事実として、確かにあなたは救いを求めています」

「……」

真っ向から加瀬の言葉を否定できない。明瞭な意識の下で、そうした言葉を口にしたことはないが、果てしなく広がる意識の裏側で、救いを求める感情が醸成されていった。そう考える事はできる。むしろそうした方が、物事の適切な解釈を行えるかもしれない。昨日加瀬と出逢う前、駅のホームに突っ立って、そこから線路をじっと眺めていた、という事実の解釈。あのとき、平時ではとても浮かんでこない、何か毒々しくもあるが、別の角度から見ると澄み切ったような感情が、僕の中で渦を巻いているのを確かに感じていた。それはやがて僕の体内を突き抜けて、僕自身を乗っ取ってしまいそうな勢いがあった。通常の思考回路をすべて塞ぎ、窒息させられてしまう。

「そう仮定したとして、つまり僕が実際に救いを求めているとして、どうして君に求めたいしたのだろう。君と僕は昨日出逢ったばかりじゃないか」

「うーん、それについては何とも言い難いですね。あなたにしかわかり得ないことです。あなたでもわからないとなると、他者である僕には手の尽くしようがありません」

「それはそうだ。ただどうしても納得がいかないんだ。自分の行動について」

「自身の行動に対して、十全なる理解を得られることは少ない、と言ってしまうまでもありますが、そんな突き放した言い方をするのは楽しくないので、このように考えてはいかがでしょう。誰でもいいから助けを求めているが、そんなところに話しやすそうな男が現れたと」

「それは、あまりにも荒唐無稽だ」

「別にいいじゃありませんか。それで何か不都合が生じるわけでもありません。強いて言うならあなたは記憶を一部失っていますが」そう言って加瀬はマグカップを手に取り、コーヒーを飲む。その一連の仕草は、どこか通常の時間軸とは異なるものを感じられた。そしてそれによって、ある種の優美さが生み出されていた。

「柔軟にいきましょう。型に嵌った考えをしていますが、その型通りの人形が出来上がるだけです。とても扱いやすい従順な人形が。だけれどもその人形は重大な欠陥を抱えています。これ以上は話の本筋から逸れるのでまた今度にしましょう。いまはあなたの話です」加瀬は指を僕

に向けて指す。「あなたは救いを求めていました。型にぎちぎちに固められて、身動きを取ることができず、そこから抜け出すことを求めていました。おそらくご自身の力だけでは能いません。それほど複雑かつ巧妙に仕掛けられているものです。多くの人はそのことにすら気が付きません。あるいは破綻して初めて気が付くことができます。あなたは幸運にもこうして気が付くことができました。ただ自分ではそこからどうすることもできない。そこでちょうどいい具合に、僕が現れました。あなたの前に。僕はあなたにほんのちょっと手を貸します。抜け出すことができるように、その手法を」

「それで君は見返りに何を求めるんだい？」

「見返りですか？そんなものはいりません」

「何というか、そんな話をすぐに受け入れられるほど、僕は純粹じゃない。というか僕に限らずともそう言うだろう」

「そうなんですよ。どれだけ凝り固まっているのだから。ここで口座番号とか尋ねたほうが、高度資本主義社会では適切ですよ。」加瀬はその単語をやけに強調して言った。高度資本主義社会。「何とも面白味のない制度ですが、あいにく僕達が生きている社会がその制度を採用してしまっているので、仕方ありません。完全に解放されるには、社会そのものの根幹を変える、あるいは跡形もなく粉碎する必要がありますが、それには相応の力が必要になってきます。一見魅力的ですが、他者すら巻き込む、というか僕たち遍く構成員を巻き込むことになり、強権的とも取れます。マッチョイズムですね」ここまで述べると、またカップを手に取り、時間を掛けてコーヒーを飲み込む。そしてカップをテーブルに戻す。静かにカップがテーブルに触れる音が響く。その音は波紋となり、部屋のなかの空気を震わせる。

「それでは楽しくありません。そこで僕たちは、現実には片足を突っ込みつつ、もう片方の足で自由に飛び回ることを目指すことにしました。表向きは普通の社会生活を営んでいますが、裏では銃をぶっ放します。もちろんその銃は人を傷つけることはありません。ただ打ちたいがために打たれる銃です。銃でなくても構いません。マスタングでぶっ飛ばしたければ、そうします。一切のしがらみから解放されて、眠っていた双翼を自由に伸ばします。心が望むままに動

きます。すべての物事が僕たちの中を、円滑に流れていきます。遮るものは何一つありません。

そうして、何食わぬ顔で生活を送ります。どうですか？魅力的に聞こえませんか？」

「…あまり現実的とは思えないな。実際にそれが適えば、確かに魅力的だが、あまりに現実と乖離している」

「何をおっしゃるんですか。現実と乖離することこそ、僕たちが目指していると言ったではありませんか。あんな陳腐でつまらないものにしがみついているのは、枯れてしまいます。もちろん完全に乖離することはできません。それはある種の狂乱を意味しますから。そうではなく、ある面では従順なフリをしておきながら、またある面では狂騒曲を奏でるんです。全身を身内から強烈に、それでも心地よく揺さぶる曲を。誰にでも響くものではありません。暗鬱な現実にとっぷり浸かってしまっている人には響きません。ごく少数の共振してくれる方を見つけて、取り込んでいきます。僕たちはそうして拡大しようとしています。お金が絡んだ瞬間に、切ってもらって構いません。そんなものには一抹の興味もありません。あ、嘘です。言い過ぎました。僕たちが暮らしていけるだけのお金しか興味ありません。これが適切でした。とにかく、お金なんかよりも本質的なものを沢山知っているので、必要最低限しかいりません。どうです？あなたもこちら側に来ませんか？」

そう言った加瀬の目は、妖しく輝いていた。彼の目の内に存在するプリズムは、彼自身の生命エネルギー、あるいはバイオリズムとでも言うべきものを摂り入れ、体外に放出していた。その溢れ出てきた粒子は、じっと見つめた人を陶醉されるものを含んでいた。とても凡俗な言葉では表象しがたいものが、その中から覗いていた。それは、獲物を見つけた肉食獣の目のように、燦々と煌めき、照準をしっかりと僕に見据えていた。

その光が一瞬隠れ、コーヒーに目を落としてこう言った。

「少し熱くなってしまいました。その一方であなたが淹れてくれたコーヒーは、残念なことに冷え始めています。それなりの時間が経過してしまいましたね。

強要するつもりは全くありません。来たい人だけ来ればいいのです。来たくない人は、そちらの現実で生き続けてもらうしかありません。どうぞ自由に。

こちらへ来たい人は誰でも拒まないと言いたいところですが、一つだけ要件があります。他者に危害を加えないことです。ミルの原則を流用させていただきました。危害を加えることさえなければ、心の赴くままに、楽しい方向へ流れていきましょう。

どうしますか？選択はあなたに委ねられています」

二種類の菓が提示されていた。もちろん現実にはそんなことないのだけれど、映画のワンシーンを僕に想起させる状況だった。実際の人生において、こんなことが起きるとは。

この人生から抜け出して、どこか別の人生、あるいはまったく異なる条件で生きてみたい、と茫漠と考えたことはある。ある種、いま僕が生きているこの人生を諦めた部分もあった。だってこんなに面白くないんだもの。つまらない仕事をするために、会社へ行き、つまらない人たちと話して、家に帰って寝る、これをただひたすらと繰り返す日々。永遠を思わせるほどの時の流れ。いつになったら解放されるのだろうか。当然のことだけど、いま面白くない原因を探れば、その大半は僕にあることは承知しているが、それでもこれはないだろ。

果たしてどうなる？この男の言うことに従ったら。もしかすると、この現状を打開してくれる、言うならば解脱へ導いてくれるのかもしれない。それはすごく耳ざわりが良く聞こえる。だがその代償は？当然何らかの方法で、然るべき対価を払う必要が生じるのだろう。何もこちらから提供せず、それにもかかわらず恩恵を享受できるというのは、詐欺にも聞こえる。この社会ではそんなことは許されていない。何かしら、それもおそらく大いなる対価を払わなければならないだろう。この男は、そういった説明はしていない。だとすると、やはり関わるべきではないのだろうか。

「詳細を説明したいのはやまやまですが、時間があまりありません」僕が思考の渦に入ったのを読み取ったように、加瀬は言った。そして腕を上げて腕時計を確認する。そこには時刻が示されていた。「微かにでも魅力を感じたのでしたら、いえ、心が揺れ動いているのでしたら、取り敢えずついてきてください」そう言って立ち上がる。

選択はあなたに委ねられています。

少女と同じことを、加瀬は言った。そのことにいま、ようやく気が付く。おそらく少女と再会するための具体的な方法、あるいはそれに類するものが、いま僕に提示されているのだろう。僕は座っていたソファから立ち上がる。何か大きな力が僕を後押しした。それを確かに感じた。「いいですね。じゃあ行きましょうか」

家の外に出ると、雲の染み一つない青空が、頭上に広がっていた。どこまでも広がっているようにも見えるその空を、二羽の鳥がたわむれるように飛んでいく。とても高い位置を飛んでいるため、細かい色や形はわからないけれど、彼らは地上の僕たちを気にも留めずに、ただ自由に空を駆けていく。

柔らかい顔が僕の頬を撫でる。どこか自然の匂いを含んだ風だ。この近くに、自然といえるほどのものがあるとは思えないが、僕の知らないところには存在しているのかもしれない。そこから匂いを乗せて、人々に届けて回っているのだろうか。目に見えない暗渠がすぐ近くに存在していても、なんら不思議ではない。(そもそも暗渠がどういう匂いを発するのか、よくわからないけれど)

家の前の通りに赤のボルボ240エステートが停まっている。20年以上前に生産中止した車だが、綺麗な状態を保っているように見える。窓ガラスはくすんでいないし、ヘッドライトも黄ばんでいない。見たところ車体に傷一つついておらず、定期的に磨かれていることがうかがえる。加瀬がその車に近づいて、ポケットから鍵を取り出して、ドアに差し込む。

「乗ってください」

「これは君の車？」

「ええ、そうです。僕の相棒です」

直線のみで描かれたボディの240に加瀬が乗り込む。その鋭利な角を持ったボディは、見事に空間を分断していた。彼の体重を受けて、サスペンションが揺れる。僕も助手席のドアを開けて、乗り込む。ドアを閉めるときカシャンと、いまの車には失われてしまった音が響いた。

車内も時の経過を思わせないほど、美しさをそのままに維持している。どこか時間軸の狭間のような場所で、大切に保管されていたのだろうか。もちろんギラギラした液晶メーターや巨大なディスプレイなどは備えていないが、走るための機能は十分に持っていた。

加瀬がキーを差し込んで、イグニッションを回すと、車体がぶるっと揺れ、それと同時にアナログの針が何本か一斉に動く。エンジンも粒度の高い音を車内に響かせている。隅々まで手入れが行き届いているようだった。ギアを入れ、サイドブレーキを解除して、とても穏やかに車が動き出す。それはあまりにも丁寧な動き出しだった。

加瀬の運転はとても丁寧だった。まず第一に車体が停止したことを感じさせないほど、慎重にブレーキが踏まれ、動き出すときもほとんどと言っていいほど揺れない。なにか特殊な訓練、たとえばショーファーカーの運転手としての訓練を受けていたのだろうか。もちろんそんな車に乗車したことはないから、ショーファーカーの運転手がどのような運転をするのか完全に僕の推測に過ぎないが、おそらくこういった運転をするのだろう。幾重もの膜に車が包まれていて、その中で車が動いているようだ。

オーディオ装置からはナイル・ロジャーのグッドタイムが流れている。彼の曲を詳しく知っているわけではないが、この曲のフレーズはなんとなく覚えがある。

車は僕の家近くの狭い道々を抜け、やがて多くの車が行き交う通りへ出た。

「どこに向かっているんだろう」僕は加瀬に訊ねる。

「空港です」

「空港？」

「ええ、そうです」

「何のために？」

「それはもちろん、飛行機に乗るためです」

「飛行機？」

「ええ、あなたが昨日そうおっしゃったので」

「僕が？」腑に落ちない部分はいくつかあったが、ここまでくるとすべてを受け入れるしかな

いような気もした。このあとどんなことが起こったとしても、それは昨日の僕が言ったことだ。当然今日の僕はそれを処理しなければならないはずだ。そしてもちろん何を言ったのかはよく覚えていない。

「なんだか夢に騙されているみたいだ。いまここに起きていることが、すぐには受け入れられない」

「飲み過ぎには注意しないといけませんね」加瀬がにこやかに言う。僕はそれに曖昧に返す。

彼も僕と同じペースで飲んでいたはずだが、見たところ記憶の乱れが起きているわけではなさそうだ。僕の発言をしっかりと覚えていると、加瀬は言う。アルコールを受け入れる体質なのだろうか。あるいは加瀬も記憶が曖昧で、そんな男たちがいま二人で旧式のボルボに乗ってドライブをしている、なんてことも考えられないだろうか。何のために？

「あ、そうそう。航空券を手配したついで、というわけではないですが、しばらく会社を休むとの連絡もされていましたよ」

「は？」

「携帯を見てみてください」

そう言われ、僕はズボンのポケットからスマホを取り出す。もう随分と長いこと使っているものだ。機能は最新のものと比べると、だいぶ陳腐化しているのかもしれないが、別にそんなものは構わない。いくら写真が綺麗に撮れようと、僕には何の恩恵もない。

メールアプリを開くと、確かに昨日の真夜中過ぎ、つまり今日の未明に一通のメールを会社宛てに送った履歴があった。

「しばらく休みます」

こんなメールが社会通念上、許されるのかは甚だ疑問に思う。件名も差出人の名前も、それどころかおそらく必要とされる詳細な理由説明の諸々が、一切省略されている。と言うか会社を休むときは、どんな方法でどんな内容のものを伝えるのが適切なんだ？思えば多少の体調不

良であれば、無理して出社していたし、そもそも有給以外で休んだことがなかった。

「まあ、あれだけ酔っていれば仕方なかったんじゃないですか？」加瀬がフロントガラスを見つめたまま言う。おそらく僕はメールを送信する際、文面を加瀬に見せたのだろう。もう少しましなメールが送れたんじゃないか、とは思うが、後の祭りだ。

「いずれにせよ…つまり方法はどんなものであったとしても、あなたはしばらく会社に行く必要はありません」

「それを僕はどう受け取ればいいんだろう」

「さあ、正直なところわかりません。あなた次第です。でも一つだけ言っておくと、そのメールを送ったときのあなたの表情はとてもよかったです」

「なんだか複雑な心境だ」

「その気持ちはわかります。下手すれば解雇になるかもしれませんもんね。ただあなたには会社に行くよりも、何かもっと大事なことがあると僕は思いました」

僕は加瀬の顔を見る。その横顔もやはり均整が保たれていた。おそらく最適な高さの鼻梁を持っている。

「それは一体どんなことだろう」

「あなた自身がそれは一番よくわかっているんじゃないんですか？そのための航空券でもあります」

「つまり僕は旅行のようなものを求めていたと」

「ええ、あなた自身が求めておられました」

旅行。最後に旅行、あるいはそれと呼ぶにふさわしいものに、行ったのはいつだったろうか。僕の中の時間軸を遡って探してみる。学生時代はよく思いつきで出掛けてりしたが、最近はめっきりだ。いずれお金が糸目をつける必要がないほど稼いだら、自由に出掛けようと思っていたが、お金を稼ぐようになった代わりに、何かもっと根源的なものが失われてしまった。僕を根底において支えていた何か。

「もしこのまま、その航空券を使って、旅行のようなものに行ったとして、そこに何があるん

だろうか」

加瀬はしばらく思案する。だがすぐに彼は考えを表現するに、適切な言葉を見つけたのだろう。少し薄い唇が開かれる。「もしかすると、あなたは既に予感を感じているのではないですか？何かしらの変化をもたらしてくれるものが、存在していると。その変化はすぐに顕現するものではないかもしれませんが。ただ徐々に侵食して行って、いずれは大いなる影響をもたらす。

だからこうして、いま僕と空港に向かっている。本気で仕事にしがみつきたいと思うなら、僕の誘いを断って会社に行っていたでしょう。違いますか？」

「どうだろう。確かに何かしら、心を高ぶらせてくれるものを感じている。上手く表現できないけれど」

「それでいいと思います。導いてくれるがままに向かうほうが」

「なんだか君に言われると、本当にそのような気がしてくる」

加瀬が横目で僕のほうを見る。その目は悪戯好きな子供のような煌めきを宿していた。

車は空港に繋がる高速道路へ入った。最新の車と比べると、いささか無骨な感じがするが、それでもスムーズに速度を上げ、車列の中に合流していった。加瀬の運転はやはり、どこまでも丁寧なものだった。平日の朝のため、乗用車はあまり見かけないが、多くのトラックがやや緩慢な速度で流れていた。前後の間隔を絶え間なく変化させつづけ、全体として長大な川の流れを成していた。その隙間を時折、バイクが縫うように駆けて行く。まるで波に乗る俊敏な小型船のように。

これほど多くのトラックは、どこを目指しているのだろうか。その荷台に充溢した荷物は誰の元へ届けられるのだろうか。それはある種の哲学的な問いのようにも思えてくる。本当に僕たちはこれだけの物を必要としているのか、といった。あるいはそういう皮を被った、もっと実際的な問題、たとえば経済学的な問題なのかもしれない。コールドチェーンの過剰なほどの拡大や、ドライバーの長時間拘束ないしは報酬の相対的な低さ、といった。こうした実際的な問題は往々にして、複数の面の問題が複雑に絡み合って構成されている。何か一つのパースペクティブを以って挑んだとしても、その複雑な絡まりがほどけることはない。むしろ余計に入

り組んだものになってしまう可能性も含んでいる。ましていま僕がぼんやりと思案したところで、何か打開的なアイデアが持ち上がるわけではない。それはあくまで事件に群がる野次馬のようなものに過ぎないのかもしれない。まあ、何も考えないよりかはいいか。

トンネルが連続する区間に入り、その都度加瀬は前照灯をつけ、抜けると消した。前後のトラックもそれに合わせるかのように、ヘッドランプを灯す。トンネルに入ると、ディーゼルの凄まじい音に囲まれ、鼓膜を絶え間なく震わせた。おそらく僕の耳だけでなく、トンネル全体でこだましているのだろう。どこか地底から吹き上げる風のような。あまり心地良いものとは思えない。

一定の間隔で灯されたライトが、現れたかと思うと背後へ抜けていく。ごく僅かな間だけ、僕たちの視界を訪れ、またすぐに去っていく。何の挨拶もなしに。そしてすぐに次の訪れる。その繰り返しが続く。残像だけが僕の脳裏に置いていかれる。

僕は視界が明るくなるとは暗くなる、その隠微な起伏に包まれるなかで、不思議な思いに駆られる。もしかするとこのトンネルは永遠に尽きることがないのではないだろうか。幾台かのトラックとボルボを含んだその時空だけすっぽりと切り抜かれ、ある種の平行時限のようなところへ配置され、ある一定地点に到達すると、また始めに戻される。レコードの針を戻すかのよう。その作業は僕たちに気付かれることなく、密やかに行われる。何者かの手によって。僕たちは到底その手を認識することはできない。感性の形式の範疇の外側に置かれたものだから。だけど、ふとした瞬間、たとえばコーヒーを飲みながらレアチーズケーキを食べた瞬間なんかには、手が存在していることを再認させられる。

最後に長いトンネルを抜け、その区間が終わると、太陽が目を通した。その光は、明暗を繰り返した直後の目には刺激が強すぎた。僕は思わず目を細める。

もうすぐ空港の一角に入る。

「君の年代にしては、ずいぶん車に乗っているね」僕は思っていたことをようやく口にした。もっと早く、加瀬がキーを差し込んだとき、なんかに聞けばよかったのかもしれないが、彼の

動作には隙がなかった。ごく当たり前のように車に乗り込んだし、ボルボも摂理に適ったかのようにそこに存在していた。だから尋ねる余地がなかった。

「…よく言われます。最近の車にはまったく興味が持てなくて」正面を真っすぐに見つめたまま言う。

「僕もだ。どんどんおかしな方向に向かって行ってしまうている」

「ですよね。ライトの主張が激し過ぎてて。あんなに威嚇する必要があるんですかね」

「不思議なことにああいう意匠が、いまの時代には受けているんだろ」

「もうひとつ理解できないです」加瀬は物憂げに首を横に振る。

ボルボは右側の車線を一定の速度で走行する。クルーズコントロールを使用しているのかと錯覚するほど、正確に速度は維持され、ぶれることがない。次から次へと左側をトラックが抜かれていく。周りの車と比べると、随分な速度を出しているはずだが、メーターは助手席からはよく見えないし、ある種の保証のようなものがあつた。加瀬がいくら速度を出して運転したところで、身の危険を感じるようなことはないし、まして速度違反で覆面パトカーに捕まることはない。それほどごく自然にスピードを出していた。無茶な走りは決してしない、あくまで紳士的な速度超過。そしてボルボもそれに応えていた。

また一台のトラックを悠然と追い抜かす。一切の残滓、あるいは躊躇いを思わせることなくトラックは後方へ速やかに下がる。加瀬はエンジンを改めて吹かすこともせず、ただひたすらに一定の深さに踏み込んだまま走る。道路が若干の傾斜を持っていれば、それに合わせて適切に踏み込む位置を変える。視覚的にその動作を確認することはできないが、エンジンの変調で感じることはできる。その度に心地良い吹きあがりを感じる。

道路は時折のカーブを除き、基本的には街の外れを真っすぐに貫いている。河川や線路などの障害物に合わせ、トンネルに入ったり架橋をくぐったりする。様々な線が入り乱れているその様は、精緻な織物を思わせる。ある線が近づいてきて、しばらく並走したかと思うと、また離れていく。そして新たな線がどこからかやってきて交わる。それが繰り返されることで街の一つの模様が形成される。そしてその一つ一つの線の中を、僕たちという要素が複雑に行き交

う。それらは線と同じく、時に混じり合い、あるいは反発したりしながら、その相互の交流の中において、摩擦によって熱が生じるように、一種のエネルギーが発生する。もちろんこのエネルギーのようなものは、一つの言葉で形容できるものではなく、様々な種類が存在している。善悪といった二元論的思考を持ち込むことはあまり好きではないが、そうした分類も可能である一方、実際はありとあらゆる次元の断層が存在し、それらが統合されることで、一つのエネルギーとなる。

僕はどこへ向かっているのだろう。形而上学的な問いとして捉えることもできるが、いまのところもう少し実地的な答えが欲しいところだ。何しろ空港に向かっているということしかわからないし、そこからどこへ向かうかが重要なはずなのに、そのような手掛かりは一切与えられていない。どこまでも宙づりの状態だ。

加瀬は左の車線に移動し、やがて出口へと分岐する方向へ進み、ボルボは広大な空港の領域に入る。先程まで僕たちの周囲を囲んでいたトラックは消失し、代わりに乗用車や大型のバスが増える。それらのバスは、街に点在する主要駅からやってきたり、あるいはターミナル間を移動するために、空港内を循環していた。平日の朝の時間帯にもかかわらず多くの人が乗っていた。空港内の事情にはあまり詳しくないからはっきりとはわからないけれど、もしかすると平日の朝だからこそ利用する人もいるのかもしれない。例えば休日や連休しか利用しない気の抜けた連中を避けるために。おそらく気の抜けた連中は、平日の朝には空港ではない他の然るべきところへ行き、余暇として空港を訪れるのだろう。こういっているが、もちろん僕もそうした連中の一員だ。

立体駐車場に入り、加瀬はボルボを停車させる。思ったよりは車が停車していた。案外世の中は気の抜けた連中ばかりというわけではないのかもしれない。ないしはそれを上手く隠しているのかもしれない。

加瀬の後についていき、空港の建物の中に入る。あの空港特有の匂いが鼻腔を満たす。厳密に温度が調整された空気の中に、人々の非日常に対するある種の昂揚感のようなものが入り混

じった匂い。やがて奥に行くにつれてそこに免税店のパフュームも加わることになるのだろう。どことなく、よそよそしい感じ、あるいは人工的なものによるある種の不自然さと受け取ることも、もちろんできるが、それがかえってこの場所の特異性を成しているのかもしれない。ありきたりな言葉で表現すれば、日常から乖離する入り口ないしは出口。汚れ一つ落ちることは許されず、照明を正確に反射する床。高い天井から放たれるその光は、駅やデパートなんかで見られるものとは一味違った、鷹揚さを醸していた。人々が出入りするたびに開け放たれるドアから吹き抜ける外気。その人々が引っ張るスーツケースに沁み込んだ数多の匂い。多くの場所を巡るほど、そうした匂いは蓄積され、芳醇なハーモニーとなるのだろう。僕は加瀬についていきながら、それを味わう。

加瀬はカウンターで然るべき手続きを速やかに済ませ、吐き出された搭乗券を手にする。おそらく彼はそうした手続きを熟知していたのだろう。そこには無駄な手順や戸惑いはまったく見られなかった。

「この便に乗ってください」

彼が手渡した航空券には、僕たちがいる空港のコードと、国内と思しき空港のコードが記載されていた。それとそれぞれの発着時間。記載された空港コードについてしばらく思索し、一つの空港が僕の脳裏に浮かぶ。

「これは…××かな？」

「ええ、そうです。行ったことありますか？」

錆びた歯車が軋む音をたてて、ゆっくりと動き出した感じがした。それはずいぶんと長い間放置されていた歯車で、僕も存在を忘れていた。どこに置いていたのかも、どうやって動かすのかも。その歯車が××という場所の名前を聞いて、ぎいぎいと動いた。どうしてもかままったくわからないけれど。

「ずっと昔に一度だけ行ったことがある…」そのときのことを思い出そうとする。だがその記憶は深い霧の中に遠く佇んでいるだけで、僕はそれを表層に引っ張り出すことはできなかった。

「そうでしたか。あなたがそこを指定しましたから」

僕は加瀬を見る。正確には少し上を見上げた。そしてゆっくりと言葉を唇から紡いでいく。
一言ずつ丁寧に味わうように。「やはりそうか…でもわからない、どうしてここなのか」

記憶を失うほど酩酊した状態で、どこに行きたいと聞かれた場合にどう答えるべきなのか。
どのくらいの人が実際にそうした状況に遭遇し、そして翌日にはその場所への航空券を手に入れているのか、統計があるわけでもないから正確な数字はわからないけれど、大半の人はもっと納得できる場所を選ぶのではないだろうか。例えば南国のリゾート地だったり、有名な観光地だったり。誰かに経験談として語るときに、こうした場所の方が説得力というか現実性が増すだろう。あるいはとてもじゃないけれど行く気になれない、遠隔の地へ行くことで、立派な冒険譚を成り立たせることもできたはずだ。地中海に浮かぶ島々に点在する修道院を巡ったり、大陸をぼろぼろのレンタカーで縦断したりと。だが××はそうした部類のうちどれにも当てはまらない。その場所は南国ではないし、むしろ寒冷地に属し、飛行機のフライトも多大な時間を要するわけではない。旅行という概念の中で考えると、近場に入るのだろう。それでもそれ相応の準備は求められるはずだが。

僕はそのことに思い当たる。何も準備をしていない。持ち物すら碌なものがない。近所に散歩に行くような装いだし、もちろん着替えや泊まるに際して求められるもの的一切を持っていない。僕は普段からあまりものを持ち歩かないが、泊まる（そういえばそれすらも知らない。あるいは日帰りなのかもしれない）にあたっては、それなりのものが必要になる。まあ現地で調達できないこともないが、促されるままに家を出て、ボルボに乗り込み、そして空港にやってきた。行き先も知らずに。

そのことを加瀬に伝える。「それならご心配には及びません。現地で用意していますし、ホテルも手配してあります」

思った通りと言え、その通りだ。ここまで怠りなく僕を運んできたのだから。当然泊まる場所はすでに準備されているのだろう。それにこの男のことだから、昨日のバーのようにある種秘匿されたような場所を選んでいるのだろう。あくまで僕の主観的意見に過ぎず、そこに妥当性はないけれど。でもだからといって先程の疑問が揮発したわけではない。

どうして××なのだろうか？

ずっと昔に一度だけ行ったことがあるくらいで、何か特別な思い出があるわけではない。むしろ時間的経過による曖昧さの靄に隠されつつあった。現地でどんなところに行ったのかははっきりとは覚えていないし、どのような感想をその当時抱いていたのかすら覚えていない。そもそも、それなりの印象を僕に与えていたのだったら、一度だけではなくその後も何度か訪れていたはずだ。だがそれには能わなかった。強いて言うなら、悪くはなかったけれどもう一度行くとはなかなか思わなかった。××以外にもそのような場所はいくらか思い浮かぶけれど、いま僕が選んだのは××だった。そこに何か深刻な意味はあるのだろうか。それともただの僕の気まぐれだったのだろうか。

即座に解決できそうもない問いを奥に抱いたまま、航空券を受け取る。

「君は来ないのかな？」僕に一枚手渡されて、航空券はそれだけだった。

「ええ、僕はここまでです」加瀬はわりにはっきりと言った。そこに名残り惜しさのようなものはあまり含まれていなかった。

「…何というか。君は来るものだと思っていた」

「行きたいのはやまやまですが、のっぴきならない事情もあるので」

「のっぴきならない事情？」あまりその言葉に馴染みはなかった。

「ええ、ですからここを離れることは難しいのです」

「…そうか」

コンパスの針が俄かに乱れたような感じがした。加瀬の有無を言わせないある種の超越的な力で、ここまで導かれてきたのに、それが失われてしまった。いい年の男がこう言うのはなんだけれど、だだっ広い大地に一人で放り出されたようだ。一枚の航空券だけ渡されて。

「ご心配には及びません。あなたは一人ではありません。現地にガイドのような者がいますから」

「ガイドのような者？」

「ええ、厳密なガイドの定義には当てはまらないかもしれませんが、適切なガイドだと思います」

ますよ」

その加瀬の言葉をゆっくり咀嚼する。だがそこに含まれている深奥の意味はいまひとつ解読できなかった。加瀬は僕のそうした様子を的確に読み取ったようで、続ける。

「要するにあなた次第ということです。あちら側から主体的に導くということはありませんが、あなたの呼びかけ、つまり感受性を鋭くさせることによって、どのような途中経過を踏んでいくにせよ、結果として望むようなところへ行きつくということです」

「…うーん、いまひとつわからないな」

「あまり難しく考えないで下さい。ここまで僕についてきたように、心地よいと感じる方向、流れを感じる方向に、躊躇せずに向かってください。そうすれば少しずつかもしれませんが、ものごとは動き始めます。流れに逆らわないように。そしてお気づきかもしれませんが、いまも少しずつ動いています。それをさらに加速させるかどうか。」

「もしかすると、そのガイドのような者というのは、人間ではない？」

それを聞いて加瀬は笑う。とても自然に。「いえいえ、きちんと人間のかたちをしたものです。もちろん中身も」

「そうか、君のことだからなにか不思議なもの、上手く言い表せないものが来るのかと」

「ハハハ、流石に僕でも人間でないものを、ガイドとして手懐けることは難しいと思います。もっとも試したことがないからわからないですけど」

「それは安心したよ」

「ガイドというよりは付添人として考えたほうがいいのかもかもしれませんね」

その二つの言葉の定義の厳密な違いも、もうひとつ理解できなかったが、言わんとすることはわかった。

「あなたから何かしらの働きかけを行わない限り、動くことはないと思います。あるいは希望するところへは着かないかもしれない。でもあなたが進めば、それを適切に手助けしてくれるでしょう」

そこまで加瀬は言い切って、では行きましょうかと言って、チェックインカウンターのほう

へ向かう。僕はそれに続く。周囲にはチェックインに向かうなだらかな人の流れができていた。僕と加瀬は自然に加わる。複数の便が短い間隔で離陸するせいか、付近は混雑していた。平日の朝にも関わらず。そして平日の朝に見合う格好の人が多かった。大きなキャリーケースを携え、堅苦しいスーツで身を固め、足早に移動している。まるで何処かへ戦いに行くように。それも複数の側面において重大な意味をもつ戦いに。その中に荷物一つ持たない、丸腰のラフな格好の男が紛れ込む。別にそれで気後れするわけではないが、周りとは違う空気を纏っていることは、隠しようのない事実だった。

フライトを知らせる電光掲示板（正式な名称を僕はよく知らないが、おそらくあなたがいま想像しているものと相違ないはず）には、様々な都市名が書かれていた。訪れたことのある都市もあれば、行こうと想起したことすらない都市もあった。だがそんな都市でも航空便が存在しているということは、それなりに行く人の需要があるのだろう。誰も訪れる人がいない場所には、飛行機は行かないはずだ。資本主義の原則に従う限りは。あるいは飛行機が行かないから、人が行こうと思っても行けないのかもしれない。あまりにも周囲と隔絶されているために。それは果たしてどんな場所なのだろう。もしかすると猫が支配する街かもしれない。

入り口のガラスドアの向こうでは相変わらず、多くの車がせわしなく動いていた。停まって人と荷物を降ろして、挨拶もそこそこに慌ただしく去る車もあれば、誰かを待っているのかしばらく静止したままの車もあった。そうした車たちは一見無秩序に、個々が思うがままに走行しているようにも思えるが、暗黙裡に共通の原理に従って動いている。そうでもなければカオスが顔を覗かせることになるだろう。どのようにしてそうした原理が創造されたのか、そして遍く周知されるに至ったのか、そんなことは僕が知っているわけでもないけれど、別に知らなくてもいまのところ世界は回り続けている。実際に空港の前の道路では事故は起きていない。案外、知らなくても不都合が生じないことは多いのかもしれない。特定の誰かさえ知っておけばそれで十分で、その分僕たちはスペースを空けておくことができる。他にもっと重要なことを考えるためのスペースを。

電光掲示板に目を移すと、先ほどまで一番上にいた便が消えて、その下に控えていた便が一

番上にやってきていた。そしてもちろん一番下には新たな便が加わっている。この一連の作業は空港が活動を一時的に停止するまで、おそらくそれは深い時間帯になるのだろうが、続けられるはずだ。ほんの少しだけ休息をとって、日が昇ると、あるいは太陽でさえ地平に眠っている時刻から再び活動を開始する。一日だって怠ることなく。そんなことを考えているうちに、また一つ便が消えて新たな便が加わった。今度の都市も僕が行ったことのないところだ。

カウンターに到着し、そこに形成されていたそれなりの人の列に向かう。加わる前に加瀬は立ち止まり、滑らかに振り返り僕たちは向かい合う。

「最後にもう一度言っておきますが、あまり難しく考えないでください。ここまでやってきたように、流れを感じてそれに従ってください。もしかすると流れが隠されているように思えるかもしれませんが、絶対に失われることはありません。それは確信を持って言えます。ただ乏しくなってしまうだけです。それを丁寧に読み取る必要があります。そうした感受性のようなものを、あなたはまだ失ってはいません。ひとまずの第一歩はあなた自身を信じることです。そこから始めてください」

そこまで加瀬は一息で述べると、何か言い残したことはないか思案する素振りを見せた。どこまでも完璧な、いま僕は思案していますと、相手に伝える素振りだった。そして実際に僕に伝わっていた。しかし目当てのものは、現時点では見つからなかったようだ。もしかすると、原型ないしは予兆を感じ取ったが、それを言語化する手立てが見つからなかったのかもしれない。最低限、言葉にしてくれないと、意図を受け取ることはできない。言葉にしたって完全な手段ではない。

あるいはいずれかの時点で、加瀬は伝えるべき内容と、手段を見出すかもしれないが、そのときそれを伝える余地は残されているのだろうか。つまり、またどこかで僕たちが会ったとして、改めて当時の意図をやり取りすることは、(もちろんすべての物事に意味を求めるほど僕はつまらない人間ではないけれど) あまり意味があるとは思えない。あらゆるものは流動するし、そこには僕たちの考えも含まれている。朝出かけたときはビーフシチューを食べたいと思って、帰るころには無性にダンキンドーナツが食べたくなったりする。とにかく何が言いたいのか

という、過去の最適解はあくまで過去のものであって、必ずしも現在の最適解であるとは限らない。そしてその時々のお最適解を見つけれられるかどうか、それもまた僕の与り知らないことの一つだった。当時を振り返ることができる時点になって、初めて最適解か否か判明するものかもしれないし、その時点になったら当時のことなんて何とでも言える。少なくとも最適解だけを選び続ける人なんていないと思う。それこそ平行世界の全てを見ることができる者だけが成せる所業だ。

短く簡潔に挨拶を済ませ、僕は列の方に向かう。吐き出す人よりも流れ込む人の方が多くて、緩慢にしか進まない列に。少し素っ気ない挨拶だったかもしれないと思ったが、衆目の前で熱い抱擁を交わすこともできなかった。また彼と会うことはあるのだろうか。それについて加瀬は何も言わなかったが、というかそれ以外のことについてもあまり語られていないけれど、いくつかの側面においていささか重大なことに思えてならなかった。僕たちはまたどこかで顔を合わせるのかどうか。

その時、加瀬がアッと声を上げ、後ろに言葉を繋げる。

「くれぐれも彼女の瞳には気を付けてください」

それはどういう意味なんだろう、と聞こうとしたが、折り悪く団体が僕の後に加わったことと、列の流れが加速したことで聞くことができなかった。僕の疑問符は空中に取り残された。どこに行きつくこともなく。

飛行機のあまり心地いいとは言えない座席に、埋もれることもできず、ただ腰かけ、機体の揺れに合わせて身体がぎこちなく振動するのを感じながら、さきほどの加瀬の言葉を反芻する。

くれぐれも彼女の瞳には気を付けてください

それはどういう意味なんだろう。届く相手を見失った疑問は、宛先不明の手紙のように僕の元に帰ってきた。だが何かしらの手掛かりが付与されたわけではない。ただ放ったものがそのまま戻ってきただけだ。だからあくまでその言葉のうちに見出すしかない。手掛かりのようなものを。

彼女とはガイドのような者を指すのだろうか。文脈から判断すると、それが適切な推測だろう。だとするとガイドのような者は女性ということになる。そのあまりにも簡単な定式、彼女ということは女性という式から何か導かれるだろうか。ゆっくりと思考を回転させてみるが、その回転が適切な示唆を読み取る閾値まで達することはなく、思考もそれを感じ取りやがて回転を落としていった。強いて言えば僕にそのような知り合いの女性はいないということだ。

ならば次の部分はどうだろう。瞳には気を付けてください。多様な解釈ができそうだが、そもそも僕は瞳に対してどのような態度が気を付けていることになるのかわからなかった。見つめすぎると石に硬化するのか、あるいは何かしらにおける虜になってしまうのか。例えばだけれど、心臓に指鉄砲を撃ち込まれて。

もう少し手掛かりを与えておいて欲しかったと僕は思う。どこに辿り着くこともないトートロジーがただひたすらに頭の中で繰り返されていた。先ほど離陸した飛行機はぐんぐんと高度を上げ、地上の諸々から距離をとっていく。地上を蠢くものはみるみる矮小になっていく。空港近くに横たわる工業地帯の工場群も例に漏れることはない。くすんだ赤と白を纏い、所々に落ちることのないだろう茶色の錆びが走った煙突が何本か、飛行機に向かって手を伸ばしているが、それも虚しく飛行機はすり抜けていく。

高度を上げててもやはり雲はどこにもなかった。今日はその存在定義が丁重に包まれて、クローゼットの奥にしまわれたようだ。澄み渡る青が広がり、そこには海のように波の三角鋸もなく、鋭いけれどどこか慕情を抱かせる太陽の光を届けていた。おそらくだけれど風もあまり吹いていないのだろう。黎明期の陰部にも似た乱気流に飲み込まれたときのように、機体ががたがたと軋むこともない。ただ速やかに高度を上げ、地上からは確認できない微かな白い靄を切り裂いていく。

そのとき窓の外を一匹の黒い蝶が、あの蝶独特の動きをしながら、刹那的に横切ったような気がした。僕は生態学というものにはあまり明るくないから、蝶が実際にどの程度の高度まで生息可能なのかはまったくわからないけれど、上昇中の飛行機に匹敵する高度で、蝶がふらふらと舞うことはかなり難しいことなのではないかと思う。あの柔らかい羽にそれほどの飛行能

力があるとは考えにくいし、そもそも餌もなければ気温も低い上に、天敵の鳥しかいない上空を飛ぶ意図がわからない。けれども窓の外を横切った小さな黒い物体は、蝶だと僕の感性と知性は認識した。どうしてかはわからない。ただの黒いビニールの断片かもしれないし、そちらのほうがいささか現実的な考えだが、あれは蝶だった。

下を見ると、地上はもうすでに消え失せ、それに代わって淡い海が広がっていた。淡いと言っても何処か南国のそれのように目を見張るようなものではない。あくまで地上から眺めたときの鈍い重苦しい色よりかは、幾分淡く見えるというだけだ。まるで見られることを想定していなかったものを偶然目にしてしまったときのように、背徳感に包まれる。入念に秘匿されていたはずなのに、何かの手違いかあるいは何者かの故意によって露見してしまった。その相対的に淡い海の中を、小さな木片のような船が何艘も浮かんでいる。ただ通常の木片がせわしなく流れるのとは異なり、その木片たちはどこまでも緩慢にただ浮かんでいた。それだけを目的としているかのように。

機体の角度が通常に近づき、揺れがほとんど感じられなくなり、しばらくするとサインが消える。僕は窓の外を眺めるのをやめ、座席のリクライニングのレバーを捻る。座席は操作に寸分の狂いもなく倒れる。突然鋭い眠気が僕を襲った。便宜上、眠気という言葉を使ったが、それはどちらかというと意識の切断に近かった。プラグを突然抜き取ったみたいに。とても抗えそうもない類の眠気だった。どうして突然そのような現象が持ち上がったのかよくわからない。いままで特に眠気は感じていなかったが、サインが消えたことが契機になったのかもしれない。それにより緊張の糸がほぐれたのだろうか。瞳に帳が降りてきて僕は深い砂の中に沈んでいった。とても滑らかに、そして奥深くへと。

モダンで瀟洒な建物での一夜

僕たちは岬の駐車場（それは駐車場というよりかは荒地だった。時の流れから放置された荒地）から出て、来た方向とは反対のほうへ159を走らせる。太陽が既に全景を失い、その僅かな余韻だけが漂っているのを見て、随分と長い間岬で過ごしていたことを知る。だからと言って何か感慨深いものを感じるわけではないし、充実したときほど過ぎるのが早いなどと陳腐なことを言うつもりもない。充実というよりはむしろ、空疎な時間だったが、それはあくまで実務的なベクトルにおける話であって、本質的あるいは精神的内奥とでも言えるベクトルでは濃密な時間を過ごした。少しシンプルに置き換えると、はたから見るとただ海を見つめている二人だが、その中で非言語的なやりとりが交わされ、新たな回路が構築されていた。こうした親密な間柄において築かれる関係を、何か一言で言い表せる単語があればいいのになと思うのだが、少なくとも僕はそんな便利な語彙を知らない。あるいはジャングルの奥地でだけ語られる言語には、そうした語彙があるのかもしれないが、僕と彼女の間で築かれつつあった微妙な関係を表現するには、不十分な気がした。それに言葉で表現してしまうと、言葉以上の意味を表すことは難しく、言葉の枠にとらわれてしまって、柔軟性が損なわれてしまうのではないだろうか。内奥の部分を切り込むと、そこは内奥でなくなってしまうように、ある種の神秘性が喪われてしまう。僕はそうした神秘性を保ったまままでいたかった。柔らかなヴェールを丁寧に被せて、あらゆる世俗的なものから守っておきたかった。

ただひたすらに真っすぐの道を、速度を上げて走る。別に他の車や、ましてや警察なんていないだろうから、何らのしがらみに囚われることはない。もっとも車がそれに応える性能を持ち合わせていることが前提となる話だが、陳腐な国産車を運転しているわけではない。メーターは踏み込めばどこまでも伸びていきそうだ。

左側には太陽を飲み込んだ海が横たわり、右側には闇に飲み込まれつつある広大な平野が横たわる。どちらも先ほどまで瑞々しく放っていた色彩を失いつつあり、それに代わって豊かな夜の膜に覆われつつあった。その中をスモールを焚いたアルファロメオを走らせる。もしそこ

に他の人がいたならば、小さな四つの丸い灯りが、通り抜けるのを目撃したであろう。その灯りは鋭利な印象を与つつも、どこか温かくて柔らかいものを想像させた。

助手席に座る少女の瞳をそれとなく眺めてみる。確かに彼女は魅力的な瞳を持っていた。もちろんそれより美しい瞳の女性は沢山いるだろう。例えばかつてのナタリー・ポートマンのよう。だが彼女たちにそれぞれの美しさがあるように、いま僕の横に座っている少女にも特有の美しさがあった。それらを横一直線に並べて均質に比較することはとてもじゃないけれどできないし、何しろ意味をなさない。あるいはそうした比較を一種の効用として味わう連中もいるのかもしれないが、少なくとも僕は理解ができなかった。

少女の瞳は様々な要素が複雑に配合されていた。柔和な部分を備えながらも、どこか冷やかな印象を与える部分もあり、見た人を惹きこむかと思えば、無慈悲にも突き放すようなところもあった。一つの瞳、いや正確に言えば一對の瞳にどうしてこのような多義性が生まれるのか。瞳それ自体が持つ性質と、彼女がもたらす動きによって生み出されるのではないだろうか。僕は拙いながらもそう推測する。

しばらくの間少女の瞳を眺めていたため、危うくセンターラインを越えて対向車線にはみ出すところだった。それとなく眺めるつもりだったのに、ずいぶんの間見つめ、そして意識を奪われていたようだ。確かに気を付けるべきだと思ったが、加瀬が言ったのはもっと象徴的な部分ではないだろうか。

加瀬がどういう意図で気を付けろと言ったのかは未だによくわからないけれど、結論から述べると、空港で僕は少女と再会した。僕が深い眠りに陥っているとき、ガイドのような者というの少女なのではないかと、希望に近いものでもあったが、それよりももっと摂理的なものに思えた。例えば物体は重さを持つというようなまでに。僕は望んでいた。少女と再会することを。とても強く、それこそ熱望していたというわけではないけれど、僕たちは実際にあって然るべきだと考え、そうならない世界線は存在しないとまで。もしかすると僕の一方的な思いなのではないかと、ささやかな疑念が持ち上がる部分もあったが、それはどんなカップル、つまり愛し合っているはずの二人でも当はまることではないだろうか。もちろん僕たちはカップ

ルではないけれど。とにかく僕は少女に実際に会いたいと望んでいたし、そこに不純なものは混じっていなかった。僕のような歳にしては珍しく。

だから××の空港に着いて、目の前の道路に厳かに停まったアルファロメオ159の助手席に、少女が収まっているのを目にして、心臓が俄かに跳ね上がったが、それは驚きによるものではなかった。探していたレコードをたまたま入ったショップで見かけたときのように。そういうときは、ある種の必然によって導かれているものだ。そして導かれるように車に乗り込み、かつてとても懇意にしていた人と、長い時を経て再会したときのような会話を交わした。実際にはそこで初めてあったのだけれど。

少女は夢の中で会った少女のままであった。仕草から話口調までそのままであり、まさに夢の続きを引き継いだかのようなようだった。そのため何らの違和感もなく、僕たちは会話を続けた。どうしてそのようなこと、つまり実在する人物が、また別の実在する人物の夢の中に登場することができるのか、いまひとつ理解できないし、そもそもあれが夢だったのかすら定かではない。何か世間には知られていない秘匿された方法を使えば可能かもしれないが、そうしたオカルト的なことに詳しくないし、いまや方法など些末な問題だった。いかなる方法を使ったにせよ、いま現実には僕たちは顔を合わせている。このことが何よりも大きな意味を成した。

そして僕たちは走り出した。目的などは設定していない。そうしたものはあまりにも世俗的過ぎる。ただ自然と方角が定まっていく。次から次へと、砂時計に砂が堆積していくように。ただ砂時計とは異なり、逆流することがなければ、滞りなく流れきることもない。時として方角を見失うこともあるが、それはあくまで一時的なことに過ぎず、然るべき時間を置けばまた動き出す。あらかじめ、そうした留保の時間を置くことが求められていたのかもしれない。いずれにせよ、潤滑に物事が進行していくというわけではないけれど、少しずつそして確実に流れていった。僕たち二人を乗せて。

「もう日が暮れてしまった」辺りがすっかり闇に覆われたのを待って僕は言った。車内を仄かに照らすのは、メーターと操作ダイヤルの灯りだけだ。

「それは惜しんでいるの？」少女が尋ねる。

「どちらかと言うとね。僕にとって、夜はあまり楽しいものではないから」

「そう？わたしは割と好きだな。誰もが寝静まった後の、あの静謐な感じが」

「どことなく不安な気持ちになる」

「それはもちろん、わたしも感じるわ。でも感じると同時にそれを味わっている」

「…味わう？不安を？」

「ええ、ポップコーンを味わうようにね」

僕はそれについてしばらく考える。少女がポップコーンを食べる姿を。いまひとつ鮮明にはイメージが浮かばなかったが、自ら口に出すということは、ポップコーンが嫌いではないのだろう。続いて、不安を味わうという表現について思考する。

「あまり聞き馴染みのない表現だね」僕は尋ねる。

「どうかしら。わたし独自の表現だと思っても、案外どこかで使われていたりするわ」

「少なくとも僕は聞いたことのない表現だ」

そして、こんなことも考える。

「なんだか、どこかで同じような会話をしたような気がする」

「デジャヴというやつかしら？」

「…うん。そのときも僕はこうして車を運転していた」

「そのときわたしは隣にいた？」

「どうだろう。何とも言えないな。いたと言われれば、そんな気もするし、そうじゃないかもしれない」

「わたしの存在はそんな曖昧なものなの？」軽い悪戯心をもった笑みを少女が浮かべる。

「いや、そんなことはない。でもデジャヴとはその程度のものじゃないかな」

「それもそうね。都合のいい記憶の改竄」

「取るに足りない記憶の断片」

少女がちらとこちらを見る。瞳が艶やかな光を灯している。「それはあなた自身の表現？」

「僕はそう思っているけれど、君も言った通り、誰かのものを無意識のうちに拝借している可能性もある。でも少なくとも、この場において適切な表現の一つだと思っているよ」

少女は何も言わず前を向く。急速に興味を失ったかのように。でもそれで僕が傷つくということもない。もっと直接的で意図を持った傷を受けたことも、これまであったし、少女が興味を失ったのは会話であって、僕自身ではないという確信があった。どこから根拠を得ているのかはわからないけれど。

目の前には生々しい暗闇が広がっている。そこを黒いアルファロメオが切り裂いていく。とても滑らかに、熟練した医師がメスを用いたときのように、暗闇は切り開かれ、その内部を明らかにする。ただしそこに何かあるわけではない。より一層の闇が横たわっているだけだ。丸いハロゲンヘッドライトが照らすのは、あくまで表層の部分、運転が可能となる範囲に限定されており、すべての闇を払うことなどできない。そんなこと夢想するだけ無駄だ。僕たちは常に闇と共に生きている。一時的に勢力を弱めることはできても、コインの表と裏のように一体となっており、引き剥がすことはできない。もしそんなことをしてしまったらすべてが一瞬のうちに無に帰すことになるだろう。取り返しのつかないことになる。取り返すだけの価値があればの話だけれど。

等間隔に街灯が佇む。貧相で頼りない灯りが、僅かに車道を照らす。語弊がないように言っておくが、功利主義的な観点、つまり効用云々の観点からに限って、貧相なだけであって、別の観点からするとそれは情緒的な灯りとなるのだろう。何もすべては効用だけで成り立っているわけではない。微かな光は、周囲の闇によって逡巡されつつも、その温かい本質を真下の空間に伝えている。限られた空間だけを照らし、感性による認識の材料を僕たちに与えてくれる。そして大まかな道筋を表し、僕たちを導いてくれる。もっとも、いま走っているあまりにも直線的な道路には、カーブなんて当面見当たらないのだけれど、僅かに下っていき、やがてなだらかに登っていく様を示している。

「そろそろ着くと思う」少女はなんの予兆もなしにそう言った。

「どこへ？」

「まさかこのまま眠らずに走り続けるわけにはいかないでしょう」

僕はちらりと車内の時計に目をやる。確かにその通りだ。

「今夜、わたしたちが泊まる場所」

何と言ったらいいのだろうか。少女は確かに魅力的だが、それは性的な魅力というわけではない。そこにはあまりにも大きい年齢の差があった。あるいは年齢差を感じているのは僕だけかもしれないが、いずれにせよ不思議な気持ちの持ち上がりを感じた。

「何か変なことを考えている？」彼女は僕の内奥での逡巡を読み取ったかのように言う。

「いや、何というか…君のような女性と同じところに泊まるというのは…」

「別に何も起こったりしないわ。道徳的にも審美的にも問題はない」

その少し突き放すかのような言い方に、ある種の冷やかさを覚えた。そして同時に加瀬にも通ずるような超然とした趣も感じた。彼女が問題ないと言ったら、あらゆる物事が解決するかなのような。

「もう少し毅然としたらどう？」少女が窓の外の闇を見つめながら言う。闇の中に模様を探りながら。

「…まったくその通りだと思う」

「もしまた、互いのことをほとんど知らない女の子と、二人でドライブしているうちに、夜が更けたら？それもその女の子は、かなり歳が離れているように見える」

「そんなことはなかなか起こらないはず」

「でもいま、実際に起こっている。そして再度起こった時、またしても同じところに泊まると聞いただけでドギマギしちゃうわけ？」

「それはあまりにも君が魅力的だったから」歯が浮くような台詞で、少し反撃を試みる。だが彼女はそんなこと物ともせず、表情には寸分の変化も見られなかった。少なくとも僕にはそう見えた。もっとも、車内灯の仄かな光の下ではあったけれど。

「それは口説いているつもり？」

「もし君のような娘を口説くなら、どんな台詞が必要かな？」

少女はしばしの間に沈黙する。やがてその麗しい唇がおもむろに開かれる。

「陳腐な台詞はいらない。変に華燭が加えられた台詞も、むずがゆくなるだけ」

「ならばどうというのが好みなんだろう」

再度沈黙が訪れる。決して重苦しいものではない。あくまで思考の過程における、方向性の定まらなさを伝える沈黙だ。そして僕はそれを深く味わっていた。急かすつもりはない。

「よくわからないわ。結局のところ誰が言うかによるんじゃないかしら」

誰かにはどこまでが含まれているんだろう。少なくとも現時点での僕は含まれてはいないはずだ。あるいは今後の関係の進展にもよるのかもしれないが。

今後の関係の進展？

果たして僕はそれを求めているのだろうか。この美しい少女と深く、そして多義的に交わることを。そこには複数の類の問題が存在しているように思える。僕たちだけの力では解決することができない。解決の糸口を見つけようという気すら起きない程、複雑で大きな問題が横たわっている。

もし問題のいくつかが解決、少なくとも二人の間に支障をきたさない程度まで矮小化されたとして、そこから関係を進めたいと僕は思うのだろうか。相手の事情も大して考慮せず、闇雲に突き進むような年齢は、とうに過ぎた。若かりし頃のうだるような情熱。多かれ少なかれそうした経験を誰しもがしたことがあるだろうが、もちろん僕もその一人だ。そして結果、関係は見事に破綻した。

そうした情熱はもう持ち合わせていない。ある日突然消え失せたのか、あるいは徐々に収斂していったのか、どちらか定かではないが、いまはもう残滓しか見当たらない。その仄かな余熱をどこかに感じるだけだ。

「この状況に対して、未だに理解が十分及んでいない気がする」

少女は軽やかに笑って続ける。「まだそんなことを思い悩んでいるの？」

「きっとそういう性なんだろう。どこかに一つの完璧な答えを求めてしまう」

「念のため聞いておくけれど、そんなものは存在しないことはわかっているわよね」

僕は頷く。「完璧な女性など存在しないように」

「女性？」

「…何でもない。ただの気まぐれだ」

「あまり女に対してそういうことを言わないほうがいいんじゃないかしら。些末な一言で気を悪くする人もいるかもしれない」

「…ごめん。まったくその通りだ」

「軽々しく謝る必要はないわ」

「…いや、そういうつもりじゃないんだ。ただ、何というか、どういう言葉が適切で、どういった温度感で言うべきなのか、いまひとつ測りかねている」

「それはこれから測っていくものじゃない？夜はまだ長いのよ」

僕はそれに対して、無言で答える。どう答えるのかわからなかったというよりは、何も答えないことが最も適切だと思ったからだ。時計は、頂点までの距離を随分と余している。

鬱蒼と茂る木々の一群が、微かな街灯の灯りに照らされ、俄かに僕たちの視界に出現した。

「あそこよ」

少女は顎で指す。言われると、確かに木々の一群の中に建物らしきものが垣間見える。建物の全貌は木々に覆われて確認することはできないが、高さはあまりないけれどもなかなかの全幅がある建物だった。ただ一切の灯りが漏れ出ていない。道路に沿った街灯を除いて、敷地一体がほぼ完全なる宵闇に覆われていた。言われなければ、廃墟に見えなくもない。世俗的な循環から取り残された廃墟。そして言わずもがな、静寂の膜にも覆われていた。

僕は速度を緩め、木々の間に何ら主張もせずただ敷かれた道へ入る。あいにく僕は植物には詳しくないから、一目見て品種を言い当てることができないが、少なくとも僕があまり見たことのないもので統一されていた。幹は細くそして長く、葉は辺りを包まんばかりに茂っていた。おそらく日中には複雑な陰影を描いているのだろうが、いまの時刻にはわからない。ぼんやりとしたシルエットの群れが浮かんでいるだけだ。道に沿って等間隔で置かれた、地面に埋め込まれるタイプのライトを別にして、灯りが存在しないため、葉の色を見て取ることはできない。

でも想像に過ぎないけれど、あまり澁刺とした色とは思えず、どこか陰惨とした要素を部分的に含む木のような気がした。

木々の間を真っすぐに敷かれた道路は、車がすれ違うのにギリギリの幅を持って、訪問者を建物まで誘導していた。何か意図して雰囲気醸成しようとしたのか、あるいは偶然の産物なのか、外界と隔絶する手続きを踏むトンネルの様を呈していた。ここを通ることによって、身に纏った騒音と色彩をシャワーで流すかのように。僕はその道をゆっくりとアルファロメオを進める。

やがて建物がその一部を見せた。濃いグレーを基調とした四階建てのそれは、どこか無機質な雰囲気を周囲に放ちつつも、周囲の木々が緩和すること、すなわち有機的な雰囲気で包むことによって、二つの要素が上手い具合に調合され、総体としての調和を生み出していた。ほとんどの部分が直線で構成され、梁や壁面の装飾はない。所々切り取られたように窓が等間隔に点在している。ともすると単調な印象を与えかねないが、外観のほとんどの部分を木々で隠されて、垣間見ることしかできず、建物のみの印象を図ることはできない。玄関ポーチに掛けられた二つのランプを別にして、一切の灯りは漏れ出ていない。玄関の重厚なドアを始め、あまり多くはない窓に掛けられた精緻なブラインドによって、内部で行われている一切を秘匿している。決して漏らしてはいけない何かがあるかのように。

大方のモダンテイストの建築物がそうであるように、ほぼ直線のみで構成された建物は、一切の過剰な装飾が省かれていた。おそらく壁紙に花の模様はないし、緑色のカーテンなんでものは備えていないだろう。玄関のランプが放つ柔らかい灯りが、ごく限られた領域を照らし出している。訪問者を歓迎するしるしは、他には見当たらない。ここでも看板や、無意味な公告は、深い部分に隠されている。誰の目にも触れることがないように。存在が膾炙してしまうと損なわれてしまう本質があった。

工業的な雰囲気を持つ車寄せにアルファロメオを止め、エンジンを切る。ここまで僕たちを運んでくれたエンジンは、ようやく稼働を止めた。どこか熱い空気が漂ってくるような気もする。ドアを開け、僕と少女は地面に立つ。少女は勝手を知っているように、建物のほうへすい

すいと進んでいく。僕も車にロックを掛け、その後が続く。

暗がりの中で見る少女の白いワンピースは、それ自体が発光しているようだった。もちろんそんなことはないのだけれど、周りの闇に飲み込まれることなく、服自体が生命循環活動を行っているように、僕には思えた。そう思わせるのは、少女の流動的な素振りだったのだろうか。軽やかに彼女は歩く。

建物の前に到着し、重厚なドアに手を掛ける。金属質な素材のドアだった。少女はそこに立ってやや思案する刹那があった気もするが、それは僕の思い違いかもしれない。僅かに内側に開かれたドアの隙間から、内部の光がようやく漏れ出てくる。淡い闇の中を一筋の灯りが走った。少女が先に光の中に飲み込まれて行く。

内部には空間が広がっていた。これほどの空間がどのようにして一つの建物の中に収まっているのか不思議なほど、そこは広々としていた。入り口付近は吹き抜けになっており、天井は随分高いところに位置している。もちろどこまでも空間が続いているわけではない。壁面は存在している。だけれども、照明がもたらす効果なのか、あるいは何かしらの心理的効果によるものなのか、その空間は実際よりも遥かに広く感じられた。

外観が濃いグレーを基調としているように、内部もモノトーンで統一されていた。白に若干のグレーを帯びた床、壁はそれよりも幾分濃いグレーとなっており、柱の部分には天井まで黒色が施されている。照明が当てられた天井は淡い白色となっている。下手をすれば物足りない印象、あるいは物寂しさを与えてしまう色彩だが、それぞれが効果的に配色されているうえ、ところどころに真鍮の装飾が施され、適切なアクセントが加えられている。

空間の中には優美にラウンジチェアとサイドテーブルが配置されている。調度は全体的に統一されており、直線の中に有機的な曲線が用いられている。そして座り心地が良さそうだった。決して機能面を損なっていることはない。どこか有名なブランドのものなのかもしれないが、僕はそうしたことにあまり詳しくないから、どこのブランドのもので誰がデザインしたものかなんて見当もつかない。そしてブランドのラウンジチェアというものは往々にして何食わぬ顔をしておきながら、驚くような値段のことが多い。ここにある幾つかのサイドテーブルとチ

エアのセットも、そういう類のものなのかもしれない。もちろん言うまでもないけれど、チェアとサイドテーブルの色は建物と同系色のものだった。どうやらここをつくった人物は厳密な基準を以って、家具の選択や配置を行っただけらしい。基準から漏れ出た色彩の一切が省かれていた。そんな色彩は、始めから存在しなかったかのように。

この時間だからだろうか、チェアに座っている人は見当たらない。等間隔で同じ方向を向いて置かれたラウンジチェアが、その上に重々しい沈黙を迎えている。もしそれが別の空間、例えば病院の待合室なんかだと、いささか陰鬱に思えるのかもしれないが、この建物内においては、いまの状況が最適解のような気がした。誰も座っていないラウンジチェアと、用途を持て余しているサイドテーブル。ここに余計な要素を加算すると、たちまち不純物が混じって、歪なものになってしまうのだろう。

室内には幾つかのペンダントライトが吊るされ、少し暗すぎる部分だったり、フォーカルポイントにはスポットライトが当てられている。適切な光度と光量のスポットライトが。ペンダントライトにはベルベットのシェードが付けられており、スポットライトの先には大柄な観葉植物やグランドピアノがあった。いずれもモノトニックなもので統一されており、過度な装飾は深い部分に秘匿されている。ある種の禁忌かのように。

スポットライトによって情緒的な陰影がもたらされたグランドピアノは蓋が閉じられている。綿密な手入れが定期的に施されているようで、埃や指紋はついていない。そのピアノによって、いままでどんな演奏がされてきたのかわからないけれど、気軽に触れてはならない、かなりの演奏スキルを求めているピアノに思えた。そうしたピアノ、高い自負を持っているピアノ特有の雰囲気を感じていた。

室内の奥の部分に設置されたロビーの中にも誰もいない。ロビーは淡いグレーのコンクリート調のもので、重厚な雰囲気を醸やっていた。人が誰もいないだけでなく、周辺の観光パンフレットや案内の類も見当たらない。壁の間接照明が暖かく周囲を照らしている。

少女はロビーに設置されたベルを鳴らす。不思議なことに、その小振りなベルからはわりに荘厳な音が響いた。世の中のベルはたいてい陳腐な音を出すものだけれども、そのベルからは

尊大な波紋が、静寂な空間に広がっていった。しばらくのあいだ、波紋は空間を揺蕩ったのち、速やかに収束していった。何事も始めから起きなかったかのように。

どこからかこちらへ向かって人が近づいてくる気配があった。物音も足音も発さず、純粋な人間存在自身から発せられる気配が近づいてきた。空気を押し分けるようにして、気配はロビーの奥、それもかなり遠い位置から近づいてくるようだった。目で見たり耳で聞いたりできる一切のしるしを用いることなく、だけれどもこちらへ何かが向かってきているということは感じることができた。その証左に、少女はもう一度ベルを鳴らすということはしなかったし、僕も自然と心構えをすることができた。予感というものに近いのかもしれないが、それよりはもっと実現可能性、ないしはリアリティがあった。

その気配は壁という物質的障壁をすり抜けて、僕たちの元へ届けられた。何かを介在することもなく、とても直截的に。そうしたある種のフィルターを介しないやりとりは、言語的であろうと非言語的であろうと、いささか気を張ることが要せられるが、いまでも例に漏れなかった。あるいは暴力的とも言える圧倒的な獣性に、晒されることになる。それに対して何らかの抵抗を示すことはとてもじゃないけれどできない。ただ一方的に蹂躪されひれ伏すことになるだろう。

気配は徐々に大きくなりつつあり、文字通り肌で感じられるようになっていた。身体的感覚を通して、その人物は僕たちに近づいていることを示していた。

その対象を未だに視認できないことが、僕を言い知れぬ恐怖で包み込んだ。対象の視覚的情報を手にすることができれば、未知性から生み出される分の恐怖は幾分軽減されただろう。しかし気配はいまのところ、どこまで詰めても気配であって、それ以上の情報を得ることはできなかった。

果たしてそれは彼あるいは彼女が意図したところなのだろうか。ふと僕は疑問に思う。もし自身の意図ではなく、勝手に気配が自己を主張してしまっているとしたら、実際上においてかなり不便な状況が生じるのではないだろうか。声を出しているわけではないが、これほど自身の存在の主張を周囲に振りまいているなんて。例えば、散歩を拒否する犬を捕まえるときなん

かには、犬に気配を察知され逃げられてしまう。散歩を拒否する犬というのは、往々にして気配を敏感に察知するものだ。

あるいは意図的に気配を出しているのだとしたら、一体どういった理由からなのだろうか。威嚇のようなものなのだろうか。取り留めのない考えが僕の頭の中を巡る。一部は僕の中の取っ掛かりとでも言うべきものに触れた感じがするが、その他の大半は誰に問えばいいのか、そして答えがあるのかどうか、まったく定かではない問いだった。意図されたものというよりか、もっと内奥の部分から持ち上がってくる類の問いであり、僕の頭の中に浮かんた。そして微かな名残り惜しさをもたらして、次の刹那には再び深い部分へ消えていった。

やがて気配が極大値に達すると、ロビーの奥の暗闇から小柄な初老の男が姿を見せた。僕は正直に言うと拍子抜けしたところを感じた。音を立てることもなく、気配を周囲に発することができのだから、どんな人物なんだろうと、ある種の期待を抱いて心待ちにしていた。

ところがいま僕たちの前に立っている人間は、取り立てて特徴のない男だった。もちろんどんな人間にも特徴は存在する。だがその人物は、至ってありきたりな語彙のみで特徴の記述が完結してしまう人物だった。何か特殊に文学的な語彙を用いる必要はないし、もし用いたとしたらその人物の正確な描写ではなくなってしまう。

おそらく背は彼の年頃の男性平均だろうし、肉付きもその通りだろう。それ相応の歳の取り方をしていた。一般に言われるように、いままで経験したことが身体つきに反映されていた。いままでの食生活、余暇の過ごし方、あるいは性生活のようなものが。それらが総じて至って普通だった。

身に着けている衣服も同様だった。藍色の目地の細かいチェックのシャツ、灰色の折り目が消えかけたズボン、黒の無地の靴下に同じ色の革靴。ジャケットはなし。昼間の街を少し歩いただけで何人もすれ違うようなスタイルだった。

髪は後退の気配を見せてはいるが、印象を損なうほどではなかった。若干の白髪が混じっているが、おそらくは若いころからこのままだったのだろう。ごく平均的な長さに切られ、定期的な手入れが施されている様子が伺えた。

一つ特筆することがあるとすれば、その初老の人物は姿勢が物凄くよかった。背中に頑丈な物差しが挟まれているかのように、首が綺麗に上に伸びていた。この年の人にしては珍しいかもしれない。いや、年齢を問わずこれほど姿勢が良い人はあまり見かけない。努力して姿勢を保っているのではなく、あくまで自然な立ち振る舞いの結果として、凛とした姿勢となっている。

彼は相変わらず足音を一切立てず、僕たちが立つ正面にやってきた。

「おかえりなさい」

彼が初めて発した音は、空間をゴム毬のように跳ねた。(男性の声に対してゴム毬という表現は適切ではないかもしれないが、実際に僕はそう感じた。)

おかえりなさい？

僕はその言葉に不自然な響きを覚えたが、少女はそんなこと気にする素振りにはなかった。彼女はただ小さく頷いた。それに合わせて彼女の短めの髪が波打つ。それは僕に何故か木漏れ日を思わせる。何故だかわからないけれど。

「こちらの部屋をお取りしております」

老人の声はよく響いた。声の高さはありきたりだったが、そこには天然のアンプが内包されているようだった。幾分か増幅されて聞こえた。あるいは空間が反響をもたらしていたのかもしれない。

老人は背後のキャビネットを開き、その中から一つの鍵を取り出す。これまでの建物全体の調度からの予想とは反し、鍵は古風な形のものだった。奥深くに差し込んで回す、純粋な解錠音がするタイプの鍵。そんな鍵がキャビネットの中に、何個も掛けられていた。

少女は鍵を老人から受け取る。

「ごゆっくりお過ごしください」

どうやら彼は、物事を最小限に留めて話すようだ。余計なことは一切含まれていない。

少女はありがとうと言い、会話をそこで終わらせた。左に向きを変え、歩き始める。僕は彼女に続く。エントランス空間から伸びた廊下の一つに入るとき、僕はそれとなく振り返りロビーの中の老人を見る。しかし、彼はもうすでにそこにいなかった。現れたときとは対照的に、一切の気配を出すことなく、その場から消えていた。余韻も何もかも、ロビーの中には残されていない。

廊下を進むとすぐにエレベーターについた。一基だけ備えられたエレベーターは厳密に扉が閉められていた。当然と言えば当然だけれど、僕にはその扉が開くことはないと思えるほど、重厚な扉はしっかりと閉じられていた。

少女がボタンを押す。やがて扉の右上部にあるライトが点灯し、音もなくゆっくりと扉が開いた。もし他のことに気を取られていたら、扉が開いたことに気付かなかったかもしれない。僕たちは開かれたエレベーターに乗り込む。

僕たちが完全に乗り込んだことをエレベーター自身が認識したかのように、特に何のボタンを押すことなく、乗り込んで向きを変えた瞬間、また音もなく扉は閉じられた。そしてほんの微かな振動を継起に、上昇を始める。もし振動がなかったら、エレベーターが稼働していることに気付かなかったかもしれない。

そこで僕は初めて違和感を覚える。このエレベーターには一切のボタンが存在しない。開閉ボタンも、行き先階のボタンもない。だからもちろんのこと大きな鏡もないし、階数表示もない。言うまでもないけれど、ビートルズの『Help!』が流れているわけもない。

だからといって、つまりいま乗っているエレベーターが、奇妙な部類のものだと気が付いたことによって、別に恐怖を覚えたわけではない。人によってはそうしたエレベーターに乗ったことで、強い恐怖、あるいはいささかの不安を覚えるかもしれない。世の中には想像もつかないほど多様な人がいる。僕も内部におけるざわめきを感じたが、それが動揺という形で表出することはなかった。

このエレベーターにはボタンがないけれど、目的の階まで安全に僕たちを運んでくれるという確信がどこかにあった。もちろんそれは少女が隣にいたことによって、得られた確信であっ

た。一人で気付かずにこのエレベーターに乗ってしまったら、僕も強い恐怖、あるいはいささかの不安を覚えていただろう。人目を憚らず取り乱していたかもしれない。もっとも人目というのがその場に存在すればのことだけど。その意味では、少女が僕にもたらした恩恵は大きかった。

音もなくエレベーターは上昇する。もしかすると下降していたのかもしれない。何しろ窓もないし、階数表示もない。そして最初の振動を別にして、一切の揺れを感じない。いま昇っているのか、ないし降りているのか判断しようがない。建物は見たところあまり高くなかったが、その地下に巨大な空間が広がっている可能性も否定できない。エレベーターの絶対的速度を測ることは難しい。外の景色や通過する階によって感じる相対的速度によって、エレベーターの速度を感じるものだ。そうした相対的速度の判断基準の一切を除かれてしまった場合、とても奇妙な感覚に陥る。いまどこに向かっているのかわからなくなる。小さな方位磁石だけで広大な砂漠を縦断するようなものだ。手掛かりは手元のささやかな針しかない。どこへ向かっているのか、向かう先に何が待ち受けているのか。

どれくらいの時間が経過したのだろうか。いつ停止したのかわからないまま、扉が音もなくゆっくりと開かれる。とても慎重に、分断されていた二つの空間を一つに繋ぎ合わせた。僕たちは外に出る。随分久しぶりに別の空間を訪れたような気がした。あくまで気がするという程度だろうけれど。

そこは深い紅のフロアシートが敷かれた長い廊下だった。所々にまたしても重厚そうなドアがあった。天井と床に設置された間接照明が、仄かに柔らかに照らしている。もう少し色温度が高く、明るい照明であつたら、幾分無機的な印象を与える廊下になっていたかもしれないが、橙掛かった色で光量が適切に抑えられた照明と、天井から吊るされた幾つかの鉢にシダが植えられていることで、見事な調和が生まれていた。溢れんばかりのシダを抱えている鉢は、テラコッタなんかではなく、金属的なものだった。

少女が先にエレベーターから下り、僕はそれに続く。フロアシートがとても上品に足を包む。彼女は迷うことなく、右に曲がって進む。不思議なことに、次々と通過していくドアには、部

屋番号らしきものが存在しない。プレートはドアに埋め込まれているのだが、そこに書き込まれるべきであろう数字がどこにも書かれていない。空白の真鍮製のプレートがただ埋め込まれているだけだ。

だが少女はどんどん先に進んでいく。彼女には目的地がはっきりとわかっているようだ。どうやって個々のドアを判別しているのだろう。いま横を通り過ぎたドアと、さっきまで通り過ぎてきたドアの違いは、僕には判断できない。それは次々とやってくる電車のように。もっとも電車には然るべき車両番号が割り振られているはずだが、そんなものは乗客には知らされない。たとえ知らされたとしても気にも留めないだろう。そんな乗客の気分だった。

少女が一つのドアの前で止まった。それはとても唐突に起こった出来事だったから、もし僕が他のことを考えていたら、例えばピアノを弾くときのビル・エヴァンスの姿勢なんかについて考えを巡らせていたら、少女にぶつかっていたかもしれない。それはそれで惜しいことをしたとも思ったが、そんなことはもちろん少女には言えない。もしぶつかったら、そこで多義的な交わりが生じていたのかもしれないけれど。

手にしていた鍵を差し込む。思った通り鍵はカチリと純粋な解錠音を立てた。少女がノブを下げると、重厚そうなドアは徐に内側に開いた。ドアは実際にあらゆる面において重厚だった。

少女が中に入る。どうやらここが目的の部屋だったようだ。プレートに数字がなかったように鍵にも数字、あるいは何らかのしるしもなかったのに、どうやって彼女はこの部屋が該当の部屋だと判断したのだろう。まさか当てずっぽうで入ったのではあるまい。何かしらの妥当と言える根拠を以って部屋に入ったはずだ。もしかするとその根拠はとても不純なものだったのかもしれない。しかしどうやっても僕にはそれがわからなかった。

鍵を壁面に設置された窪みに置くと、センサーが感知して自動で照明が付いた。古典的な見かけの鍵だけれど、機能においては申し分ないようだ。おおよそ5メートルほどの廊下の先にリビングスペースとベッドスペースの二つが広がっている。二つの空間はそれぞれ十分な広さを備えている。具体的な間取りはわからないが、世間には潤沢なスペースを持ちながらごちゃついた部屋もあれば、対照的に驚くほど空間を有効的に利用した部屋もある。部屋の見かけ上

の広さなんて、どうにでもなる。もっともある程度の技術と考慮が求められるけれど。僕の信条に則って、具体的な数字を以って部屋の広さを表現することはしないが、この部屋は十分のスペースを持っていた。

リビングスペースとベッドスペースの間には、床のカーペットの違い以外、特に目立った仕切りはない。言うまでも無く、モノトーンを基調とし、真鍮のアクセントを除くと、余分な色彩は取り除かれていた。それらは決してあってはならないものとして。リビングは天板が大理石のダイニングテーブルと、チェアが2個置かれていた。それらは金属製の細い脚を有しており、鈍い金色の装飾が僅かに施されていた。テーブルの上部に吊るされたペンダントライトによって、辺りの空間だけでなく、天井までほんのりと照らされていた。もしかすると厳密に長さを測って吊るされているのかもしれない。最適に空間を照らし出す長さを算出した上で。

ダイニングセットの隣には、リクライニングチェアが2個とローテーブルが置かれていた。見た感じとても座り心地がよさそうな代物だったし、実際に座ってみると包み込むような感じを与えつつも、しっかりと芯がある座面だった。

ベッドスペースにはクイーンサイズのベッド（おそらくクイーンだと思うけれど、僕の部屋のベッドはこれよりも幾分小さいものだから、並べられない限りキングとクイーンの違いが曖昧ではある。だから便宜上クイーンとした。）が中心に置かれている。ヘッドボードは黒に塗装されたラタン調のもので、天然素材が醸し出す独特の空気が、単調な印象を与えかねないスペースに、ひとしおのアクセントを加えていた。

サイドテーブルにはテーブルランプが置かれている。曇りガラスを素材とした乳白色のシェードと、細い金属のアームで構成されており、昔どこかの家具店で似た形状のものを見掛けたことがあったが、その小振りなサイズからは想像できないほどの値段が付けられていたことを覚えている。そしてその家具店ではスタン・ゲッツが流れていたことも。スタン・ゲッツを流して、小振りだけど高価なテーブルランプを置いている家具店。あそこを訪れたのはいつのことだっただろうか。

この建物全般に言えることだが、内装に対して深い理解を持った人物が、一貫してインテリ

ア配置を指揮したのだと思われる。高級なものばかり集めても、それでいいというわけではない。大抵の場合、高価な家具は強力な主張、あるいはデザイン性とでも言うものを持っているから、厳密な基準を設け、その範囲内に収めなければ、どこかちぐはぐなものになってしまう。例えば色合いや素材といった基準を。ここにはそれらの基準を遵守でき、要求に応える家具を揃えている場所を熟知した人物がいたはずだ。

もしかするとロビーのあの小柄な老人かもしれない。ふと僕はそんな考えを思い浮かべる。彼は自身が人に与える印象を熟知していた。そしておそらくは明確な意図を持って、コントロールしていた。だから実体を与える印象を考慮して、効果的に配置することができて不思議ではない。むしろそうしたことは彼の得意分野と言えるだろう。

いずれにせよ、いま僕と少女は二人きりで部屋にいる。かなり細やかな気を配られた部屋に。だがおそらく部屋の特長よりも、二人きりであるということのほうが、かなりの意味合いを持つだろう。僕はそうなることを望んでいたし、少女はそれに現実的な形で応えた。

少女はリビングスペースに進み、部屋の内部を大まかに点検した。ブラインドをずらし外の様子も確認したが、そこには深い闇の他は何も存在せず、ただ少女の顔が映り込んでいただけだ。やがて彼女は部屋の内容に納得したようで、リクライニングチェアに座る。

「そんなところで突っ立ってないで、あなたも座ったら？」

僕はダイニングチェアの一つを引いて腰を掛ける。それはどこか外延的なチェアだった。一回一回そのチェアに座るという経験が、蓄積されていくような。

「君はここに来たことがあるの？」僕は尋ねる。

「ええ、定期的に訪れているわ。ここは洗練された時間を与えてくれる」

「確かによくできた建物だと思う。それに上手い具合に秘匿されているから、人で溢れていないことも好ましい。君に言われなければ通り過ぎていたよ」

「あなたが知らないことを、わたしだけが知っているということもある」少女は涼しげな声で言う。

「むしろそうしたことのほうが多いんじゃないかな。僕はきみについて、はっきりとしたことをあまり知らない」

「何か飲まない？奥のキャビネットにウイスキーが幾つかあるわ」

僕は立ち上がって、キャビネットへ向かう。真鍮の取っ手を掴んで開くと、中にウイスキーの瓶が眠っていた。知っている銘柄も幾つかあったが、知らないもののほうが多かった。その中からカティサークを選んで手に取る。少女が隣にきて、棚の下の段に並べられていたグラスの中から二つをとった。少女からは太陽を思わせる匂いがした。その微かな匂いが鼻腔を撫で、僕はそれをさりげなく味わう。彼女は氷を取りにキッチンに向かう。

二人でチェアに座って、氷を入れたグラスを並べる。カティサークを注ぐと、煌めくような黄金色の液体が、グラスを浸した。そして僕たちは何も言わずにグラスを軽くぶつける。享樂的な音が響き、液体は波を打った。

少女はグラスを審美的な角度に傾け、カティサークのオンザロックを一口で飲み干した。世の中には審美的なグラスの傾け方があり、顔色一つ変えずにオンザロックを一口で飲み干してしまう少女がいると、改めて僕は思い知った。その事実には驚きつつも、どこかに飲びを覚え、僕は少しグラスを傾ける。

「最初一杯だけはこうやって飲むの」グラスをサイドテーブルに置いて、少女は言う。「身体をアルコールに慣らしてから、じっくりと味わっていく。そうするとなんだか美味しく飲める気がする」

そう言ってカティサークを新しく注ぐ。「あまりお酒の飲み方でとやかく言いたくないけどね。自分の内側に秘めておいて、静かに実践すればいいだけであって、人に教授するべきではないのはわかっている。男の人はお酒が強い女を好まないし」

「そんなことはない。少なくとも僕は好きだよ」そこそこの本意を以って僕はそう思った。

「珍しいね。それはわたしに合わせたお世辞ではなくて？」

「僕はお世辞なんか言わない」

「ふふ、聞いてみただけ」そう言って彼女は、ほんの少しだけカティサークを口に含めた。

それに合わせて僕もグラスを傾ける。彼女のように審美的とはいかなかったけれど。

「君とこうして飲んでいると、とても落ち着く。なんというか、ものごとがあるべきように進行している気がする」これは本気でそう思っていた。

「まだほんの少ししか経っていない。随分気が早いよね」

「そういうんじゃないんだ。なんて言ったらいいのかな…」

「完璧な言語なんて存在しない」とグラスを傾けて少女が言う。

「…そうだね。うまく僕の気持ちが君に届いていない気がする」

「なにか食べたくなってきた。そう思わない？」

少女は僕の言葉を聞き流してそう言った。でも確かに、空腹が俄かに持ち上がってきた。今日一日で、何かろくなものを口にしたらどうか。

少女はベッドスペースに向かい、ヘッドボードの脇にある電話を手にとって、番号を押した。仮初の沈黙が漂う。僕はその間に一日の出来事を振り返ろうとするけれど、回線が錯綜していてどうにも上手くいかない。昨日のことが今日のことになり、さっき起こったことがどこか別の場所での出来事のように思えてくる。軸と軸が混じり合い複雑な模様を描いているだけでなく、それぞれの軸もまた弛んでいる。一つ一つの模様は近視眼的には確認できるけれど、俯瞰的に見るとたちまち全景は滲んでしまう。水に浸されたメモ用紙のように。そこに一体何を描こうとしていたのだろう。疲労によるものか、あるいはカティサークの酔いによるものか。それほど疲れたつもりもないし、飲んだつもりもないのだけれど。

「なにか食べるものを持ってきてくれない？お腹がすいちゃった」電話が繋がったようで少女の声が届く。実体を伴わない彼女の声は直截的に、でもとても上品に僕の耳を撫でた。相手はおそらくさっきの老人だろう。

「ええ、それで構わないわ」彼女の声はやはり不思議な響きを有している。とても効果的に鼓膜を震わせ、心地よい揺らぎをもたらしてくれる。でもどこにも気取ったところはない。

「ビーフシチューとカルボナーラのどっちがいい？」少女がボリュームを上げて僕に尋ねる。どうしてその二つの料理が選択肢として同列になっているのか、いまひとつ理解できなかった。

何しろ材料も工程も保存可能期間も全く異なるはずだ。まあ随分遅い時間だし、料理を提供してくれるだけでありがたいのだろう。それに二つとも僕の好きな料理だった。

「カルボナーラで」僕は答える。彼女の声に比べて、それはありきたりな響き方をした。

少女が電話口に料理名を告げる。「それとスナックもちょうだい」と付け加える。お願いと言って、受話器を元に戻す。

リビングスペースに戻ってきて、チェアに腰を掛ける。「それで、何の話をしていたっけ？」

「僕の気持ちが君にうまく届いていないのではないか、という話」僕は答える。

少女は暫くの間思案する。だがすぐに口を開いた。「あなたはそのことに不満を抱いているの？」

「…どうだろう。言われてみると、はっきりとした答えを出すことはできないのかもしれない。いままでうまく気持ちを伝えることができたという経験は、ほんの僅かしかない。それも完璧とは程遠い形で」

「もちろん完璧にではないだろうけれど、少なくともわたしは、あなたから親密な気持ちは受け取っている。とても好意的な気持ちを」

「そのことに対して、きみはどういう感情を抱いているのかな？」

「とても喜んでいると思う」と少女は言う。声の響き方に、より一層特殊な要素を含ませながら。おそらく少女が意図したというよりかは、少女の感情の有機的な反映によるものだろう。

「思う？随分と曖昧な感じだね。でも君の僕に対する心象が、おおむね良好なものであってよかったよ。少なくとも僕からの一方的なものではなかった」

「あるいは不公平かもしれないけどね」少女は口角を僅かに上げて、悪戯っぽい表情を浮かべて言う。「とにかく、これであなたの不満は少しは解消された？」

「いくらかは」僕は頷いて言う。

時間がとてもゆっくりと流れていく。もっとも僕も少女も、時計をろくに見ることはなかったから、客観的な妥当性はないけれど、すべてのものごとが僕たち二人だけを残して、どこか遠いところへ去ってしまったような気分になった。でも世俗的な流れから取り残されて寂しい

などと言う感情は微塵も湧かなかった。むしろ本来の在り方に回帰したようだ。ここには僕と彼女だけがいる。

「おかわりはいる？」

僕のグラスが空っぽになりかけたのを見て、少女が言う。女性に酌をさせるのは僕の信条に反したので、僕はボトルを手にとって自分で注ぐ。グラスは再びカティサークで満たされた。

「わたしが注いでもよかったのに」

「いやなんとなくね。僕のささやかな信条に反したから」

「ふふ、おかしいのね。他にもそうした信条はあるの？」

「あるよ。例えばシャツは必ず左半分からかけるとか」これは僕の第一の信条だった。

「そうすることに何か意味はあるの？」

「意味なんかないさ。ただそうしたことの積み重ねだと思うんだ」

少女はよくわからないといった顔をして、グラスを口に運ぶ。別に僕だって意味なんてわかっていない。ただアイロンをかけるときは左からだっし、ウインカーを操作するときは薬指で操作する、というだけのことだ。

そのとき部屋のベルがなった。ロビーにあったものほど荘厳ではなかったが、世間一般のベルの概念からはいくらか逸脱した響きを持っていた。少女が立ち上がろうとするのを制して、僕が玄関に向かう。

ドアを開くとそこに居たのは、さきほどの小柄な老人ではなく、とても背の高い色白の青年だった。真っ黒の髪はその白い顔に垂れ、あまり表情を読み取ることができなかった。彼の手はキャスターに掛けられており、その上のトレイにはカルボナーラが二皿と、深い皿に入れられたポップコーンが乗っていた。それらの料理を乗せた皿は淡いグレーの色をしていた。

青年は何も言わずトレイを持ち上げ、僕の方に差し出してきた。僕はありがとうと言ってそれを受け取る。部屋の中に一步下がると、青年が扉を閉め、応酬はそれで完結した。いささか無愛想な気もしたが、青年は料理を部屋に届け、僕はそれを無事に受け取った。何も不足したものはないはずだ。僕はトレイを慎重にサイドテーブルへと運ぶ。

二つのチェアの中に置かれたサイドテーブルにトレイを運ぶと、少女が手を伸ばしてポップコーンを何個か掴んだ。長い間それを待っていたかのように。掴んでから口まで運ぶ動きは洗練されており、一切の無駄がなかった。僕はその様子を眺めながらチェアに座った。

「お酒、特に濃いウイスキーなんかを飲むと、ポップコーンを無性に食べたくなるの。そういうのってわたしだけかな？」

「あまり聞いたことはないな」カルボナーラに添えられたフォークを手にとって僕は答える。

「すごくお似合いのセットだと思うけどな」ポップコーンを食みながら少女が言う。

リクライニングチェアに身を預けたままでは食べにくいので、僕は起き上がってカルボナーラをフォークに巻き付けて口に運ぶ。それはよくできたカルボナーラだった。塩気とチーズのバランスは最適だったし、麺はモチモチしていた。そして胡椒も適切に振りかけられており、ベーコンの焼き具合はおそらく完璧な部類だった。

ポップコーンを食べる美しい少女と一緒に、美味しいカルボナーラを食べるというのはどこか奇妙な光景だった。二人で一緒にパスタを食べるというのはありそうだが、少女は自分のカルボナーラには手を付けず、ひたすらにポップコーンを食べていた。ときどき細い指についた油を舐めていた。その仕草はとても様になっている。ジャン＝リュック・ゴダールの映画で、アンナ・カレーナが煙草を吸うシーンのように。

やがて深い皿の三分の一程のポップコーンを食べきってから、ようやくフォークを手にとってカルボナーラを食べ始めた。

「わたしの顔に何か付いている？」

どうやら彼女の顔を見つめ過ぎたようだ。そんなこと僕は意識の片隅にも浮かばなかったけれど、確かに気づかないうちにフォークに巻き付けたはずのパスタは、その先端から解けていた。

「君はとても美味しそうにものを食べるね」

「ありがとう。そう言ってくれて嬉しいわ」そう言ってフォークを口に運ぶ。「あなたは人を褒めるのが上手いのね」

「そんなことは初めて言われたな。いままではむしろ、反対の意味合いのことを言われることのほうが多かった」

「本当に？もしかするとそう言った人は見る目がなかったのかもね」

「どうだろう。本人たちに聞いてみないことには何とも言えない」

そう言って僕は、深い皿に三分の二ほど残されたポップコーンを手に取って食べる。特有の食感と共に仄かな塩気が口の中に広がる。おそらくあの絶妙な噛み心地はポップコーン特有のものであって、他の食べ物では味わうことはできないだろう。世界のどこか辺境の村にはもしかしたら、似た食感でもまったく異なる食べ物が存在するのかもしれないけれど。少なくとも僕の見識の範疇ではポップコーンに特有だと思う。

「どう？ウイスキーと合うと思わない？」少女が僕の間を覗いてくる。その目には循環の息吹が見受けられた。

「初めてウイスキーと一緒に食べたけど、なかなかいける」

「でしょう。何もポップコーンが合うのは映画館で飲むコーラだけではないの」

「知らなかった」

そのとき突然、ある風景が僕の脳裏に差し込まれた。それはあまりにも唐突のことであり、何か明確なトリガーがあったわけでもないから、僕はいささかの戸惑いを覚えた。

僕たちは夏の初めのある日、森の中を巡る細い道を、黄色のフィアット500Cで走っている。よくイメージに浮かぶ黄色のフィアットよりも、幾分濃い黄色をしていた。色彩論的な黄色の中でもかなり濃い部類に入ると思う。キャンパストップの屋根が大きく開くタイプで、爽やかな空気が垂れ込める森の中を、屋根を開けて走っていた。心地良い空気の群れ群れが頬を撫でていく。ささやかな挨拶を交わしていくように。僕はその感触を純粋に気持ちいいと感じる。とても触り心地のいい生地のカッションに、顔をうずめたときのように。

隣には当時付き合っていた女性が座っていた。それがいつのことだったか、つまり僕のこれまでの人生において、どの部分でその人と付き合っていて、付き合っていた限定的な期間のど

の地点のシーンなのか、まったく思い出せない。思い出そうとしても、何一つ記憶の取っ掛かりが見当たらない。少なくともここ最近のことではない、随分と昔の出来事であると言えない。別に忘れようとしたわけではないけれど、その後に積み重ねられていった経験の束によって、次第に薄められていった。記憶は深い深い底に眠っていた。

でも完全には消滅しなかったようで、いま僕の頭の中に、そのときの光景が唐突に浮かんできた。黄色のキャンパストップのフィアットに乗って森の中を走る光景が。

空を薄く覆う木々の間から漏れてくる陽光は、どこまでも優しく、周囲の色彩に生命の予感をもたらしていた。風は大地の匂いを含んで、直截僕たちの元へ運んでくる。苔むした地面からは木々が何本も伸び、天然の観察者として屹立している。それらの木々の間を貫いて、道路はときどき緩やかなカーブを描いて、伸びている。おそらくは目的地のないドライブだった。

そうした風景の中を走りながら僕たちがどんな言葉を交わしたのか、そんなことはもちろん覚えていない。何か意味があることを話していた気もするが、それは当時の時間軸においてであって、今となっては記憶の古びた一層でしかない。当時における意味合いが、現在もそのまま保証されているわけではない。

どうしていま、そんな光景が再生されたのだろうか。長い間ずっと何処か奥深くに保存されて、その存在すら忘れかけていたものが、こうして蘇ってきた。かなりの彩度をもって。

僕は随分と長い間、その映像がもたらした余韻に浸っていたようだ。少女が不思議そうに僕の顔を覗いていることに気が付いた。

「どうしたの？」

「いや、何というか…僕の中の古い映像が蘇ってきた」

「どういうこと？」

そう聞かれても、上手く説明できる自信はない。

「昔、経験した一コマが突然再生されたんだ。君にもそういうことはない？」

「しばしば、というほどでもないけれど、あることはあるわ。何がきっかけとなるのかはわからないけれど。どういう映像が浮かんできたの？」

「黄色のコンバーチブルのフィアットに乗って、森の中を走る映像」僕はそのままのことを言う。言葉では表現しきれない数々のものが、抜け落ちてしまったような気もするが、これが最も適切に伝えることができる方法だった。

「なかなか素敵な光景じゃない」少女が空になったグラスに、新しくカティサークを注ぎながら言う。「それはあなたが実際に体験したこと？」

僕は頷く。「細かいところは随分と曖昧になってはいるけれど、確実に僕が体験したことだ」「それが、どうしていま思い出されたのかしら？」

僕は首を振る。「まったくわからない。いままでずっと何処か遠くで保管されていたものが、突然浮かび上がって来たんだ」

「もしかするとスコッチウイスキーとポップコーンの組み合わせのせいかもしれないわね」少女は笑みを浮かべながら言う。その笑みは僕の脳裏に浮かんだ映像の女性と、どこことなく似ているような気もした。

「…まさか」僕は皿の中に入れられたポップコーンに手を伸ばし、口に運ぶ。特有の食感が口の中で弾けるのを感じながら、塩気が広がっていくのを味わう。

「記憶って案外適当なもので、何食わぬ顔してひょいって顔を覗かせることもあるわ。その契機がポップコーンであったとしても、別に不思議ではないかも」

「どうだろう。あまりポップコーンに対して思い出はないな。映画館で気が向いたときに買うくらいで」

「それは結構もったいないことをしているわ。映画を見ながら食べるポップコーンもいいけれど、それだけで済ましてしまうのはナンセンス」少女が皿に手を伸ばす。

「君は随分ポップコーンに対して肩を貸すんだね」

「あなたにも何かそうしたものが一つくらいあるでしょ。わたしの場合、それがポップコーンだったってだけ」少女が柔らかに咀嚼しながら言う。「それで？」

「いや、その先はない。ただ運転している光景だけが浮かんだんだ」

「ふーん、そのあとあなたはどこへ向かったの？」

「僕だけじゃなかった。その当時付き合っていた女性と一緒にだった。たしか二人で森の中にあるカフェに向かったと思う」映像を端緒に、記憶の影がおぼろ気に姿を見せてきた。

「いいじゃない。森の中にあるカフェ」

「うん、木漏れ日が差し込む森の中に、ロジ風の建物があって、水琴窟の音が鳴っているんだ。苔むした庭にあるガーデンチェアに座って、コーヒーを飲みながら、僕はヘミングウェイ、彼女は確かプルーストを読んでいた」

「失われた時を求めて？」

「おそらくそうだったと思う。もう随分前のことだから、はっきりとは覚えていないけれど」

「いい思い出じゃない。それが色褪せないでずっと保管されていたわけね」

「ああ、でもどうしていま唐突に思い出したんだろう」

少女は僕がどこへともなく投げかけた問いに対して、何も言わず首を僅かに横に傾けることで答えた。さあ、わたしにもわからない、とでも言わんばかりに。実際に彼女はそう口に出しており、僕がそれを聞き取らなかったのかもしれない。

僕はカルボナーラをフォークに丹念に巻いて口に運ぶ。塩気が混じって最初とは違う味にも感じたが、それはむしろチーズの濃厚さを際立てていた。僕たち二人はパスタを食べ進める。フォークと皿が触れる音と、二人の小さな咀嚼音以外に音は存在しない。この建物は防音装置も十分なようで、本当に他の音が消え失せてしまったかのような感覚に陥る。部屋は深い砂の中に覆われているようだった。

やがて僕はパスタを食べ終わる。温かい充溢感を覚える。グラスにカティサークを新たに注いで、まだパスタを食べている少女にこう尋ねる。

「君のことを少し教えてくれないだろうか」

少女はパスタを口に入れたまま、少し驚いたような顔をする。どうしてそんな表情を浮かべたのかはわからない。あるいは僕が穿った見方をしただけかもしれない。ただ、僕は何かの外れなことを口にしてしまったような気分になった。少女は口の中のパスタをゆっくりと飲み下してから口を開く。

「わたしのどういうことを知りたいの？」その顔には既に、先ほど浮かんだ驚いたような表情はなかった。やはり僕の思い過ごしだったのだろうか。

「例えば年齢とか」

「十八歳」事もなげに彼女は言う。

「十八歳？本当に？」

「そんなことで嘘をついて何になるの？わたしは純粋な十八歳よ」

純粋な十八歳。その言葉の響きに不思議な印象を覚えたが、それよりも彼女が口にした事実に耳を疑った。

「とてもそんな風には見えない」

「よく言われるわ」そう言って少女はフォークを置いて、代わりにグラスを手にする。「ねえ、わたしってそんなに老けて見えるのかしら」

「…いや、決してそんなことはない。決して。ただ何と言うか」

「なに？」

「どこかそうした評価軸では測れないものを、君からは感じる。年齢というある種の通俗的な評価軸ではどうしても測れないものを」

「…それはどう受けて止めたらいいいのかしら」

「少なくとも僕には君を貶す意図はないよ」

「そう。ならいいわ」そしてグラスの中身を口に入れる。「他に聞きたいことは？」

「そうだね。とてもつまらない質問でもいいかい？」

少女は仕草でどうぞと示す。

「世間一般の十八歳なら、学校に通って受験勉強をしてという流れだろうけれど、君はそうしたことはしないのだろうか」

「ええ、まったく興味がないから」グラスの中身を見つめながら言う。そこに何かの示唆を見出すように。「そんなこととして一体何がしたいの」

「…それは僕も未だによくわかっていない。ただ何となくみんなが受験するか受験をし、みん

ながどこかの企業に入るから僕もそうして、そんなことをやっていたら現在になっていた」

「そのことについてあなたはどう思っているの？」

「間違っただけをしたとは思っていない。でもそれが正解だったのかはよくわからない。他の選択肢ももちろんあっただろうけれど、いまとなっては仮説にすぎない」

「そこに辿り着くことはできない」少女がゆっくりとグラスを回しながら言う。それに合わせて氷がぶつかる小気味いい音が、ほんの一時だけ響く。

「ああ、その通りだ。どうやっても、たとえどんなに切実に願ったとしても、辿り着くことはできない」

「いまのあなた自身に満足している？」

僕は答えをしばらくの間保留する。答える代わりに、空になりかけたグラスに新しく氷を足す。氷はやはり小気味いい音を立てた。

「それはとても難しいことなんじゃないかな。僕はそう思うよ。いま充実しているとそのとき思っている、後になってみると案外そうでもなかったりする。あるいはその逆もあり得る。いずれにしても、一つひとつゆっくりと積み重ねていくしかないんじゃないかな」

「それがあなたのいま時点での答え？」

僕は無言で頷く。そしてグラスにウイスキーを注ぐ。すぐには飲まず、グラスを口に近づけたまま匂いを味わう。どこか懐かしい断片が、ウイスキーに付随して時間軸を超えて運ばれてきた。

「話が幾分抽象的になってきた気がする」僕は呟く。誰に対してということもなく。

「あら、そうした話は嫌い？」

「そんなことはないけれど、君の実際的なことを知りたい。君のことを尋ねたつもりが、いつの間にか僕が一方向的に話している」

「わたしの実際的なこと…」

「そう、僕はまだ君の年齢くらいしか知らない」

少女は手を伸ばし、ポップコーンを掴んで口に持って行く。「隠したり、もったいぶったりす

るわけではないけれど、特にこれと言って話すことはないの」

「まったく？」

少女は頷く。

「君は兄弟はいる？」

「姉がいるわ」

「何歳上？」

「三歳」

「そのお姉さんとは仲はいい？」

「ねえ、なんだかこれって誘導尋問みたいじゃない」

「たしかにそうかもしれない。このまま続けても構わない？」

「あなたがそう望むのなら」

「じゃあ、もう少しだけ。好きなものは？」

「当たり障りのない質問ね」

「そうだね。でも他に何か気の利く質問が見当たらないんだ」

少女は軽く首を横に振る。やれやれと言うように。「映画を見るのが好き」

「どの映画が一番のお気に入り？」

しばらく考え込む。「難しい質問ね。そのときの気分にも左右されるわ。ハードな気分に入り

たいときは『ゴッドファーザー』とか。ボヘミアンなときは『パルプ・フィクション』とか。

たまにだけど陰鬱なものを見たいときは『セブン』

「だから君はポップコーンが好き？」

「そんなに安直ではなくて複雑な過程があったけれど、結論としてはそうよ」

「ぜひ君と一緒に映画を見てみたいな」

「あら、それはデートのお誘い？」

「そう捉えてもらって構わない」

「なんだか回りくどい言い回しをするのね」

「たぶん僕の癖だろう」

そこで僕はいったん会話を打ち切って、グラスを手にする。少女もそれに倣う。随分と飲んだ気もするが、厳密に数えていたわけではないから何とも言えない。ただ口に含ませているだけの時間も多かった気もする。少女の顔には一切と言っていいほど、変化は見られなかった。赤みを増すようなこともないし、呂律もしっかりしている。

「たしかプロジェクターがこの部屋にあった気がする」少女がグラスをサイドテーブルに戻し言う。立ち上がって壁の一面に備え付けられた開き扉に向かう。その扉は黒の金属調の素材でできていたが、もしかすると実際に金属で構成されていたのかもしれない。容易には中身を開陳しないような雰囲気 را帯びていた。少女がノブを掴み扉を開く。

扉の先はウォークインクローゼットだった。衣服を掛けられるのは一部で、そこに空っぽのハンガーが何個かぶら下がっており、その他はラックとなっていた。ラックもほとんど物は置かれておらず、空白を携えて何かが置かれるのに。見たところ埃は溜まっておらず、入念な清掃がここにも行き届いていることがわかった。

少女はクローゼットの中に踏み入り、中を見回す。僕はその様子をリクライニングチェアに深く腰掛けたまま眺める。

「あったわ」手を上に伸ばして、少女は少し背伸びをする。予想していたよりも幾分小型の機械を手にとって、彼女がこちらに戻ってくる。プロジェクターと言ったら、丸まったチワワくらいの大きさはあると思っていたが、最近のものは片方の掌に乗るサイズにまで小型化および軽量化されているようだ。

電源を差し込み、起動ボタンを押し、やがて光が壁に投影される。

「何が見たい？」少女が僕に訊ねる。

「うーん、そうだね。初めて訪れた瀟洒な建物で、綺麗で若い女性と、ウイスキーを片手に鑑賞するのにふさわしいものかな」

「ふふ、随分要求が多いのね」

「そういう映画はあるだろうか」

「『』なんてどう？」

「申し分ない」

画面上で『』が選択される。レコードを選ぶときのような情緒、たとえばジャケットを見て収録曲を確認して、以前流したときの思い出なんかも加味したその上で初めて選ぶ、といったものはなかったけれど。画面が暗転して、小型のプロジェクターが微かに稼働音を上げる。

以前『』を見たのはいつだっただろうか。これには個人差が大分あるのかもしれないが、僕の場合映画を誰と見たのかは覚えているけれど、いつどこでのことなのかは、曖昧になってしまふ。そうした情報は僕の中ではあまり重要な位置を占めないのだろう。もっとも誰と見たかは鮮明に覚えているから、その人と親密に過ごした時期というのも、付随して思い起こされるのだけれど。

いずれにせよ、『』を鑑賞した記憶というのは、いまここで上書きされていくはずだ。様々な関連する要素も含めて。例えば、情景や時間や酔い具合といったもの。でもそれで以前の記憶が損なわれることはない。それは僕の中で大事にしまわれており、何者も干渉することはできない。時の流れによる風化作用によるもの以外は。

時々、それらは互いに混じり合うことがある。暖流と寒流がぶつかるみたいに。でも本質の部分は決して露呈することはないし、失われることもない。丁寧に大切に保管されている。ぶつかって混成された記憶は、僕を大いに戸惑わせることになるが、別にそれで日常生活に支障が出るわけではない。ただどこか物寂しい思いをするだけだ。人はそれを何と呼ぶのだろう。

映画が始まる。

そしてまた一日が始まる

瞼に優しく投げかけられる陽の光で僕は覚醒した。じんわりと視界の隅から、照らし出す光だ。ゆっくりと慎重に瞼を開く。触れるとすぐに壊れてしまうものを、箱から取り出すときのように。

僕はベッドの上で上体を起こし、辺りを見回す。そこは見慣れた風景ではなく、初めて目覚める場所だった。僕の中の軸が少し揺さぶられる。その揺れを抑えるために周囲を確認する。

徐々にどこで眠っていたのかを思い出していく。断片と断片が接合されていく。時々適切に繋がらない部分があったけれど、それはいまに限ったことではない。時として思いもよらないもの同士が、恣意的に結びつくことだってあり得る。多量のウイスキーを飲んだときなんかは往々にして。

身体を起こしたまま、横を見ると少女はいない。彼女の微かな面影と、それに伴う窪みが残されているだけだ。少し前まで彼女がそこに残っていたであろう証左がそこにある。

彼女はどこにいったのだろうか？

ブラインドの隙間からは陽の光が差し込んでいる。光は僕だけでなく、部屋のある一定の範囲を明るく照らしている。もちろん均等ではなく、明瞭の陰影を描きながら。照らされた部屋の部分は、僕とは違って随分前から覚醒していたようだ。あるいは眠りについてすらいなかったかもしれない。

影は斜めに伸び、時計の針はスムーズに動いている。秒針と共にその影も周回している。二つは均一な動きを正確に保っている。どちらか一方が遅れたり、追い抜いたりすることは決してない。

記憶を繋がらせる作業を速やかに終わらせ、ベッドから脚を出し、立ち上がる。軽く身体を点検していく。かつての肌の張りはいささかの翳りを見せ始めているが、それ以外は特に問題はない。頭痛なんかも確認できない。

軽い空腹を覚え、何か口にするものを探そうと、キッチンスペースに向かおうとすると、そ

ちらから少女がやってきた。

「おはよう。よく眠れた？」

僕は頷く。彼女はすでに白いワンピースを着ていた。髪も乱れてはおらず、一通りの身支度は既に済ませているようだ。

「いつの間に眠ってしまったんだろう」

彼女はそれに対してただ軽く首を傾げるだけだった。

「ねえ、お腹空いてない？」

「うん、空いている。ちょうど何かないか探そうとしていた」

「だったらどこかに食べに行かない？」

「いいね。でも少し待ってくれないかな。この格好だから」

少女は視線を落とし、僕の下着だけ履いた下半身を見つめる。そして軽く頷く。

「待ってる」

僕はベッドスペースに戻り、ズボンを探す。起きた時は気が付かなかったが、ズボンはベッド脇のサイドテーブルに丁寧に畳まれて置いてあった。誰かからのギフトのように。僕はそれを手に持つ。

洗面所に行き、照明をつける。設置された窓からは光が差し込んできており、それが鏡に反射して、僕の後ろに鮮明な影を映している。何気なく見つめた鏡の中の自分の顔は、どこか見知らぬものが含まれているような気がした。いつもと何かが違う。それが何によるものかはわからない。ただ角度が違っていただけかもしれない。あるいは育てている植物が、気が付くと随分成長していたような感覚かもしれない。でもそれが悪い兆候とは思えなかった。

持っていたズボンを床に置き、着ていたTシャツと下着を脱いで、ズボンの上に置く。シャワールームに入り、ノブを捻る。鋭い水が肌の上を跳ね、全身をつたって滴り落ち、排水溝へ飲まれていく。鏡に写った身体の箇所を細かく点検しながら、全身に満遍なく水を当てる。

シャワーを終え、シャワールームから出て、棚に丁寧に積まれたタオルの中から一つを手にする。それはとても触り心地が良く、顔に近づけると長年使われてきた木工家具のような匂い

がした。どうしてタオルからそんな匂いがするのだろうか、よくわからないけれど、その匂いに包まれながら全身の水滴を拭っていく。

服を着てシャワールームから出ていくと、少女はつばの広い大きな白い帽子をかぶって待っていた。

「行きましょう」

アルファロメオに乗って、建物の敷地から出て、道路を昨日きた方向とは反対へ向かう。車は軽やかにエンジンを唸らせ、真っすぐな道を進む。周囲には草原が広がっており、なだらかな丘が彼方にまで広がっていく。その丘のところどころに急峻な屋根を持った建物が点在している。いまでも各々の役割に従事しているのか、あるいはずっと昔に放棄されたもののなのか、この距離からは判別できない。ときどき地名を表記した看板を過ぎるが、どの地名も耳にしたことのないものばかりで、るびがないと読み方すらわからない。

穏やかな気温で、風も強くない。太陽はまだ完全には昇りきっておらず、柔らかな陽光を投げかけている。光は何らの遮蔽物に分断されることなく、満遍なく辺り一面にもたらされている。どこまでも地面を覆う草と、たまに何かの象徴のように聳えている木々が、それを享受している。空はどこまでも澄んでいる。

車を快調に飛ばしていく。別に急いでいるわけではないけれど、行く手には遮るものが何もないから、自然と速度は上がっていく。滑らかな路面から伝わる重奏音と、絶え間なくエンジンから伝わる囁き。それらが僕たちを包み、時折の車体の揺れが優しく働きかける。

僕たちは何も話さなかった。話すまでもなかった。話したい内容はあったけれど、それを口にしたら、隠された柔らかな思いが空気に触れ、損なわれてしまう気がした。あくまで可能性の話ではあるが、万が一にもそんなことが起こってしまったら、僕は大きい戸惑うだろう。だからただフロントガラスの向こうに広がる世界を見つめ、それらが倦むことなく通り過ぎていくのを眺めていた。それだけでよかった。

やがて遠くの方に一つの建物が見えてきた。これまで通り過ぎてきた建物と同様に、険しい角度の屋根を持っており、道路の随分遠いところにボツンと見えた。それは深くて、でも鮮や

かでもある赤い色の屋根だった。ゆっくりと建物は大きくなっていき、やがて詳細な全貌を視認できる距離にまで至った。

「あそこよ」

少女に言われるまでもなく、そこが目的地のような気がしていた。他に建物らしきものは何もなく、あったとしても道路からは隔てられた場所にあったから、というのが現実的な理由だが、もっと幻想的な理由を求めるとしたら、確信とまではいかないまでも、そこに何かがあるという無意識の領域からの言伝を受けていた。

アルファロメオの速度を落とし、丁寧に左に曲がって建物の敷地に入る。未舗装の地面をゆっくりと進み、白い枠線の中に停める。

エンジンを切ると、突如としてどこからか、迫るようにしてある考えがやって来て、僕の頭の中を占領する。おそらくそれは、僕の神経系からやって来たものなのだろうが、僕にそれを止めることはできない。打ち寄せる巨大な津波を前にして、僕はどこまでも無力だった。なだらかな砂浜はたちまちのうちに、濁流に飲み込まれ、その姿を久遠の内に消した。深く深く、あらゆるものを飲み込んで、打ち消していく。

対処法として防波堤を幾つも設置していたが、そんな努力を容易く水泡に帰す勢いで波は進む。軽々と乗り越え、木々は根元から攫われ、並んでいた家々も塵へと砕かれていく。砂の城を壊すかのように。叫喚が轟音の合間から僕の耳に届く。飲み込まれんとする間際の、嘎れるような声だ。救いを求めている。だがどうすることもできない。僕は座席に座ったまま打ちひしがれる。

「…どうしたの？」

消えそうな声が遠くから聞こえる。いや消えそうなのは僕の意識だった。あらゆる回路が分断され、正常に機能するために必要な装置が、その活動を止めようとしていた。

濁って渦を巻いた水に溺れている。必死に顔を水面から出そうと、手足を動かすが、言うことを聞かない。たとえ動いたとしても、上昇することは能わなかっただろう。木屑のように弄ばれるしかない。身体中の穴という穴から、水が猛烈な勢いで流れ込み、意識が霞んでいく。

焦点が合わなくなり、涙が頬を伝い、舌が溢れんばかりに膨らんでいく。心臓が猛烈な勢いで鐘を鳴らしたかと思うと、急速に萎んでいったりして、胸が真ん中から裂けそうになる。

ぼんやりと霞み、鉛を撃ち込まれたかのように重くなった頭の中を、一つの考えが駆け巡る。初めは片鱗に過ぎなかったが、やがてそれはどんどん膨張していき、他の正常な思考を排斥していく。我こそが正義とばかりに。どこまでも破滅的だった。その拡大を阻止する機能は、とうに失われてしまった。肝心な時にはまったく役に立たない。いや圧倒的過ぎるのだ。その力を前にしては何もすることはできず、ただ耐えて過ぎ去るのを待つしかない。果たしていつになるのか。過ぎることはあるのだろうか。僕にはわからない。ただ一つわかることは、たとえ過ぎ去ったとしても、必ずまたやってくるということだ。

「大丈夫…？」

とても遠くからその声が聞こえる。幾重もの層が間にあるように、小さくくぐもった声だ。ほんの少しでも揺さぶられると、たちまち消え失せてしまうかのように。でもそれは確実に僕の耳に届いた。

その声に引き上げるようにして僕は意識を取り戻す。どこまでもゆっくりと。僕は椅子に座ったまま涙を流し続けていた。頬に筋を残し、ズボンに染みを作っていた。どうして泣いているのかわからない。どのようにすれば止まるのかもわからない。次から次へとこぼれていく。僕はそれを見つめるともなく眺めていた。別の誰かが泣いているかのように。

まだ恐怖の面影は重くのしかかり、心臓はとても早いペースで動いていたが、幾分ましになってきた。深く息を吸い込み、新鮮な空気で満たす。ゆっくりと吐き出し、呼吸に意識を向ける。

視界が元に戻り始め、辺りの光景を正常に認識し始めた。少女が僕の顔を覗き込んでいた。その顔には深い表情が刻まれていた。

「大丈夫…？」

さっきはとても遠くから発せられたと思われた声は、少女の口元から発せられたものだった。いまでは大分クリアに聞こえるし、そこに含まれた感情も図ることができる。

「ああ、大丈夫…」

「本当に？ひどい顔をしているわ」

「たまにこうなることがあるんだ。発作のようなものだよ」

「…苦しそうな表情だった」

「ときどきこうなってどうすることもできなくなってしまうんだ…。操舵権を完全に乗っ取られてしまって、自分では何も手出しできない。成す術もなく自分を何者かに占領されてしまう」そこで一度区切って、大きく息を吸い込む。「いろんな所を回ったし、いろんなことを試したけれど、治ることはなかった。」

「ごめんなさい、何も助けてあげることができなくて」少女は少し息苦しそうに言う。

「いいんだ。気に病むことではないから。僕自身がどうすることもできないんだから、君に手出しできるわけではない」

どこか彼女を突き放した言い方になってしまったが、他に適切な言い方が浮かばなかった。それによるせいか、あるいは人が意識を喪失しかける様を目の当たりにしたからか、少女は気まずそうにしていた。

素直に謝って言い方を訂正すればよかったのかもしれないが、ようやく回復した後で、僕にはそんな余裕はなかった。ゆっくりと息を吸って、十分な時間を掛けて吐き出す。二人の間には沈黙が漂い、静かな呼吸音だけが聞こえる。

「もう大丈夫だ」

僕はそう言って、車のドアに手を掛けて、外に脚を出す。少女は何も言わず、しばらく空中のどこか一点をじっと見つめていたが、やがて気を取り直したかのようにドアに手を掛ける。心地良い風が僕の頬を撫でる。そこには深い慈しみが含まれているような気がした。おそらくそれは、先ほどまで僕が底に陥っていたからだと思う。そんな僕に風が気に掛けてくれている。あるいは一時的に感覚が研ぎ澄まされていたからかもしれない。

僕は辺りをぐるりと見まわす。建物と何本かのシラカンバの他には、草の海が広がっていた。透き通るような緑の一面の中に、建物とシラカンバと僕と少女が浮かんでいる。異物としてで

はなく、それらの総体を成す要素の一部として。あくまで一部の含まれるものとして僕たちは存在していた。吹き抜ける風に揺られ、柔らかな太陽に照らされている。僕はまた深く息を吸い込み、ゆっくりと吐く。その行為にはとても重要な意味が含まれているように。けっしてメタファーなんかではなく。

少女がこちらに歩いてきて、僕の隣に立つ。彼女の髪からは何故か太陽の匂いがした。どのような匂いが太陽のそれなのかは、厳密に定義あるいは言語化することができないけれど、一つのささやかな比喻として適切なものが、太陽だった。うん、あれは太陽の匂いだった。金木犀でもローズマリーでもココナッツでもなく。

彼女は隣に立って、何かを考えているようだった。きっと幾分シリアスな問題について考えていたのだろう。深刻そうな表情を浮かべていたし、動作がどことなく落ち着きがなかった。それは彼女にしては珍しいことだった。しばらく何かについての考えを巡らせ、やがて一つの結論に達したのか、少女は顔を上げた。僕はその一連の仕草を横から眺めていたのだけれど、その横顔はどこまでも美しかった。

唐突に彼女は手を伸ばして、僕の手を取った。突然の出来事だったから当然僕は驚いた。実際にほんの少し飛び上がっていたかもしれない。彼女は力強く、でもどことなく優しく、僕の手を握って、顔を少し上げて僕を見つめた。そして僅かにはにかんだ。照れくさそうに。その表情は僕の心臓を強く打った。

何をもって少女にそのような行動を取らせたのかはわからない。どうしようもなく僕が落ち込んで、それに対して何もできなかったから、彼女なりの慰めの方法を考えていたのかもしれない。あるいは慰めという非対称的な行為というよりかは、そばにいるということを彼女なりに伝える方法だったのかもしれない。きっと言葉を掛けられるよりも、隣に立って何も言わずに手を握られたほうが、僕は救われていたのだろう。深い底に一筋の灯りをともすように。

僕たちはしばらく手を握り合って、その場に立っていた。時間の感覚は失われていた。一つの大きな束が解きほぐされ、繊維が一つ一つ散らばっていく。流動的な動きを見せるものもあれば、幾何学的模様を描くものもあった。各々に込められた記憶もそのままに。もちろんその

間にも、人々は怠りなく活動し、物事は忙しく運ばれているのだが、二人の間には柔らかい停滞が漂っていた。陽だまりの中にいるように。

少女は目を閉じたまま手を握っていたが、時折そっと瞳を開いて、辺りを見回してその後僕の目を見つめる。彼女がそのとき何を思って、僕の瞳の中に何を見出していたのか、いまとなっては確認する術は失われてしまった。だけど彼女が見つめていた物象、あるいは感性は、繋がれた手を通じて、僕の中にも微かに伝わってきていた。それは感覚を研ぎ澄まさなければ感じ取ることができないが、その時僕のコツは自然と高められていた。一見すると落ち着いた時間が流れていたが、案外僕の内側においては様々なものが高ぶっていたのかもしれない。

感覚が研ぎ澄まされていたからか、彼女の手の感触が直に伝わってきた。それはとても滑らかで触り心地が良かった。ずっと触れていたいという思いに駆られた。とてもそんなことを口に出して言うことはできないけれど。その代わりに僕は心ゆくまで感触を味わっていた。柔らかく、丁寧に扱わないとすぐに傷んでしまうものを触るときのように、大切に。時折、少しだけ指を動かして、肌と肌が密接に触れ合う感覚を確かめた。それはいささか味わい深いものだった。

風が僕たちの間を抜けていく。柔らかな草の匂いを大いに含んだ風だった。その匂いを鼻腔の奥深くまで取り入れて、ゆっくりと吐き出す。僕らはその場から一歩たりとも動かず、ただ手を握り合っていた。建物の影から一羽の鳥が羽ばたいて、太陽が昇る空に向かって飛んでいく。まるで羽ばたきの細かな音まで響き渡っているかのようなようだった。鳥は少し上がったところで弧を描いていたかと思うと、やがて向きを定めてのんびりと飛んでいった。その姿が点となって見えなくなるまで僕は追いかけた。特に意味はないのだけれど。でも僕はそんなものに対してまで意味を求めてはいないし、それは彼女にしてもそうだったと思う。誰もいない二人の時間を大いに楽しんでいた。ただ手を取り合って。

随分と長い時間が経ったはずだった。もちろんそのことも何かを意味するわけではないし、そもそも客観的な時間を計測する必要性が失われていた。そうした感覚に陥ったのはかなり久しぶりの気がした。物象化した時間に追われ支配され続けていた。それに対して違和感や嫌悪

感を抱く余地すらも奪われていた。それをいま、ほんの一時のことなのかもしれないけれど、僕は取り戻していた。

鳥の群れが、僕たちの遥か上を駆けていた。各々が思うままに翼を動かし、だけど一つの方
向に向かって進んでいった。視界に現れて、反対側に消えていくまで、ゆっくりと時間をかけ
て移動していく。